キモ男　カンバ〜〜ック♪

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キモ男　カンバ～～ック♪

【Ｎコード】
Ｎ８１５１Ｚ

【作者名】
タゴサク

【あらすじ】
前作のゼロのキモ男さんのカンバックモノです。

キモ男さん、再び。（前書き）

前作のゼロのキモ男さんのカンバックモノです。
煮え切らなかったハーレムルートとか、その他を改めて見ます。
ヤケでルイズも面倒見ますよ。エエ。
ツルペタ、巨乳、ロリに年増バッチコイの変態ＳＳ目指します。

キモ男さん、再び。

・・・・・。
オレの名前を知ってるかい？
ヤマダタロウと言うんだぜ。
人生二回目の引き篭もり、誹謗や中傷にゃ負けたけど・・・。
やっぱりルイズに召還だぁぁぁぁ・・・。

タロウです。
皆様、オイラの事を覚えてるか？
一回人生を完全に終わったのに、またタロウしています。テへっ♪

さて、現状を説明しますと・・・。
広い草原があります。
私は先程まで自分の部屋に引き篭もってネットしてました。
手元にはノーパソもあります。
お気に入りのフュギィアさんも大切に懐に入れてありますよ。
ええ、ゼロ魔２０巻のあのテファたんです。
で、目の前にいらっしゃるのが・・・。
ツルペタツンデレ爆発桃髪さんです。
そう、ルイズですよ。

はぁ・・。またですか・・・。
ネ申様、居るのでしょ？
また使い魔ですか？

（タロウよ、カンが良いのぉ。）

もう慣れました・・。
今回は死ぬまで引き篭もり続けるつもりだったのに。
どうして引き篭もらせてくれなかったのですか？

（イヤ・・ヒマになったから・・では無いぞ。
設定の都合とだけ言っておくわい。）

ナニやらゲフンゲフンと言う声もしますが、作者さんよ。
アンタ、ゼロ魔は卒業するって言わなかった？
おかげでオラは安心して引き篭もりが出きると思ってたのに。

しかし・・どうするべ・・。
ルイズの性格は記憶していますよ。
ですが、また面倒見るかと思うとね・・。
気持ちが萎えてしまいます。
ネ申様、今回のスペシャルプレゼントはどうすんの？
正直、チートよりも現代化学が使える方がオラは嬉しいのですが。

（タロウよ、この脆弱なハルケギニアで現代化学が通用するか？
ムリだろ・・。
拠って今回のスペシャルプレゼンツは・・・。）

ドキドキドキドキ♪

（前回同様、全系統魔法のチートアーンド魔力無制限としまぁぁす。
コレで頑張れるでしょ？別に嫌いなヤツは相手しなくてもこの世界
では生きて逝けるヨン。
頑張ってね。タロウ。）

おぉぉ。最初から飛ばしてくれますな。ネ申様。

そう言えば転生してからは、何故か前世の現世同様。
全くモテないクンでしたが。
もしかして現世に未練が無い様に仕組まれてた・・のですか？
ネ申様・・・・。

（ヒューヒュー、ワシは何も知らないモンね。詳しくは作者にでも聞いてチョ♪）

ヤツが教える訳が無いでしょ。
はあ、じゃオラはこの世界で・・・・。

ハーレムを目指します。
食える女は全て食ってやるぅぅ。

（おお、遂にタロウからハーレム宣言が。
ガンガレよ。そんだけのチートがあればハーレム達成も難しくは無いでしょ。
んじゃワシは用が終わったので消えるヨン♪
ネットは前作同様神ネットと契約しといたからね。
好きに使ってチョ♪
ばいばいき~~ん♪）

ネ申様は何時ものバイキンバイバイを言うと霞の如く消えてしもた・・。

そろそろ桃髪が爆発する頃か・・・。

「チョッと・・アンタ・・。
いい加減にコッチの話を聞きなさいよ・・・。」

「そう言う貴様は誰だ。余をこの様なド田舎に拉致しおって。」
オレはそう言うと、ツルッパゲ先生の頭に即効魔法アデランスを唱えた。
瞬間、彼の寂しい頭はボン♪と言う音と共にフサフサの髪の毛が。
「お、おぉぉぉぉ。私の髪が。
貴方はメイジですか？いいえ、きっと神様なのでしょう。
長年の私の苦悩が貴方の魔法で・・・。」

「フム・・。何やら貴殿から頭が寂しい寂しいオーラが出てたので、
つい余の魔法で
フサフサにしてしもたが。
不味い事でもしたかな？」

「いいえぇぇ。ありがたい事です。
あっ、私はこの魔法学院の火の魔法教師をしています、ジャン・コルベールと申します。
もし宜しければお名前をお伺いしたいのですが・・。」

「それは構わないが、まずこの状況を説明して貰おうか。
余はタロウ・ヤマダ。
この世界とは違う世界の魔法使いの教師をしておる。」

「誠ですか？でも私では出来なかった髪の増殖魔法を見た感じでは信じるしかありませんね。
いえ、世界が信じなくても私は貴方を信じます。
貴方こそが私の求めてた究極のメイジ、魔法使いですよ。
タロウ・ヤマダ様。」

何かコルベールさん、随分とフレンドリーですね。
狙った訳ではありませんが、あの方は敵にしたく無いのですよ。
この世界には当然おマチ姉さん、居ますよね。
彼女こそが自分の人生でも最高の姉さんでした。
彼女と過ごした生涯は本当に幸せでした。
この世界のマチルダも必ず・・。キリッ♪
幸せにしますよ。エエ。

さて、ルイズの仕込みでもかかりますか。
アレでも一応はこの世界のメインキャラです。
潰すとなるとアンチになりますから、適当に幸せにしましょ。
でも・・この外見では・・。

ピカっと閃いたのは、もしかしたらこの世界はアノ世界の続きでは無いか？
と言う事です。
試しにあの方を呼んで見ましょう。

「アクア姉さん♪」

（呼んだか？タロウよ。）

やはりこの世界はアノ世界の続きでした。
呼んだら来るもんな。

「久しぶりです。○○○さん。（真名なので伏字です。）
久しぶりにこの世界に来たのですが、体系がアレなのですよ。
何とかかつての体系に戻して頂けません？」

（造作も無い事よ。タロウ。

フム・・・。コレで良いか？）

見ると醜かったお腹もスリム。
記憶の中に残ってる一番ベスト時代の私の体系となってたのです。
やはりアクア様は私の最高の女神様です。
感謝しるですよん♪

（・・・あまり褒めるな。タロウ。
照れるでは無いか・・。）

「おぉぉ、○○○様がデレた。
今回も世話になります。」

（任せるのだ。タロウよ。
お前が帰った事は他の精霊にも告げておこう。
フフフフ。
楽しみにしておけ・・。）

水の精霊、アクア様は何やら不気味な事を仰ってましたが・・。
ま、良いでしょ。
おかげでメタボから開放され、身体の軽い事♪

ん？？？？？？

皆様、どうしたのですか？
金魚みたいに口をパクパクさせて・・。

「タ、タ、タ、タ、タ、タロウ様、貴方様は、水の精霊様とお知り合いでしたか？」

「ン??ああ、あの方は以前からのお友達ですよ。
それがどうかしましたか？」

縦ロール髪のおぜう様は何やら言いたそうですな。
あれは・・・。
モンモンだ、確かに。

「あ、あのぉぉ。タロウ様で宜しいでしょうか？
私はモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシーと申します。
長いのでモンモランシーと呼んで頂けると幸いです。
所で・・・。
先程、タロウ・ヤマダ様がお呼びになられた方は、この国で水の精霊様と呼ばれる存在ですよね？」

「多分、そうだと思うぞ。余は昔からの知り合いだけどな。」

「精霊様とお知り合いですか・・・。
あのぉぉ、精霊様にお願いとか出きるのでしょうか？」

「そりゃ頼めば出きるぞ。だが、それがお前に関係あるか？」

「い、いいえ・・。私の実家は水の精霊様の盟約の一員として、トリスティンで働いていました。
ですが、私の父があの方に粗相を働いてしまって、盟約の一員から外されてしまったのです。」

「ふーーん、可愛そうだね♪」

「ですので、タロウ様があの方に取り成して頂けないか・・・と。」

「だが断る。
余はこの国に拉致されたばかり。
自分の国に帰る術も無くした今の状態で、他人に構う余裕は無し。
ああ、忘れてたな。
そこの桃髪。
この責任はどう取る気だ？」

いきなり話を振られたルイズはパニクってしまった。
コルベール先生の頭に毛が生えたり、メタボのアレがいきなりスリムになったり、
水の精霊が出現したりと頭がオーバーヒートしてたのである。

「わ、私は・・・。」

「タロウ・ヤマダ様、お待ちください。
私がこの場の責任者です。どうか怒りを納めて頂けませんか？」

ルイズに話をさせると、場が崩壊すると判断したコルベールが話しに割って入る。
中々良い判断ですね。
コルベールさん。

「フム・・。確かに「お子様」に責任取れと言ってもムリだな。
良かろう。コルベールさん。貴方と談判しましょう。」

「チョッ、お子様って誰の事よ。」

「そこに居るのは自分のケツも拭えない子供だろ？
乳ナシ娘さん♪」

「フンガーー、乳なんて関係無いっしょ。」

「まあ素材は悪く無いのに、そんだけ乳が無ければ女として見込みゼロですな♪
自分に任せれば乳くらいは成長させれますけど♪」

オレはそう言うとセクハラマジーックと叫び、モンモンに対し乳促進魔法を発射。
いや、ネ申様。

今回のタロウは一味違いますね。
イメージ通りにモンモンのツルペタが見事な形の乳に成長♪

「わ、私の胸が・・・。
ありがとうございます。タロウ・ヤマダ様。」

「アラ？もう一人のツルペタに発射するつもりが間違えてしもた。
返してくれる？」

「イヤです。長年の悩みが解決したのですわ。
この胸は私だけのモノ。嗚呼、嬉しい♪」

モンモンは自分の成長した胸を大切に抱きかかえ、悶絶してた。

「チョッ、洪水のモンモン。その胸は私のモノよ。
私に渡しなさい。」

「絶対にイヤ・・。コルベール先生、胸がとてもキツイので早退しますね♪」

「あ、ああ。分りました。モンモランシー嬢・・・。
しかしタロウ様の魔法は凄いですね。
ハルケギニアの魔法とはケタが違います。」

「この世界の魔法を見た事は無いが、この程度なら余の生徒なら誰
でも出来たぞ。
（大嘘）。」

「素晴らしいですね。私も貴方に師事したいと思う位です。」

「若くないとムリですよ。それに私の勤めてた学校の生徒は、全員
が魔力満点で
無いと入学試験すら受けられません。
見た所、この学院の生徒は私の受け持ってた生徒と比較するのもバ
カバカしてレベルの
生徒ばかりです。先生も大変ですね・・・。」

実際にトリスティン魔法学院は幼児に魔法を教えてるのと同じレベ
ル。
ロクな教育を受けていないガキばかり。
だから滅びそうになるのよ。
多分・・・。

その後、召還会場でグダグタしてても仕方ないので、
変態校長オスマンに交渉に行く事になりました。

コルベールさんは頭がフサフサでニコニコしておられます。
今、この瞬間にメンヌベルに殺されても笑いながら逝けそうですね。
ツルペタツンデレ桃髪は、ワテ等に付いて来ながらも、何で私の胸

を・・・。
とブツブツ呟いています。
アーアー、聞こえません。
またオスマンと遭うのか・・。
今度の人生はもう好きに生きる。
行き当たりバッタリで生きます。

キモ男さん、再び。（後書き）

本作は原作とは殆ど話の筋が変わります。
一応、原作に従い話を進めますが、キャラは別物となります。
原作崩壊となりますので、原作萌えの方は見ない事をお勧めします。

変態校長とキモ男さん♪（前書き）

オスマンとの対決です。

変態校長とキモ男さん♪

「ヒマじゃのぉぉ。」

「オールド・オスマン。
ヒマだからと言って私のお尻を撫でるのは止めて貰えませんか？」

「いい天気じゃのぉぉ。」

「ボケたフリしてもダメです。
その手をどけてください。」

「真実はどこにあるのかのぉぉ。」

「少なくとも私のスカートの中にはありません。
机の下にネズミを忍ばせるのは止めて下さい。」

「モートソグニル。気を許せる友達はお前だけじゃ。」
オスマンはネズミにナッツを与え齧らせている。

「そうかそうか。もっと欲しいか。ほれやるぞ。
所で今日の下着はナニ色じゃった？」

チュウチュウとネズミが何やら言ってる。

「そうか、白か。たまにはショッキングピンクとか黒も良いがのぉ。
今度秘書経費で下着を・・・。」

オスマンは最後まで言えずにロングビルからアッパーカットを食ら

ってた。

「ナ、ナイスパンチじゃ。ぐふっ・・・。」

「オールド・オスマン変態校長、今度やったら・・・。
コレでは済ませませんわ・・・。」

ロングビルは両手を組み合わせバキバキと指を鳴らせてる。
オスマンは首をカクカクと震わせ、イエス・マムと答えるのみだった・・・。

タロウです。

いよいよやって参りました。
この世界最強の変態。
オールド・オスマンの居る校長室です。ハイ。
でも避けてはいけません。
ヤツを避けるとマチルダ姉さんと知り合う事が出来なくなります。
今回も土くれのフーケは出しませんよ。エエ。

テファのためにもね。

「オスマン校長、コルベールです。
召還の儀式でトラブルが出ましたので、ご相談に上がりました。」

「コルベール君か？
良かろう、入りたまえ。」

オスマンの許可が出たので、コルベール、ルイズ、そしてオラが校長室に入る。
中にはロングビルさんこと、マチルダさん、オスマンが居た。

「そこの方はどなたかな？」

「オスマン校長、彼は異国の凄いメイジです。
見てください。私のこの頭を・・・。」

オスマンは目を見開いて驚いてた。
あまり男の顔は見ないので、気づかなかったが、ピカピカ頭がフサフサとなってるのだ。
そりゃ驚くってモンです。

「ツルベール君がフサフサ君になっとる。
どうしたのだ？その頭は。
悪いモノでも拾って食べたか？」

「ココにいらっしゃるタロウ・ヤマダ様の魔法でこうなったのです。
嗚呼、若き日の私の頭が蘇るとは・・・。」

オスマンはコルベールの頭を触ったり毛を抜いたりして確かめてた。

「痛いではありませんか。校長。」

「スマンスマン。ホンモノか確かめて見たくてのぉ。
だが毛根もある。まさにホンモノだ。」

「この方ですが、ルイズ嬢の召還の儀式でこのハルケギニアに呼び寄せられたそうです。
異国の魔法学院で教鞭を取られてたそうですよ。
素晴らしいメイジです。」

「フム・・。確かにコルベール君の頭が自毛になってる。
昨日までは光輝く寂しい頭だったのだがのぉ。
おお、挨拶が遅れてたが私がこのトリスティン魔法学院の校長、
オールド・オスマンじゃ。貴殿の名を宜しければ教えて頂けぬか？」

「始めまして。
ニホンと言う国で教師をしていましたタロウ・ヤマダと言います。
趣味は魔法と・・色々です。」

「色々と言うのも気がかりだが・・。
して、貴殿はどうしたいのじゃ？」

「まず帰る方法が分るまでの生活保障をお願いします。
使い魔にはさすがになれませんが、代わりにルイズ嬢には使い魔の代わりとなる
異界の動物を進呈致します。」

「へ？？私に使い魔となる動物をくれるの？」

「人間の使い魔よりは勝手が良いでしょ？ルイズ嬢。」

「そりゃそうだけど。でもドコに居るのよ。」

「後で召還したるで待て。小童。
して・・。そこにいらっしゃる美しいおぜう様。
貴女様からは何か悲しい波動を感じるのですが。
もしかしてイヤな事を無理強いされていませんか？」

「へ？？私ですか？」

「ハイ。メガネをかけた美しい年頃のおぜう様は貴女だけです。この場では。」

「ま、嬉しい事を。でもどうして私から悲しい波動を感じるのですか？」

「私の世界には「セクハラ」と言う女性に痴漢行為をする男性が後を絶たないのです。
女性をモノ扱いして、勝手な事ばかり無理強いして逮捕される連中も多々。
そう言う被害に遭われてる女性と同じ悲しみが貴女から感じられるのです。」

「ま、お優しい事を。そうですわね・・・。」

ロングビルは黙ってオスマンの方をジロリと睨みつけている。

「ナルホド・・。恐らく秘書と言う弱い立場の貴女にヒヒジジイが無理やりセクハラを

しているのですね。分りました。
貴女の苦しみをヒヒジジイにも味わせてあげましょう。少しお耳を拝借して宜しいですか？」

ロングビルはハイと言うとタロウの口元に耳を傾ける。
オスマンは何やら怪しい雲行きとなり汗ダラダラ・・。

「フフフフ。面白い事ですわね。
分りました。タロウ・ヤマダ様、お任せします。」

「ラジャです。では・・。
オールド・オスマン。立てぃぃ。」

気合を入れた声を上げると、オスマンは自分の意思とは別に直立不動の姿勢を取らされた。

「な、ナニが始まるのじゃ。」

「楽しい事ですよ♪」

オレは即席魔法、セクハラチェンジを唱える・・。
すると・・。

オスマンの立ってた位置には十六位の見目麗しい女性が。
そしてロングビルさんの立ってた位置には逞しい男性が。

「ロングビルさん、彼女に女性のイヤな事を散々味わせてください。
オスマンコちゃん、頑張って耐えてね♪」

「わ、ワシがおんにゃの子に・・。わーい。触り放題だ~~い。」

オスマンは喜んでいるが、それからが地獄の始まりだ。
男性にあるべきイチモツも消えているのに自分にセクハラしても痛いだけ。
そしてキモチワルイのだ。
ロングビル氏はオスマンコちゃんに近づくと・・・。

「オスマンコちゃん、カワイイわね。ゲヘゲヘゲヘ・・・。」
と、鼻息も荒く近づき、触るわ、叩くわ、揉むわとムチャクチャしまくり。
オスマンコも最初は喜んでたが、段々恐怖に変わり・・・。

「もうイヤ~~~，元に戻してぇぇぇ。。」

「ダ・メ・です。女性のセクハラの苦しみはこの程度ではありませんわ。
私、イヤ今はボクの苦しみを思い知れぇぇ。」

ロングビル氏は更にオスマンコに触る触る。
仕舞いには彼女は失禁してしまい悶絶して気絶。

「ふぅ・・。この程度で良いわね。
タロウ様、ありがとうございます。そろそろ元に戻して頂けます？」

「ラジャです。」

オレはセクハラチェンジを解いて、オスマンとロングビルさんを元に戻す。
オスマンは下半身ズブ濡れで気絶してるが、汚いので始末だけはしておいた。

そして活を入れ、オスマンを正気にすると・・・。

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・。」

と正座して土下座を始めた。
余話怖かったのだろう。
世の女性はこんな恐怖を毎日の様に味わってるのだ。
痴漢に憧れてる男性諸君。
痴漢で感じる女性なんて皆無に近いんだからね。
お近づきになりたいなら、キチンと口説いてください。
フラれたら諦めるのですよ♪

さて・・。
オスマンに対するオシオキは終わったので交渉再開です。

「オスマン殿、自分は今、見せたみたいな魔法のほかに色々と楽しい事が出来ます。
ええ、色々とね。」

オスマンは恐怖のため、まだガクブルしてる。
フフフ・・。
いくら長生きしてようが、おんにゃの子になる経験だけは皆無だったろぅ。
ザマーですよ。
ロングビルさんも元の女性の形態に戻り、勝ち誇った顔をしております。

「わ、分りました。タロウ・ヤマダ殿。
もう二度とセクハラはしません。
女性の嫌がる事は絶対にしません。

お許しを・・。」

「オスマン殿、女性に対するセクハラの恐怖、良く分ったでしょ。
二度としてはいけません。今度したら・・。
幼女にしてスラム街に放置しまっせ。」

「もう懲りました。ワシは男のジジイで結構です。
お触りしたい時は、お金を払ってンナ店に行きます。」

「宜しい。じゃ、交渉再開と逝きましょうか♪」

そっからはコッチのペースでした。
始めっから相手の度肝を抜いたので、もう言いなり。
仕事はココの学院の教師に赴任。
一応、全系統が使えるので、手抜き教師を叩き潰して
後釜に座る事にしました。
寝床は自分で建てるので、学院内に空き地を貰います。
食事は学院の教師と共に頂く予定です。
ルイズ嬢の使い魔は明日、校長室で召還する事にしました。
ナニを召還したろうかな・・・。

ま、疲れたので今宵は食事をメイドさんに運んで貰い、貴賓室に休
ませて貰いました。
チャンチャン♪

変態校長とキモ男さん♪（後書き）

オスマンコちゃんとロングビル氏の絡み、いかがでしたでしょ。
痴漢はいかんですよ。皆様。
どうしても女性に近づきたい非リア充の皆様は金を払っていかがわしいお店へ。

マチルダさんとキモ男さん（前書き）

マチルダを引き込みます。

マチルダさんとキモ男さん

タロウです。
オスマンとの交渉を終えたオラはロングビルさんの案内で、貴賓室へと向かっています。

「タロウ様、今日はとても楽しい体験をさせて頂きました。
本当に感謝しております。」

「ロングビルさん、世の女性の大半はンナヒヒジジイの手篭めにされてるのですよね。
女性は好きな男性のみに身体と心を預けるべきなのに、立場を利用し、
イヤな事をするヤツは後を絶ちません。
もし困った事があれば相談して下さい。
ヤローの相談は、あまり聞きたくありませんが、麗しい女性の相談は最優先でお聞きします。」

「ま、本当にダンディなのですね。タロウ様。
分りました。また何かありましたら是非、ご相談させてください。」

その時、オレは周囲に誰も居ないのを感知してから彼女にボソリと呟いた。

「マチルダさん、土くれのフーケだけは絶対に止めてください。
妹が悲しむ事になりますよ・・。」

それまで温和だった彼女の態度が瞬間的に氷点下に落ちた。

「どこで知ったのかい？」

「私はこの世界は二度目なのです。試しに言いましょうか？
ウエストウッド村の山林の中に孤児と住む彼女の名は・・・。」

「分った、信じましょう。でもどうしてンナ事を私に告げるの？」

「テファを悲しませたくないからですよ。
貴女は絶対に捕まらないと信じてドロをしてるでしょうが、世の中には絶対と
言う事はありません。悪い事してたら必ずお縄になります。
そして前世では私の妻だった貴女を不幸にしたくは無いのです。」

「わ、私が妻だったって？アンタと・・・？」

「ハイ。信じられないでしょうが、事実です。
この世界は不思議な事ですが、輪廻の繰り返しを行ってるみたいです。
その証拠をお見せしましょう。アクア姉さん・・。」

小さい声で呼んだにも関わらず、アクアさんが参上です。

「呼んだか？我が盟友、タロウよ。」

「以前、私がこの世界に居たのは何年位前ですか？」

「もう数えるのもバカバカしい程、昔の事だ。
人間の年月で言うと二千年は経過してるだろう。
お前が消えてからは、我は面白いヤツが居ず、ラグトリアン湖で引き篭もっておった。」

「だ、そうですよ。マチルダさん♪」

マチルダは目の前に居る存在が、普通の霊とかモノでは無い事は理解出来てた。
だが、この存在が何なのか・・・。
理解出来ないで居た。

「あの・・・。貴方様は・・・。」

「我はお前達、単なるモノが言う、水の精霊なり。
我はタロウ・ヤマダとは古くからの盟友なり・・・。」

マチルダはアゴが落ちそうになってたが、もう信じるしか無かった。
目の前の存在はまさに精霊そのものなのだから。

「失礼な事を質問してお許しください。
私はタロウ様の僕となるマチルダ・サウスゴーダと言います。」

「フム・・・。お前はタロウの僕となるのか？」

「ハイ。私はタロウ様に色々と助けて頂きました。
ご恩を返すには私の些細な人生を預けるしかありません。
どうか私の存在を認めてください。」

「良かろう、お前を単なるモノからタロウの僕、マチルダとして認識しておこう。
くれぐれもタロウを裏切るで無いぞ。」

「モチロンです。水の精霊様。」

「タロウ、このモノに我の秘薬を与えておく。
日々の暮らしの糧の足しにはなるであろう。」

「ありがとうございます。精霊様。
また遊びに行きますので、お待ちください。」

「また以前の如く、池のある家を早く持て。
我もそこに移動したいぞ。」

「もう少しお待ちくださいね。自宅を持ちましたら必ず池を作りますので。」

「楽しみに待つとしよう。では・・・。」

そう言われると水の精霊様はブシュッと消えてしまいました。
マチルダの手元には大量の水の秘薬が瓶に入ってます・・・。

「こ、こんな大量の秘薬なんて・・・。凄いお金になります。」

「良かったね。マチルダさん。
それを換金してテファの仕送りの足しにしてください。」

「数年は大丈夫ですよ。こんだけあれば。
ああ、もちろんアレは廃業します。」

「それが良いですよ。あ、部屋はココですよね。
じゃお休みなさい・・・。」

オラは部屋に入ろうとすると、マチルダさん、ガシッとオラの腕を

掴んで放しません。
どったの??

「タロウ様、私は貴方の僕となったのですよ。
私のすべては貴方のモノ。何故離れようとするのですか・・。」

ヤバ・・。
ヤンデレ化が始まってる。
前世の時もこの目になったら、逆らう事が出来なかったのら。
しかし、着いたその夜に女性を部屋に引き込むのはさすがに・・・。
それに腹が減りました。シクシク・・・。

そいから仕方ナシに彼女の言うがママに自分の部屋に入り・・・。

ゲフンゲフン・・・。

お子様には知らせたく無い事になりました。
腹がグーグー鳴ったので、手元のカバンに残ってたポテチを食べてたら、
彼女に奪われたのは言うまでもありません。

・・・・・・。
そうだ♪
オラはネ申様から魔法に関してはチートにして貰ったのら。
腹が減ったなら、食べ物を魔法で何とかデキネか?
試して見ます。

「カップメンと箸、ついでにカセットコンロとボンベ出ろ!!」

出ましたよ。すべて・・。

マチルダさんもビックラしてますが、食べ方が分らないので目を白黒させてるだけです。
オラは腹ペコタヌキなので、ヤカンに水を足し、コンロでお湯を沸かします。
そしてカップメンにお湯を足し・・・。
三分待つと・・・・。

おぉぉぉ。ビバ、カップメン♪
マチルダにも食べ方を教え、一緒にズルズルと食べます。
彼女は初体験のカップメンに感激し、ンナ美味いの初めて♪と大騒ぎです。
腹が膨れたので寝ようとすると・・・。
狼さんに食われてしまい明け方まで寝かして貰えませんでした。シクシク。

寝不足でも水魔法で何とか出来てしまう自分が悲しいっス。
翌日、彼女は肌がツヤツヤしてたのは言うまでもありません。

マチルダさんとキモ男さん（後書き）

ギリギリR15です。
マチルダさんはタロウの僕となりました。

シエスタさんとキモ男さん（前書き）

ようやくシエスタさんと出会います。

シエスタさんとキモ男さん

タロウです。
マチルダさんは夜明け前に自分の部屋に帰りました。
ええ、さすがに昨日と同じ服では不味い、と、帰ったのです。
私は彼女が部屋を出ると同時に部屋の換気を始めました。
男と女のアレの匂いってかなり篭るのですよ。
風魔法ですべての空気を外に出し、部屋の空気はスッキリです。
さて・・。
着替えが無い事にようやく気づきました。
今、着てるのは何故かスーツ・・。
パジャマ代わりのジャージは所持してますが、下着がありません。
困りました・・。
何とかしないといけません。

ぐぅぅぅ~~~~~・・。

オラの腹の音です。

昨日はカップメンしか食べてませんからね。

そろそろマヂで胃袋様に本格的に補充してやらないとかなり不味いっス。
昨日はゲフンゲフンな事ばかりで肝心な事を頼んでおくのも忘れてました。
どうするべ・・・。
悩んでると、部屋のドアをノックする音が・・。

「どうぞ。開いてますよ。」

「失礼致します。コチラはタロウ・ヤマダ様のお部屋ですね？」

「その通りです。どちら様ですか？」

「学院のメイド、シエスタと申します。朝のお食事をお持ちしました。」

おお、シエスタさんキタ~~~~♪

マチルダさんに続く私の元奥様。

やはりこの世界は輪廻して繰り返してますな。

ですが、何もかも前世と同じに動いては面白くありません。

今回は成り行き任せと決めています。キリッ。

「ありがとうございます。どうぞお入りください。」

シエスタは了承を得ると台車に乗せた食事を部屋に運び込む。

・・・・・・。

ヲイヲイ、ナニ？？この膨大な量は・・・。

またメタボに戻す気かよ・・・。

台車の上には朝食にしては膨大な量の食事が乗せられています。

聞くと、これが貴族の方の朝食一人前だそうです。

あのジジイ、よほど怖かったのか、オラの扱いが前世とはケタが違います。

やはり変態は叩くに限りますね。ウン。

「シエスタさん、私一人では片付ける事が出来ません。

もし朝食がまだならご一緒にいかがです？」

シエスタはアワアワと慌てて、ご迷惑で無ければ・・と、了承してくれました。
それからは楽しいランチタイムです。
やはり元のシエスタと同じ人格らしく、記憶とすべてリンクしています。
しかし見ると手荒れが凄いです。
洗濯機も無い、この世界ですから洗濯は当然、手作業。
荒れるのは当然でしょう。
見かねたオラは彼女の了解を得てから、手荒れを魔法で癒してしまいました。
すると、アラ不思議・・。
彼女の荒れてた手の肌は赤ちゃんみたいにスベスベで綺麗になりました。

「こ、こんな事をして頂いて、宜しいのですか？」

「あ？
いいえ。こんなの自分には造作も無い事です。
何でしたら手荒れの惨いメイドさんを全員連れて来て頂いても結構ですよ。
女性が荒れた手をしてるのは人類の損失です。
後でハンドクリームを作りますので、仕事の後に塗る習慣を付けてください。」

彼女は感激して、私に出きる仕事はすべてお任せください、と、直立不動の姿勢で
私に敬礼してくれます。
ドコで覚えたの？海軍式の敬礼。

まあハンドクリーム程度なら、今すぐでも作れます。
イメージさえ出来れば大概の事は出きるのですよ。
私は。
ただ、女性の下着とかは想像の埒外です。
お食事の後に人数分のハンドクリームを創造してあげ、彼女に手渡します。

「こ、こんなに・・。私たちの給与ではこんな秘薬の代金は払えません。
どうすれば・・。」

「お金なんか要りませんよ。貴方達は学院のために働いてるのです。
自分も本日からは学院で働く、言わば同僚。
同僚の健康維持も仕事の一環ですよ。」

そう言うと彼女は喜んで受け取ってくれました。
後に聞くと、彼女の同僚も凄い手荒れに悩んでたとか・・。
クリームを塗り始めたら、全員がアカギレから開放されたそうです。
良かった良かった♪

シエスタさんとのファーストコンタクトはこの程度にしておきましょう。
いくら何でも始めからゲフンゲフンな関係はあり得ません。
いえ、ありましたが例外としておきます・・・。

シエスタさんと別れ、部屋の外をブラブラと散歩する事にします。
忘れてましたが、私の魔法は一応、杖を使っています。
ホントはイメージしてるだけなのですがね。
それでも魔力が枯渇しないのですから、ネ申様。
どんだけ魔力をプレゼントしてくれたのですか？

学院の閑静な木陰を見ると、タバサさんが本を読んでおられます。
相変わらずクーデレしているのですね。
ま、今は関わらない事にします。
ボチボチ学院の生徒もアルウィーズ食堂で朝食を食べ始めたらしく、
生徒で賑わっています。
オラは食べたので、行きませんが・・。
当座の着替えが無いので、オスマンに談判に行く事にしました。

「オスマン校長、おはようございます。タロウです。」

「タ、タロウ殿か。セクハラはしてませんぞ。エエ。
もう二度としませんぞ。エエ・・。」

「別に問い詰めに来たのではありませんが・・・。
ま、良い傾向です。
所で・・・・。」

端折りましたが、下着と着替えは大至急部屋に届けてくれるそうです。
ついでに支度金として、相当の金子を袋入りでドカンと置いてくれました。
今日の予定は授業の見学、ルイズの使い魔の召還などです。
授業は手抜きのアホ教師が居たら潰してＯＫと許可を貰います。
万一に備え、オスマンのサイン入り許可証も発行して貰いました。
こんな変態でも学院のトップです。
大切に使いましょう。

オスマンと別れ、自分の居室である貴賓室に帰るとシエスタが下着等を持って待ってました。

「タロウ・ヤマダ様、オールド・オスマン校長の指示がありましたので、
着替えなどをお持ちしました。」

「ありがとうございます。シエスタさん。では着替えますので、その服を頂けますか？」

「裾合わせがありますので私が調整します。裁縫道具も持参してますわ。」

見ると、裁縫セットもドカンと置いてあります。

「・・・・分りました。では・・・・。」

シエスタを伴い部屋に入り、まずは下着を着替えます。
もちろん彼女には向こうを向いて貰っていますよ。
まだ彼女は清い乙女なのです・・。
そして上着を着てズボンを履きます。
やはり少し裾が長いですね。

「シエスタさん、着替えました。」

「やはり調整が必要ですね。では裾を合わせますので、任せてください。」

彼女はそう言うと、オラの足元にしゃがみこみ、裾を合わせてくれてます。
←を見ると・・・・。

ゲフンゲフン。
彼女の双壁の谷間が見えます。
ええ、偶然見ただけですよ。絶対にガン見はしてません。
それに昨日は散々ゲフンゲフンな事は済ませています。
ですので冷静ですよ。エエ・・。
後に彼女と深い仲となってから聴くと・・。
狙ってたそうです。自分が谷間を覗く事を。
女性はターゲットを定めると攻撃に入るのが早いですね。
男には真似出来ません。
後に私はそう述懐しております。

裾あわせは十分程度で終わりました。
さすがプロです。ハイ。
ミシンも無いのに、この技術。
・・・・ミシンか・・・。
彼女と暮らしてた時、彼女には色々と洋服を縫って貰いました。
あの時は創造魔法が使えなかったので、手縫いでお願いしてましたが。
ついホロリと思い出してしまいました。
すると・・・・・。

目の前に足踏み式の旧式ミシンがデンと出現したのです。
想像しただけなのですよ。
自分も驚きました。

「あ、あのぉぉ。タロウ様、コレは何でしょう??」

「私の世界の古い形式のミシンと言う足で踏む事で衣服を縫い合わせる事の出きる機械です。」

オラはシエスタに使い道を教えてあげました。

「素晴らしいですわ。こんな機械があれば服を縫うのも簡単に出来ます。」

「では貴女に差し上げますよ。自分が所持してても意味はありませんから。」

「こんな高価な品物、頂けません。今朝の秘薬の代金も払えないのに。」

「アレは御近づきのプレゼントですよ。代金は結構と言ったでしょ。そうですね・・・。
ではこうしましょう。このミシンで色々と服や下着を縫ってください。
もちろん私以外の方の服もＯＫですよ。
それで代金は帳消しとします。
いかがです？シエスタさん。」

「・・・・分りました。
ではお預かりしてタロウ・ヤマダ様の服や下着は私に任せてください。
ご満足頂ける品物を作りますので。」

「楽しみにしてますよ。ああ、そう言えばコレを運ぶのも大変ですね。
私の魔法でシエスタさんの部屋に転移させますので、私の手を握って部屋を
思い浮かべてください。
目は瞑ってくださいね。」

彼女は私の指示に従い、手を握って目を瞑ってくれました。
次の瞬間。
一瞬で彼女の部屋に転移・・・。
同僚のメイドさんがビックラしたのはお約束です。

シエスタさんとキモ男さん（後書き）

シエスタとの出会いでした。
まだゲフンゲフンな関係は考えてませんよ。
ええ、彼は鬼畜ではありません。
変態ですが・・。

風ヲタとキモ男（前書き）

風男との対峙の巻きです。

風ヲタとキモ男

着替えた服の洗濯などをシエスタに頼み、オラは授業の見学をするべく職員室に向いました。
丁度オスマンも職員室に来てたので、彼にオラの説明をして貰います。

「職員諸君、今日から我が学院の教師として赴任して頂く事になった異国のメイジ。
タロウ・ヤマダ殿です。
彼の魔法の腕はこのオスマンが保障する。
彼には得意の魔法はすべてと言われるので、彼に自分の受け持ちは自分で決めて頂く事になった。
諸君の中で手抜き授業をしてる方が居たら最優先で解雇する事に決まった。
そんな職員が居ない事を願うがね・・。」

職員はオスマンの一言でザワザワと騒ぎ出した。
新規の職員が入るのは良いが、解雇される人間が出る・・。
今まで生温い仕事をしてた彼等は真っ青となってた。

「始めまして。私は異国の魔法学園で教鞭を取ってましたタロウ・ヤマダと申します。
何分にもこの国の常識に疎いと思いますので色々とお世話になると思います。
ヨロシク♪」

何故か彼等からスルーされましたが、歓迎されていないのは当然です。

ま、誰を切るかはオラの一言ですので、楽しみにしていましょ。
最初の授業はルイズのクラスです。
教師は風ジャンキーのミスタ・ギトー。
この世界でも風最強と騒いでいるのでしょうね。
まずはヤツを切りますか・・。

「では授業を始める。
今日は異国のメイジとか言うタロウ・ヤマダ殿が居られるので彼に
模擬魔法を
見せて貰うとしよう。
タロウ・ヤマダ殿、お願い出きるか？」

いきなり話を振られたが、ま、予想してましたので落ち着いて返答
致します。

「分りました。
皆様、始めまして。
異国の魔法学院で教鞭を取っていましたタロウ・ヤマダと言います。
今日はミスタ・ギトー殿から模範魔法を見せてくれと頼まれました
ので、
皆様にお見せしましょう。
ですが・・、ココでは少し不味いですね。
ギトー殿、野外に移動しても宜しいですか？」

「構わぬが・・。では諸君、野外に移動する。
ヴェストリの広場に移動しよう。」

ギトーがそう言うと生徒は全員席を立ち広場へと移動を始めた。
オレはギトーと並んで歩き、彼と少し話をしてた。

「タロー殿、どう言う魔法を見せてくれるのですか？」

「そうですね。教室では部屋を破壊してしまうと思いましたので、
室外に移動して貰いましたから、
私の作るゴーレムをギトー殿の得意な魔法で破壊すると言うのはいかがでしょ？」

「ほほぉ。それは楽しそうですね。
私の風を見せて差し上げます。」

「楽しみにしてます♪」

やがて学院の外れにあるヴェストリの広場に着くと、生徒に安全な場所に固まって見学して貰い、
オレはゴーレムを練成した。
形は・・・。
そう、子供時代に熱中した日本独自のスーパーロボット。
どこかの国がテコンとか言う捏造品を作ったが、世界の子供が支持した・・・。
マ〇ンガーZです。

「いかがでしょ？私の作った最強のゴーレムです。」

「な、中々強そうですな。ですが私の風には残骸となり果てるのが見えております。」

「もう攻撃して結構ですよ。いくらでも攻撃してください。」

ギトーはオレの話が終わると同時に偏在を作りカッタートルネードやタイフィーン、

その他自分の持つ魔法を全力でぶつけてた。
だが・・・・。
「な、何故壊れぬ。
私の風は最強のハズだ。」
「・・・・愚かですね。自分の能力こそが最強と信じるのは自由ですが、
他人に押し付けるのはいかがかな？と思います。
このゴーレムは超合金と言う最強の鉄で練成されています。
マグマの中でも解けぬ強度があります。
この程度では破壊するのは不可能ですよ♪」
「・・・。それならタロウ殿、貴殿に決闘を申し込む。
種目は風同士で望む。」
「・・・・構いませんが、もし敗れたらどうするのですか？」
「敗れたら私は辞職する。恥を晒してまで働く気は無い。」
言いましたよ。この方。
すべての生徒が居る中で・・・。
良いでしょう。
貴方の最後の授業、派手に散らしてあげます。
決闘前にギトーに怪我や被害は敗北者の負担とする、などの取り決めも行います。
さて・・・。
殺りますか・・・。
自分と生徒に被害が及ばない様にシールド魔法を施しておきます。

コレはアニメに良く出るバリアーをイメージしました。
試しに生徒に向けて軽い火炎弾をブチ込みます。
ウム・・。彼等には埃ひとつ付きません。

さてギトー君を殺りますか・・。

「ギトー殿、先程同様に貴殿に優先権を与えます。
私にいくらでも攻撃を仕掛けてください。」

ギトーはオラに向けて色んな攻撃を開始しますた。
バリアを張ってるので、全く届きません。
十分は攻撃を続けたでしょうか・・。
彼は魔力が枯渇したみたいで、攻撃を止めてしまいました。

「おや、もう終わりですか？
まだお茶も飲み終わっていないのに。」

そう、オラはギトーの攻撃の最中に紅茶をクリエイトし、ティータイムを楽しんでたのです。
ギトーはフヌヌヌヌヌ・・、と面白い顔をしています。

「それでは私の番ですね。しっかりと防御してくださいよ。」

「チョッ、待て。私は魔力が尽きてるのだ。」

「知りません。ゴーレムと決闘で優先権はすべて渡したのです。
今度は私のターンです♪」

ギトーに向けて氷点下の風をイメージした烈風魔法を彼に浴びせます。

もちろん死なない程度に加減しましたけどね♪
二撃程度加えたらヤツはピクリとも動かなくなりました。
何だ。
コレで終わりですか・・・。
生徒に彼の救出を頼み私は校長室へと・・・。

「オスマン殿、遠視の魔法で見てたと思いますからご存知とは思いますが、
ギトー殿から決闘を申し込まれ、彼は負傷。
ああ、決闘前の彼から敗北したら辞職すると言質を頂いておりますので、
負傷の治癒が終わり次第叩き出してください。
あんな決闘ジャンキーは生徒を教える資格はありませんな。」

「そ、そうですな。タロウ殿。ハハハハハ・・・。
分りました。ギトー殿は自己都合の退職として処理します。」

オラはオスマンの部屋から出ると生徒の待つヴェストリの広場へと移動した。
それも一瞬でね。
彼等はギトーを保健室に放り込むとココで待機してたのら。

「生徒諸君、ギトー殿の看護ありがとう。
彼は先程の言質通り、辞職となりました。
さて、コレでは君達の授業が進みませんので、このタロウ・ヤマダが風の模範を
示します。
まず、風の基本、ウインドから・・・。」

前世で烈風のオカンとも対峙してますので、風は徹底的に魂に仕込

まれてます。
今ならオカンでも叩き潰す自信ありまっせ。
何せ魔力がハンパではありません。
もっとも生徒の彼等にはムチャな事は教えませんよ。エエ・・。

（な、何なの・・。あのタロウの魔法は・・・。
ギトー先生の風は私の母のカリーヌよりは威力は少ないとは言え、
普通なら即死レベルの
魔法だったわ。それなのに、攻撃を受けてても平気な顔してたし、
あげくには・・。
お茶を飲んでたのよ。冗談でしょ？？？）

ルイズは自分が召還した彼のムチャぶりに頭が沸いてしまってたのだ。

風ヲタとキモ男（後書き）

ギトー、お前の事は。。。
忘れます♪
ギトー解雇編でした。

ギーシュ君とキモ男君♪（前書き）

ようやく皆のオモチャ、ギーシュ君、爆登場です。

ギーシュ君とキモ男君♪

ボクの名前はギーシュ・ド・グラモン。
グラモン家の四男坊だ。
薔薇のギーシュとでも呼んでくれたまえ。
多くのレディェがボクを支えてくれるだろう。
さて、今日の授業は中々のモノだった。
アノ、ギトー殿と見慣れぬメイジ教師、タロー・ヤマダ殿の決闘だったのだ。
決闘はタロー殿の勝利だった。
ギトー先生は辞職されるそうだが、自分で言ったのだから後悔は無いだろう。
それよりも・・・。
土メイジの自分としては、あのゴーレムだ。
タロー殿の作り上げたゴーレムにはボクは感動した。
ギトー先生の繰り出す風魔法をすべて受け止めて、傷一つ付かない最強のゴーレム。
防御ばかりだったので、攻撃力を見ていないが・・。
もし攻撃を見れるなら、どうなるか・・。
楽しみだ。
授業が終わり、解散と言う事になったのでボクは彼の元に近づき質問した。

「タロー・ヤマダ先生、先程の授業は素晴らしかったです。
所で・・・。」

「ン？ああ、何か聴きたい事でもあるのかね？
んっと、名前は・・・。」

知ってるけど一応聞いておかないとね♪

「ギーシュ・ド・グラモンと言います。
得意の魔法は土魔法です。まだドットですが・・・。」

「ギーシュ君と呼んで良いか？タロウ・ヤマダです。ヨロシク。」

一応フレンドリーに握手を求めます。

「タロウ先生と呼びますね。ヨロシクお願いします。
質問と言いますか、見せて欲しい事があるのです。」

「何でしょう・・。」

「先生の作り上げたゴーレムの攻撃方法を見たいのです。」

「フム・・。先程の授業では防御ばかりでしたからね。
攻撃方法は色々とありますよ。エエ、色々とね♪」

「そ、そうですか・・。
でしたら課外授業として見せて頂く事は出来ませんか？」

「良いですよ。ただ攻撃するの見せても納得出来ないと思いますので・・。
ギーシュ君、キミの作るゴーレムを破壊して見せます。
四種類の攻撃方法が出ますので四体のゴーレムをキミの持つ魔力をこめて、
頑強に作り上げてください。
準備が出来たら、一体ずつ攻撃します。」

「分りました。所でボクのゴーレムから攻撃しても？」

「モチロンＯＫですよ。カカシでは何の意味もありません。」

分りました、とギーシュが言うと、
彼は全魔力を込めて薔薇の杖でゴーレムを練成し始めました。
相変わらずのワルキューレですな。
それでも昔の彼のゴーレムよりは頑丈そうです。
最初から４体と決めたせいもあるとは思いますが・・・。

「準備は出来ましたか？ギーシュ君。」

「大丈夫です。
ボクの作れる最強のワルキューレとして念入りに作りました。」

・・・・・。
そうですね。
昔の彼のワルキューレよりは強そうです。
まあ良いでしょう。
では遊びましょうか。

「ギーシュ君、キミのゴーレムから私のゴーレムに攻撃を仕掛けたまえ。
五分はキミのターンだ。五分したら反撃を開始する。」

「わ、分りました。タロウ先生。」

そっからはギーシュは必死でゴーレムを操りマジ〇ガーを叩く、蹴る。
刀で刺すと色々と攻撃しました。

ええ、すべてカンカンと軽い音がするだけで傷も付きません。
当然です。マジン〇ーZはスーパーロボット。
この程度で傷が付くのはあり得ません。
相手出きるのはアシュ〇男爵が率いる奇怪獣軍団だけですよ。

「・・・。五分経ちましたね。
では私のターンとします。
ギーシュ君、ゴーレムが傷つくといけませんので分散させて移動始めてください。」

彼は私の指示に従い、ゴーレムを全力で走らせています。
まずは・・。

「ロケットパーーーンチ。」

そう、当時の良い子の皆が度肝を抜かれたアレです。
腕が外れ、轟音を上げてワルキューレに飛び掛ります。

どごーーーん♪

一撃で粉砕。
ま、この程度は当然ですな♪

「ナ・ナ・ナ・ナ・何ですか？それは・・。」

「ロケットパンチと言います。腕が飛び相手を粉砕する攻撃ですよ。
まだまだ続きます。さあ逝きますよ♪」

それからはルストハリケーン、光子力ビーム、そして・・・。

「ブレストファイヤーー♪」

ギーシュは真っ青です。
彼のワルキューレ君は最後のブレストファイヤーで
すべてドロドロに溶けてしまいました。
生徒は全員、このイベントを見学してて固まってました。

「・・・・ボ・ボクのワルキューレが・・・・。」

「・・・ギーシュ君、これで課外授業は終わりとします。
後片付けは頼んでおきますよ。」

放心してる彼を放置して、オラは職員室へと引き上げます。

イジメでしたね。これは・・・。

生徒達は放心してるギーシュを放置して全員、昼ごはんを食べるた
めに食堂へと
引き上げてしまいました。
ギーシュは数時間、その場で固まってたとか・・・。

「・・・・・ボ、ボクのワルキューレがぁぁぁぁぁ・・・・・。」

ギーシュ君とキモ男君♪（後書き）

ギーシュとのイベントは形を変えて行いました。
今宵の更新はココまでとします。

職員室にて・・・。（前書き）

ついでにキモ男のキモ男たるべき話を。
全然キモク無いチートじゃんと思ってる方。
キモ男は変わっていません。
変態ヲタですよ。

職員室にて・・・。

タロウでっす♪

ギーシュとのイベントを形変えてしまいましたが、アレは迷惑なイベントなので、
ま、ヨシとしましょ。
さて、お昼はどうしましょう。
あの騒ぎの後ですし、アルウィーズに行くと大騒ぎになると思いまして・・・。

シエスタを見かけたので、彼女に厨房に案内して貰いますか・・・。

「シエスタさん♪」＜ソコのギャラリー、キモッとか言わないでね。キモ男ですが・・・。

「アラ？タロー様、今朝は色々とありがとうございました♪」

シエスタさん、ご機嫌ですね。

「どう致しまして。所でお願いがあるのですが。」

「何でしょう。私に出きる事なら何でも致します。
ええ、何・で・も・ね・♪」

オラはこの何でもと言うのが文字通り、何でもを意味してるとは気づいていなかったのです。
シエスタさんは既に肉食獣のスイッチが入っていたのですよ。
ガクブル・・・。

「色々とやらかしてしまいまして、食堂で食べるのがアレなんですよ。
で、量も多いので出来ましたら厨房の方の賄いを頂けないかと思いまして。」

「アラ？そんな事で宜しいのですか。
でしたら私が調理人のマルトーさんに頼んであげますわ♪」

おお、マルトーのオヤジも居たか・・・。
彼は好きなキャラなんですよ。

シエスタの案内で訪れた厨房はかつての厨房と変わっていません。
中に居るメンツもかつてのままです。
懐かしいですね・・・。
色々と世話になりましたから。
少しホロリとした感傷に浸ってると、シエスタが怪訝に思ったのか
質問して来ました。

「タロー様、ココが厨房ですよ。」

「あ、ああ、そうですか。いい匂いがするなと思ってたトコです。」

「・・・そうですか。では入りましょう。」

シエスタの先導で厨房に入るとマルトーを始めとする厨房の料理人
達が、
デザートの製作に大忙しでした。
いいのかしら・・・。
こんな時に来て・・・。

「マルトーさん、この方がタロー・ヤマダ様です。
お昼はコチラの賄いを出して欲しいそうですが。」

「ん？おお、アンタがあのギトーを叩き出してくれた新任の教師か？
今、オレ達の間でウワサしてたとこだぞ。良くあのギトーを追い出してくれた。
感謝するぞ。」

何かしてたのですかね。ギトーさん。
凄い嫌われっぷりですよ。
前世でもココまでは嫌われて無かったと思いますが。

「タロー・ヤマダと言います。マルトーさんで宜しかったですか？
お世話になります。」

「いや、世話になったのはオレ達だ。
あのギトーにはオレ達は散々な目に遭わせられたからな。
魔法も使えないオレ達に、ヤタラと風がどうのとか、標的にして怪我させられたりとか。
惨い事ばかりしやがって。
オスマン校長に訴えても聴いてくれなくて困ってたんだ。
だがアンタがヤツを潰してくれたおかげで、オレ達の被害は終わった。
何でも徹底的に潰してくれたそうだな。
オレ達の盾として戦ってくれて本当に感謝する。
なぁ皆。」

「「「そうですぞ。タロー・ヤマダ殿はオレ達の盾です。」」」

「お前の事はオレ達の盾と呼ぶ事にしよう。
オレは嬉しくてお前にキスしたくなったぞ。」

「いや・・自分はノーマルなのでヤローからキスされるのはイヤです。
遠慮しときます。
それよりも賄いを頂けませんか？
昼からも授業が入りますので腹ペコでは働けません。」

「おお、忘れてた。今すぐ準備してやる。少しだけ待て。」

マルトーは賄いとは思えぬスープとサラダ、そして一番いい部分のパンを出してくれた。
腹も膨れたので、オレはマルトーに礼を言い、厨房を辞すると広場の片隅で休む事にした。

「フー、疲れた。
相変わらず飛ばしてくれますよ。マルトーさんは・・。
ん・・いい素材となる木が落ちてますな。
ちとオモチャでも作りますか・・。」

オレはそれを拾うと、職員室の自分の机に帰り、そこで木材を加工する事にした。

「んっと・・。テファはさすがにヤバいので・・。
見られても大丈夫なのに加工すっか。
ンジャ・・・・・・。」

しばらくオラは木材の加工とクリエイトに熱中してた。
思い浮かべたのは、現世で話題となってた某アニメ。

ホラ、友達が居ないとか言う癖にリア充してたアレのキャラの妹ですよ。
あの子ならこの世界に居ても不思議では無いキャラです。
フフフフフフフフフフ・・。
我ながら快心の傑作です。
見事にＫＯ鳩ちゃんとンコシスターの絡みを作れました。
あの二人の絡みはホンマに和ませて貰いましたからね。
最終回だったのが残念。
有中部で動画見れますから、二期も見れるとは思いますが。
ン？？？？
何で皆様、コチラをガン見してるのですか？？？？？

「タ・タロウ先生、それってタロウ先生が作られたのですか？」

「ええ、私の趣味の一環ですよ。キリッ♪」

「素晴らしい出来ですね。売り出しても絶対に売れると思いますが・・。」

誰でしたかしら？
原作にも居なかったキャラの先生です。
彼の背後からは私と同じヲタの空気が漂っておりますが・・。

「すいません。まだ同僚の方の名前を存じ上げていませんので。
宜しければお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「おお、名乗るのを忘れてました。
私は風系統の魔法教師助手をしてます、アキバ・オオスと申します。
」

何ですか？モロにヲタの聖地を使ったっぽい名前は。
しかしこの世界でアキバなんて・・・。
何て素晴らしいのでしょ。
そう言えば風の助手と言いましたね・・・。聞いておきましょ。

「風の助手をされているのですか？先程ギトー先生は退職されましたが。」

「モチロン聞いています。で、次の風教師はタロウ・ヤマダ殿と決定しました。
貴方が私の上司となります。ヨロシクお願いします。」

彼が助手ですか・・・。
でしたら仲良くしておくべきですね。
では、コレは彼に差し上げますか。
どうせ片手間に作り上げた品ですし・・・。

「分りました。アキバ・オオス先生。宜しくお願いします。
私がタロウ・ヤマダです。
で、どうでしょう。お近づきの印にこの人形をプレゼントしたいと思いますが。
迷惑でしょうか？」

すると・・・。

「ほ、本当にいいのですか？いや、素晴らしい出来ですし、見るだけでも幸せだと
思ってたのです。まさか頂けるとは・・・。
ああ、夢の様です。」

チーン♪
この方もヲタク確定です。
同僚となる方ですし、色々と楽しく仕込みますか・・。

その後アキバ君に色々とヲタ情報を話したり、フィギィアの事を教えたりして楽しい一時でした。
やはりこの世界も「染める」べきですね。
リア充となろうが、ヲタは不滅です。
またフィギィアショップ作るどぉぉぉ。

あ、始業時間だ。
次の授業はシュヴールズ先生だな・・・。

職員室にて・・・。（後書き）

タロウはリア充になってもヲタは止めません。
また店を作ろうかな・・・。
ふぅ、いい仕事でした。

ルイズと彼（前書き）

彼が登場です。

ルイズと彼

タロウです。
いやアキバ先生ってマヂでヲタの素質が在った方でしたよ。
色々と情報を聞き込むと、幼女が大好きだとか。
もちろん実際に手を出すとかは妄想もしていません。
ただ眺めて愛でるのだけで満足してたそうで。
この学院は幼女に近い生徒も多いので、中々良い環境だとか・・・。
アキバさん・・。
マヂで手は出してはダメですよ。
この世界の法律がどうかは知りませんが、犯罪には変わりませんから・・。

さて授業の見学でもするべ・・・と考えてたら、背後から・・・。

「タロウ・ヤマダ先生。」

・・・この鈴宮ボイスは・・桃髪爆発ツンデレ娘か・・・。

「ン？どうしました。ルイズ嬢。」

「午後の授業は使い魔のお披露目を兼ねているのです。
で、あのぉぉぉ・・・・。」

「分りました。皆まで言わなくても結構です。
では校長室に行きましょう。
あそこで召還する約束でしたからね。」

さて・・彼を呼び出すか・・・。

この世界でもルイズの虚無は発露させないつもりです。
お子様が戦争の道具にされるのは悲劇ですもんな。
悪い目は潰しておくべきです。
ゼロ様にお願いして彼女の虚無体質を剥奪しておかないと・・・。

オラはルイズ嬢を引き連れ、校長室に到着♪
一応ノックします。

「オスマン校長、タロウ・ヤマダです。
ルイズ嬢の件でお伺いしました。」

「タロウ殿か？入りたまえ。」

許可出たので入ります。
そう言えばマルトーのオヤヂの訴えを無視してたっつーてたな。
少しお灸を吸えておくか・・・。

中にはマチルダさんとオスマンが居ます。

「ルイズ嬢が昼の授業で使い魔お披露目があるとかで、
使い魔を献上する約束を果しに来ました。」

「おお、そうかね。
ミス・ヴァリエール。良かったね。」

「ハイ。でもどんな使い魔が来るのでしょ。」

「チョイお待ちを。
あまり時間もありませんのでチャッチャッと片付けてしまいますね。

」

オラは頭の中で「彼」をイメージし、彼を異界に呼び出す事にした。

「Ｐｅｓｏ２、出でよぉぉぉ。」

激しい光が出現。

ガン見してたオスマン達は、

「目がぁぁぁぁ。」と光に目を射られたらしいっス。

お約束ですな♪

やがて光が収まると・・・。

そこには「彼」が居ました。

「クエッ？」

「彼がルイズ嬢の使い魔となって頂くペソペソです。

Ｐｅｓｏ２とでも呼んでください。

少しお待ちくださいね。彼に納得してもらいますので。」

オラは念話で彼に話しかけ、ルイズの使い魔として遊んでヤレと頼んでた。

ペソペソはメシとフロはあるべな？と聞いて来たので冷蔵庫の部屋も設置したる。。

と、約束したら彼は納得してくれた。

「・・・終わりました。
彼の名はペソペソ。異界に居る温泉ペンギンです。
ルイズ嬢、彼の居室は私がプレゼントしますので夜にお邪魔しますよ。
ああ、彼はお風呂が大好きですので、
毎日の入浴は必ずご一緒にお願いします。
男性っつーても彼なら女性のフロでも大丈夫でしょ？」

ルイズはフリーズしてたが、やがて・・・。

「コ、コ・コ・コ・コ・・・・・」

「コケコッコーーーー♪」

思わず突っ込んでしまいました。

「違うわよぉぉ。私はニワトリでは無い。
コレが私の使い魔になるの？
何て・・・・カワイイ♪」

やはり双月の世界でも女性のストライクゾーンは変わりませんね。
お子様や女性はペンギンが大好きです。
普通のペンギンなら過酷な人間環境で生きるのは大変ですが、
あの桂木亭の夢の島で、生き抜けるタフな彼なら、
このハルケギニアで立派に戦ってくれるでしょう。
モチロン愛玩ペットとしてですよ。

「彼は魚介類が好物ですので、食事の時はご一緒に与えてください。
さっ、ペソペソ。お前のご主人様、ルイズ嬢に挨拶しなさい。」

彼はクエッと言うとペタペタとルイズに近づき、右手？を差し出す。
「ホラ、ルイズ嬢、彼が挨拶してますよ。握手して自己紹介してね♪」
「クエックエッ♪」
「ペソペソ、
私が貴方のご主人様となるルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。
ルイズでいいわ。
ヨロシクね。ペソペソ。」
「クエックエッ♪」
ウム・・。おおむね好意的に交流出来そうですね。
やはり彼女には彼を使い魔とするよりは、こう言う動物を使い魔にするのが一番ですよ。
さて、使い魔の件はコレでヨシとして・・・。
オシオキして置きましょう。ヤツに・・。
「ルイズ嬢、彼を連れて教室に行きなさい。
歩くのが遅く思う時は抱いて歩いてもＯＫです。」
「だ・だ・だ・だ・・・抱いてもいいんですか？
ンナ可愛い生き物を。」
「貴女の使い魔ですよ。大切に扱ってくださいね。」

「モチロンです。タロー先生、ありがとうございました♪」
ルイズの私に対する好感度は少しは上がったみたいですね。
ま、いいでしょ。
さて、彼女が退室したら・・。

「オールド・オスマン殿。
自分は本日、厨房で賄いを頂いたのですよね。
そこで・・楽しい話を伺いました。」

「な・・・ナニもしてないぞ。ワシは。」

「ええ、ナニもしてないですね。本当に。
貴方はこの学院のトップですよね？」

「そうじゃが・・・。」

「それなのに厨房の調理人がギトーから苛められていると言う陳情を無視してたとか・・。
彼等はギトー退職を聞き大喜びで泣いてましたよ。
どうしてトップである貴方は彼等の陳情をシカトしてたのですか？
ロングビルさん、ヤツを取り押さえてください。」

「フフフフ♪タロー様、了解です。」

オスマンが脱走する前に彼女にヤツを捕縛して貰いました。

「や、止めてくれぇぇぇ。」

「彼等の苦しみを味わって貰いますか・・。

魔法無効、そしてヤツの魂を地獄の煉獄に一日封印。」
オスマンはピクリともしなくなり、動かなくなりました。
「タロー様、彼は・・・。」
「ヤツの魂を一日、地獄の煉獄に封印しときました。
平民の皆様の苦しみの一部にしかなりませんが、彼も懲りると思います。」
「ま、それは良い事を。
では彼の管理は私がしておきます。
明日まで放置しといて良いのですよね。」
「ええ、肉体は生きてますので。ま、多少垂れ流したら掃除だけお願いします。」
「お任せください♪」
オスマンは翌日、現世に戻るまで地獄のオニに叩き潰され煮られ焼かれて・・。
地獄ツアーを楽しんで来たらしい。
数日ガクブルが止まらなくなり、オラの顔見たら逃げる様になりました。
くけけけけけ。
少しは懲りただろ・・。

ルイズと彼（後書き）

彼とルイズの生活に幸多からぬ事を。
オスマンは不憫ですね。
宜しければご要望などを入れて頂くと助かります。

私はただの・・・トライアングルですから（前書き）

の、シュヴールズ先生の巻です。

私はただの・・・トライアングルですから

タロウです。
オスマンの管理をマチルダさんに頼み、オラはシュヴールズ先生の授業見学に来ました。

オヤオヤ、ルイズ嬢の周囲が賑やかですね。
早速ペソペソと戯れて楽しんでいるのでしょう。
ま、楽しく生きてください♪

「皆さん、春の使い魔召還は大成功の様ですわね。
このシュヴールズ、
こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ。」

ルイズはニコニコしてた。

「まあ、ミス・ヴァリエール。とても愛らしい使い魔を召還したのですね。
それは・・？？」

「私の使い魔、ペソペソです。異界の温泉ペンギンと言います。
オフロが大好きだと言う事です。」

「ルイズ、その子、お風呂に入るの？私も一緒に入るからさ・・。」

「イ・ヤ・♪私のペソペソに触らないで。」

「ゼロのルイズ、そこ等を歩いてた動物を浚って来たのだろう？」

「失礼ね。ちゃんと召還したわよ。」

「ウソつけ。ゼロのルイズの癖して。」

「ミセス・シュヴルーズ。侮辱されました。かぜっぴきのマリコルヌが私と
ペソペソを侮辱しました。」

「かぜっぴきだと？オレは風上のマリコルヌだ。
風邪なんかひいてないぞ。」

シュヴルーズ先生は手に持った杖でマリコルヌに向けて振ると・・・。
彼は糸の切れた人形みたいに椅子にヘタリこんだ。

「あまりお友達を罵倒するといけませんわよ♪皆様♪」

シュヴールズ先生は氷点下以下の冷たい顔でマリコルヌを睨みつけてたのです。
マリコルヌはカクカクと首を振り、彼女に従うしかありまへん。

さて、いよいよ楽しいお勉強の始まりです。

「私の二つ名は「赤土」。赤土のシュヴールズです。
そう言えばタロウ先生は全系統がお得意だそうですね。
先程のゴーレムは見てましたが、本当に見事なゴーレムでした。
私にはとても作れそうにありませんわ。」

いきなり話を振りよったぞ。この○バハン。

「ご紹介が遅れて申し訳ありませんでした。
私は異国のメイジ、タロウ・ヤマダと申します。
ギトー先生の退職で後釜に入る事になりましたが、一応・・。
土も使えます。でもこの国の魔法はあまり拝見していませんので、
シュヴールズ先生の見本を見せて頂けませんか？
自分がこの国の魔法だとどのレベルにあるかは、分りませんので。
見本の後に私も真似して見ます。」

「ま、素晴らしいお話ですわね。
では、この赤土のシュヴールス、
お手本になるかは分りませんが全力を尽くさせて頂きます。」

シュヴールズ先生はギトーとは違い教え方も丁寧ですね。
この方は絶対に残って貰うべきです。ハイ。

彼女が杖を振ると、教壇に乗ってた石ころが光輝きピカピカの金属
に変わったのです。

「せ、先生。それはゴールドですか？」

褐色の肌のナイスバディの生徒、恐らくキュルケでしょう。
彼女がシュヴールズに質問しました。

「違います。ただの真鍮(しんちゅう)です。ゴールドを練金出きるのは、
「スクウェア」クラスのメイジだけです。
私はただの・・・・。」

「「トライアングル」ですから・・。」

やはりこの世界でも彼女のセリフは変わりませんね。

さて・・。
自分も全力を尽くして見ますか・・。
彼女も自分の能力を全開で見せてくれましたからね。
礼儀として自分も手抜きナシで頑張って見ます。

「シュヴールズ先生、見事な真鍮ですね。
では自分も真似して頑張って見ます。」

そう言うと彼女から手ごろな石を譲ってもらい、教壇の上に置く。
彼女の練成した真鍮モドキは別の場に移しましたよ。エエ。

「ではやって見ますね。もし危険と感じたら即刻止めますが、大丈夫と判断できたら、
最後まで練金して見ます。」

「楽しみですわね。タロウ先生・・。」

フム・・・。全力を出すと騒がれる危険もあるが、あまり手抜きしてもね・・。
んじゃ銀辺りで止めて置きましょう。
出でよ、シルバーーーー♪

すると・・・、教壇の上の石が光り出し注視する事も出来なくなったのです。
しばらくすると、光は収まり、教壇の上にはギラギラと輝く・・。

「こ、これは・・。銀ですか？」

「ハイ。銀をイメージしましたが。調べて頂いて結構ですよ。」

「分りました。ディクットマジックで調べて見ますね。
少しだけお待ちください・・・。」

そう言うと彼女は杖を振るいオラの練成した銀の石を調べ始めました。
すると・・・・。

「す、素晴らしいですわ。
先程までの石を完璧な銀に練金してしまうとは・・・。
タロウ先生の土魔法の実力は私よりも遥かに上です。
もしかしたらスクゥエアかも知れません。
素晴らしい練成でしたわ。」

手抜きしたのだけど、この程度なら大丈夫でしょ。
でもスクゥエアか・・・。
前世でも到達したけど、あまり恩恵は感じなかったのよね。
それよりも、やはり土の技術だけは磨き架けて、早く店を持ちたいですよ。
テファもこの地に呼び寄せてあげたいしね。

「そうですか・・。
私の世界の魔法でもこの世界に通じるのですね。
色々と魔法の方法も技術も違いますので、参考になるか心配してたのですが。」

「ご謙遜を・・。
ココまで見事な銀を練金出きるメイジは国中を探しても中々見つかりませんわよ。
タロウ先生、お時間の取れる時で結構ですので、
ゴーレムとか錬金についてご教授してください。」

それからオラは授業の合間に自分の趣味に没頭し、
彼女に怒られたのは言うまでもありません。

ん・・・。

そう言えばこの授業でルイズが教室爆破事件を起こすハズだったな・・。

ま、いいか。
迷惑なイベントだし・・・。

私はただの・・・トライアングルですから（後書き）

穏やかな授業でした。
次回からはアレなイベントが始まります。
良い子の皆は飛ばして見ないでね。

ウフフな夜♪（前書き）

さて、皆様、お待ちかねのウフフタイムです。

ウフフな夜♪

タロウです。

シュヴールズ先生の授業の後、自分の住処を作るためオスマン氏から指示された、
学院外の空き地に居ます。
ココに自分の新しい住居を錬金して作るのですよ。
やはり貴賓室では落ち着きません。
さて、始めますか・・。

まずは土を掘り下げ地下室の土台から作ります。
いえね、前世で烈風オカンに家を破壊された時から考えてたのですよ。
大切なモノは地下に置くべきだったのでは・・と。
数メートル掘り下げ、周囲をガッチリと錬金で固めます。
ええ、核攻撃でも生き残れるレベルにしますよ。
もうあの悲劇は味わいたくありませんので。
そして柱をガッチリと立て、周囲を土壁で固めてから錬金。
コレなら台風や雪崩でも耐えられると思います。
魔法って魔力の多い人間には本当に便利です。
こりゃハルケギニアで化学が発達しなかったのもムリではありませんわ。
今回の人生は成り行きに任せると決めたので、魔法が便利なら頼る。
慕う人が居たら取り込む。
抱いてと言われたら・・・。
ゲフンゲフンな関係もＯＫとしますよ。エエ。
下手に遠慮して関係を壊すなら、遠慮せずに行動し、関係壊す方が千倍はマシ。

ブツブツと独り言を言いながら、自宅の錬金を続けてたら・・・。
アレまぁ。
完成してましたよ。
規模は鉄筋三階立てレベル。
地下は二階あります。
周囲は塀で囲い、後でアクア様をお呼び出きる池も・・・・。

って・・・もう居たのですね。

アクア様・・・。

（タロウよ、良くぞ池を作ってくれたな。
中々居心地も良さそうだ。
我はココをしばらく宿とするぞ。
ラグドリアン湖には分身を置いてある。）

「はぁ、お呼びしようと思ってたら来られたのですね。
アクア様、狭い池ですがお許しください。」

（狭くとも楽しい我が家となろうぞ。タロウよ。）

アクア様も引っ越された事ですし、自分も少ない手荷物を持ち込みますか・・・。

「シエスタさん、自宅が出来たので引越し致しますね。
お世話になりました。」

「寂しくなりますわ。タロウ様・・。」

寂しいって・・・。まだ一日居ただけですよ。
この部屋。
手荷物も少ない事ですし、
チャッチャッと移動して、フロでも入って屁こいて寝ます。

そしたらシエスタさんが、お荷物を自宅まで運びますとか言うので、
甘えてしまいましたら、門のトコでマチルダさんが待ち構えてたの
ですよ。

「ロングビルさん、こんばんわ。やっと自宅が出来ました。」

「タロウ様、僕(シモベ)の私を置いて出て行くなんてあんまりですわ・・。」

僕(シモベ)って・・・。

ヲイヲイ、昨夜、アクア様に言ったのはマヂでしたか??

「私の窮地を救って頂いたタロウ様は私の永劫のご主人様です。
もう秘書は辞職しましたので私はフリー。
さあ、私のすべてを貰ってください。」

ロングビルさん、いやマチルダさんがそう話を始めたら、シエスタ
さん・・。
手荷物をポトリと静かに置き、学院にダダダダと駆けて行かれたの
です。

どうしたのでかね？

自宅に入り、手荷物を簡単に片付けフロの準備をしていると・・・。

コンコン・・。

ドアを叩く音がします。

マチルダさんは食事の支度してくれてますので・・・。

誰ですかね・・。

外を見るとシエスタさんが大きなカバンとミシンを引きずって来たのですよ。

ゼーハーゼーハーと凄い荒い息してますが・・・。

体力ありますね・・・って・・・違います。

何ですか？この荷物は・・・・。

「シエスタさん、こんばんわなのですが・・・。

どうしたのですか？この荷物は。」

「タロウ様がロングビルさんを雇用なさると聞いて、私も雇用して頂こうと、

学院のメイドを辞職して参りました。

給与はいくらでも結構です。

タロウ様、私もメイドとして雇用してください。」

・・・・・フリーズしてしまいました・・・。

まだフラグ立てる程の事はしてなかった・・ハズですよね？

シエスタさん。
そりゃマチルダさんとはゲフンゲフンな関係持ちましたから、
もう他人とは言えません。
ですがシエスタさんには指一本、手すら握ってませんぜ。
自分は・・。
そしたらさ・・・。
背後から冷たい空気が・・・・・漂っているのですよ。

ぎ・ぎ・ぎ・ぎ・ぎ・と擬音の聞こえるみたいな感じで後ろを振り向くと・・。

マチルダさんが冷たい目で私達を見つめてるのです。
怒る気持ちは分りますが、まずは言い訳だけでも・・・。

「タロウ様、お盛んな事ですね。
私と言うモノがありながら、メイドさんまで頂かれたのですか・・・。」

「ご、誤解ですよ。マチルダさん。
自分は何もしていません。本当です。ね？シエスタさん。」

「ええ、まだ・・ナニもしてくれないのですよ。
ひどいと思いませんか？ロングビルさん。
私は何時でもバッチコイなのに、全然無視してるのです。
女として悲しいですわ・・。」

ヨヨヨヨヨヨと泣き叫ぶシエスタさんですが、自分が泣きたいですよ。

で、外でビーカービーキャー騒いでても話が出来ません。

まずは二人とも家に入って貰い、話し合いとしましょうか。

「シエスタさん、ロング・・・いや、マチルダさん。
まずは落ち着いて頂き感謝致します。
さて、今宵の一件ですが、シエスタさんとは本当っにっ、ナニもしていません。
これは神にかけても構いません。
マチルダさんに関しては・・・・・・。です。ハイ。」

「タロウ様、私の事を認めて頂きありがとうございました。
で、そこのシエスタさんでしたか？
どうしてこんなに強引にこの方の所に来られたのですか？
私は先程お話した通り、色んな事でタロウ様に窮地を救って頂きました。
水の精霊様も承認して頂いております。」

「み、水の精霊様ですか??あのラグドリアン湖の・・・。」

（呼んだか？タロウの僕のマチルダよ。
そしてそこに居るのは・・・。
我の知る古き時代のタロウの僕の水の流れに似ている。
単なるモノよ。名を名乗れ。）

「み、水の精霊様ですか？
私はシエスタと言います。タロウ様のメイドとして押しかけて参りました。」

（フム・・・。単なるモノはシエスタと名乗るか・・・。
遥か昔のタロウの僕の一人にもそう名乗る単なるモノが居たと我は記憶してる。）

「本当ですか？水の精霊様。
私はタロウ様にお会いした時に、
すべてを投げ出してでもこの方と離れてはいけない。
そして今宵、タロウ様が学院の貴賓室を引き払い、この家に越されると聞いた時、
すべてを無くしても構わない。
その気持ちでタロウ様の家に押しかけメイドをしたのです。
もう魂が引き合わせたと思った方はタロウ様だけなのです。」

（そうか・・。シエスタと名乗る単なるモノよ。
オヌシの水はやはり古き時代のタロウの僕と同じと認める。
タロウよ。我の言う事は間違っておるか？）

「・・・精霊様がそこまで言われるなら、もう隠す云われはありません。
マチルダさんには話しましたが、シエスタさん。
途方も無い話をしますが、発狂したとか思わないでください。」

「大丈夫です。私はタロウ様の話される事なら例え、明日、ハルケギニア全土が
双月まで浮き上がると言われても信じます。」

・・・シエスタさん、風石が暴走すると冗談抜きで浮き上がるのですがね。
この大陸は・・・。
ま、また何とかなるでしょ。
前世でも出来た事ですわ。ハイ。

それから、自分の昔話を始めました。

ルイズに召還されたのはコレで二度目。
魔法に関しては完璧にチート。
今なら烈風のカリンでも潰せる実力がある。
そしてすべての精霊ともその時代から通じてる。
この世界に住む人間なら誰でも知ってるブリミルの最後の事も・・・。
そして多くの妻~ズの事も・・・。

話が終わりしばらく沈黙が続いた。
先端を切ったのはマチルダ。。

「そうでしたか・・。
ですがそれなら、すべてに合点が行きます。
私は貴方に抱かれた時、もう何も要らない。
そう思いました。
ただ、アルビオンの妹の事だけは心配でしたが。」

「私も・・・。
タロウ様の言われる事はすべて真実と思います。
そうで無ければ、生娘の私が異国の男性にいきなり惚れる訳がありません。
恐らく魂が呼んだのだと思います。
タロウ様、もしお金が苦しい時は、私を女衒に叩き売っても構いません。
どうか私をココに置いてください。」

・・シエスタさん、女衒に叩き売るなんて凄い事、出きる訳無いっしょ。
それからアクア様も交え、今後の事を色々と話し合ったのです。
その後・・・・・・ゲフンゲフン・・。
二日続けて徹夜に近いのにアクア様、私の健康だけは治してくれる

のですね。
寝てないのに元気な自分って、悲しいです。
シクシク・・・。

ウフフな夜♪（後書き）

いよいよ妻~ ズの結束が始まります。
食われたのか食ったのかは藪の中の事にしますね。

ルイズと彼　2（前書き）

ルイズと彼のお話です。

ルイズと彼　2

私の名はルイズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
誇り高きヴァリエール家の惨女よ・・。

チョッ、そこのアホ作者。
アンタバカ？

字、間違えてるわよ。
脳が沸いているんじゃ無い？

私は三女なの・・・・・。

もういいわ。

昨日の召還の儀式では散々な事だったけど、私が召還した異国のメイジ。
タロウ・ヤマダって人、思ったよりいい人みたいね。

確かに魔法の技術は凄い。
ひょっとするとお母様ともタメ張るかも知れない。
だけど私には関係無いわ。
だって・・・私は・・・ゼロのルイズ・・。
魔法が成功したのは昨日の召還の儀式のみ。
契約は出来なかったけどね。

でもタロウ先生が私との約束をしっかりと守ってくれた。
使い魔としての存在の彼を私に授けてくれたのだ。
彼の名はペソペソ。

お風呂が大好きな温泉ペンギンと言う珍しいペンギン。
ペタペタと歩く姿は今回の召還で出現した使い魔の中でも一番の可愛さと自慢出きる。

あのキュルケも羨ましそうに見てたもんネ♪

久しぶりに快感を味わったわ。

でも彼って本当にキュート。
確かにブレスを吐くとか、空を飛ぶとかは出来ないわ。
でもね。
凄い癒してくれるのよ。
存在が神よりも貴重なのって彼くらいよ。きっと・・。
ちい姉さまが動物を可愛がる気持ちが始めて理解できたわ。
お風呂に入るとパタパタと元気良く泳ぐし、皆は触りたがる。
体をブルブルと震わせてお湯を飛ばすトコなんか皆で大笑いしたわ。
でも、彼、凄いのよ。
私が散らかしてたパン○とか下着をキチンと籠に入れるし、
箒を使って掃除はする。
それに私の言葉も理解出来てるみたい。
もちろん私は彼の言葉が分らないけどね。
でもそのウチに理解出きると思うわ。
だって私の言葉に色々と楽しく反応してくれるモン。
タロウ先生に後で聞いたら、人間の子供位の知恵があるんだって・・。
掃除出きるペンギンなんて彼くらいよ。
本当にアタリの使い魔だったわ。

ふう・・それにしてもタロウ先生、遅いわね。
もしかして忘れたの??

彼の寝床の事。

仕方ないわ。

今日は私のベッドで寝て貰いましょう♪

モフモフしてカワイイ♪

おやすみなさい・・・。

クェッククエッ（オレの冷蔵庫は??）

ルイズと彼　2（後書き）

彼とルイズのお話2でした。
冷蔵庫設置するの忘れてたので・・・。

朝（前書き）

朝です。

朝

タロウです。
夜が明け、朝となりました。
新居の新しい家にはガッチリとしたベッドも作って置いてあります。
ですが、このガッチラした広いベッドは凄く狭く感じます。
両サイドから抱きしめられて寝てる訳ですからね。
彼女達に。
昨夜からゲフンゲフンな関係となってしもたシエスタも私の隣に寝てます。
ファ・・・アーア・・。
完璧に寝不足ですよ。
どうしましょ・・。

（タロウよ、お前の体調維持は我に任せろ。
例え病に倒れても確実に治癒して見せる。）

アクア様は、そう言われると自分の身体にダイブして通過されてしまいました。
そしたら身体の不純物や疲労、その他がすべて取り除かれてしまうのです。
精霊様が居たら、医者なんて絶対に要りませんね。
医者頃しですよ。ハイ。
何故か彼女達もダイブされたらしく、彼女達もスッキリした顔で目覚めています。

「二人ともオハヨ・・。
精霊様が自分達の身体を通過してくれたので、爽やかになってると思うんですが。」

「タロウ様、おはようございます。
そうなんですか？そう言えば私の身体も色々とスッキリしてます。
精霊様のおかげなのですね・・・。」

「ありがたい事です。水の精霊様・・・。」

体調が万全になった事を確認したオレ達は、ベッドを出ると、
色々と散らかってる部屋を片付け、朝ごはんの準備にかかります。
いえ、シエスタさんが昨夜退職する時に、厨房から色々と頂いて来
たみたいで、
すぐにご飯の準備は出来てしまいました。

「タロウ様、この家の管理は私がキチンとしますので、お仕事は
頑張ってください。」

「タロウ様、学院での雑務は私が見ますので、ご安心を。」

本当は一日でも早くティファニア達を呼んであげたいのですが、
この土地は借り物。
まだ自宅以外の用途には使えません。
彼女達がこの地に来たら・・・。
お店を開きたいですね。
さて・・支度して学院に行きますか。
そう言えば、何か忘れてた気が・・・・。

「あ゛~~~~~~！！」

思わず大きな声出してしまいましたが、「彼」の寝床を設置するの
忘れてました。

家作りとシエスタさんの騒ぎで完璧に忘れてたのです。
大丈夫だとは思いますが、彼が健康を害するのは良く無いのです。
早速女子寮に出かけましょう。

「マチルダさん、少し急用が出来ましたので、ルイズ嬢の部屋に出かけて来ます。
終わり次第職員室に向いますので。」

「分りました。私はタロウ様の授業の準備などを済ませておきます。」

やはり彼女は素晴らしいですね。
オスマンもそろそろ現世に帰る頃でしょうが、机の上には辞職届けが置いてあるそうで。
さぞやビックラするでしょ。
まあしばらくは一人で頑張ってください。

さて、女子寮に参りました。
ですが、さすがにいきなり入るのは気が引けるのです。
誰か居ないかな・・・。

「あら？タロウ・ヤマダ先生ではありませんか？」

「この声は・・・。モンモランシー嬢ですか？」

「ハイ、モンモランシーです。先日はありがとうございました。
おかげで悩みの一つが消えて、快適な生活を送れています。」

育った2つの胸をブルンと震わせ彼女は嬉しそうに言います。
良かったですね♪

で、彼女の案内でルイズの部屋を訪ねる事にしたのです。
ついでに一緒に居て貰います。
さすがに女子寮に男性が入り、二人っきりとなるのは色々と問題です。

「ルイズ、タロウ先生が貴女に用があるそうですよ。」

「モンモン？タロウ先生が来たの？すぐ開けるわ。」

彼女はペソペソを抱いて寝たせいか、肌がツヤツヤですね。

「ルイズ嬢、彼の寝床を準備する約束を果しに来ました。
モンモランシー嬢は貴女と二人きりになるのを避けるために居て貰います。
宜しいですよね？」

「仕方ないわね。いいわよ。で、彼の寝床ってどうすんの？」

「少しお待ちください・・。」

自分は「彼」が良く使ってた冷凍庫を頭にしっかりとイメージし、
クリエイトを始めました。
精霊様のおかげで体調は万全。
魔力も満タンです。
数分後、彼の寝床はルイズの部屋にデンと鎮座していました。

「ね、コレって・・。ナニ？？」

「彼の部屋ですよ。ああ、上のドアには冷たいモノを作る場となってますので、

氷とか欲しい場合は自由に使えます。
定期的に魔力の充填に来ますけど宜しいですか？」

電力の無いハルケギニアで彼の寝床を稼動させるために魔力を機械部分に貯めて、
寝床を冷やす構造にしたのです。
下手に電力など持ち込んでも意味無いですから。
一回の充填で一月は持ちます。ハイ。

「そ、そんないいモノなの・・。
でもペソペソの嬉しそうな顔見てたら、分る気するわ。
上の部屋には氷が何時もあるのね。」

「その通りです。
氷を入れる器に水だけ足して貰えば何時でも使えます。」

「ルイズ、いいわね・・。たまには氷を頂戴よ。」

「イヤ、コレは彼のモノなの。
何でモンモンにあげないといけないのよ。」

「まあまあ、仲良くしてください。コレは貴女の私物では無く、彼の家なんですからね。
な？ペソペソ？？」

「クエックエッ♪」

「・・・もう・・分ったわよ。あら、ペソペソ、早速家に入るの？」

ペソペソは早速自宅に入り、自分好みに設定しているみたいです。

暑かったのか、中からロックをかけてしまいました。
「彼も異界に来て疲れたのでしょ。
ルイズ嬢、彼はしばらく休ませてあげて下さい。
食事は与えてくださいよ。」
「分ってます。後で厨房から貰ってきますから。」
まあコレで彼の暮らしは大丈夫でしょう。
さて、職員室に行き、今日の授業の準備でもしますか・・・。
オラは道々色々と今後の設定を考えてた。
誰かが常に周囲に居る現状では、歩きながらでないと落ち着いて考えられないのら。
まず、何時までも学院で教師を続けるつもりは無い。
やはりヲタショップをこの世界に作るのが究極の目標。
前世みたいにロマリアがイチャモンをつけない限りは、穏やかに暮らしたいな。
だがその前に色々とこの世界に食い込んで自分の立場を明確にしておくべきだ。
何時までも異国のメイジでは、色々と不味い。
拠って、アルビオン戦までは、学院の教師を続けよう。
ウエールズは殺さない。
彼を殺すとあの姫が暴走を始め、やがては世界の崩壊にたどり着いてしまう。
それだけは絶対に避けるべきだ。
もっともルイズはアルビオンには行かせないけどね。
邪魔だ。はっきり言うと。
ネ申様のプレゼントでオラは現状で虚無も発動出きるのだ。
呪文もすべて思い出している。

最悪の事態の時以外は発動させないが、万一の保険にはなるだろ。
アホ姫がルイズに絡むイベントの時は、ムリにでも介入しルイズは残って貰う。
ま、この程度、予定を考えておけば良いだろ。

アキバ先生は、教師辞職時の後任に仕込んでおかないとニャア♪

朝（後書き）

彼の寝床設置イベントでした。
魔力で稼動させる設定にしておきます。
そして今後の展開も独り言調で呟いておきます。
次回から新章に入ります。

ただ今授業ｃｈｕ♪（前書き）

タロウの授業風景っス。

ただ今授業ｃｈｕ♪

タロウです。
オスマン殿は現世に帰られたみたいですが、椅子に座ったままで垂れ流し。
しかも机の上にはロングビルさんの「辞職届け」。
内容はセクハラ爺さんの面倒はもう見れません。
タロウ・ヤマダ様に永久雇用されます。と、書いてあるのだ。
タロウに恐怖心を持ったオスマンが逆らえるハズも無く、自分で床の掃除をしたり、
書類の決裁をする事になった。
秘書の募集をしたが若い女性が好んでセクハラジジイの元に来るハズも無く。
しばらく彼は一人、書類の山と戦う事になるのら。

ルイズ嬢の部屋を辞したオラは職員室に来てますた。
マチルダが完璧に準備してくれてたので、後はアキバさんと打ち合わせする程度。
今日から風魔法教師、タロウ・ヤマダの出陣となるのです。
ま、長い事働くつもりはありませんがね。
さて・・。授業に入りますか・・。
クラスは三年の某クラス。
原作にも出て来ないクラスですので、キャラと名前が一致しません。
生徒の名はＡとかＢで表現しまっす。
お許しを♪

「えっと、私がギトー先生の後任として風魔法の教師を勤める事になりました、
タロウ・ヤマダと言います。

得意な魔法は全系統です。」

「ミスタ・タロウ・ヤマダで宜しいでしょうか？
ボクは風魔法が得意のラインメイジです。
昨日は元教師のギトー先生と対決されて勝たれたそうですが、事実ですか？」

「ええ、事実です。
もっとも私は彼と戦うつもりは無く、模範演技だけのつもりでしたが。」

そう言うと生徒達はザワザワと騒ぎ出したのだ。
まさかあのギトーが敗れるとは・・とか、不意打ちで勝ったんだろう・・とか・・。

ふーん・・。
やはり受け入れられるまでは色々とありそうですな・・。
仕方ない。
オラは偏在を編み出し、すべての生徒一人ひとりに対峙して説明に充てる事にしたのだ。
全ての生徒、約四十人に偏在だ。
さすがに彼等もメイジ。
これがいかに凄い事なのか、ようやく理解出来たらしい。
一時間、個別に魔法を偏在が指導を続けたので彼等のオラに対する評価は、
徹底的に改めて貰えた。

やがて休憩時間となり、偏在を消しクラスを辞すると、
彼等は自分に色々と質問して来たのです。
どうすれば偏在をあんなに大量に作れるのか？

とか、魔力は？とか・・。
まあ機密もありますので、特訓の賜物とだけ答えておきます。
彼等が三年を始めとする全学年にウワサを流してくれたせいか、
それからの授業では疑う生徒はほぼ皆無となりました。
やはり始めの一歩は肝心ですな。
まさか生徒と決闘なんて出来ませんしね。

で、再びルイズのクラスです。
ようやくキャラと名前が分るクラスとなりました。
前回とは違い、最初からデブキモオタの外観は消したので、
以前程、嫌われる事もなく、概ね好意的に感じられますね。
特に敵意が無いのは楽です。
まあ、たまにはバカな生徒も出ますが、今なら容易にあしらう事も
可能です。
たまに不意打ちでカッタートルネードとかファイヤーボールをブッ
放すアホもいますよ。
でも全部、叩き返しております。ハイ。
彼等も自分の魔法がいかに危険な存在なのか理解出来たみたいで、
二度とバカしなくなります。
やはり子供の躾けは大切ですね♪

アキバ先生は私の授業光景を教室の片隅で見学し、ノートに色々と
書き溜めています。
参考になれば良いのですが。
彼には後任をお願いしないといけません。
恐らくアルビオン戦までには・・・。

授業が終わった時の事です。
薔薇男こと、ギーシュ君が自分の側に駆け寄って来たのです。
何でしょうね？

「ミスタ・タロウ・ヤマダ先生、お願いがあって来ました。」

「ギーシュ・・君でしたよね？
タロウ先生で良いですよ。どう言う質問でしょ。
スリーサイズは秘密ですが・・・。」

「えっ、それは残念・・・って違う。
誰が男性のスリーサイズを聞きたいモノ好きが居ますか・・。」

「オヤオヤ、残念ですね。
では・・・。」

「お待ち下さい。タロウ先生。
先日対峙したゴーレムの事です。」

フム・・、あの〇ジンガーZの事ですな・・。
やはり漢(オトコ)の浪漫はスーパーロボット、そして武器ですよ。

「アレの事ですね。アレは私の「この世界」ではオリジナルで考えた、
マ〇ンガーZと言います。本当は学院の建物位の大きさが基準なのですが、
決闘用に作ったため、人間サイズで作りました。
それがナニか？」

「あ、アレで手抜きだったのですか？
そして建物サイズとは・・。」

「そのままの意味ですよ。

アレが本当に戦闘体系となる場合は巨大ゴーレムとして、相手を粉砕してしまいます。
まあこの世界では無敵ゴーレムとなる自信はありますよ。」

「凄い・・・、強そう・・・カッコイイ・・痺れます。」

「ギーシュ君、理解してくれましたか？」

「ええ、モチロンです。それに比較してボクのワルキューレの弱かった事。
もっと鍛えるべきでした。
天狗になる前で良かったです。先生。」

「キミはまだ若いんだ。鍛えて、想像力を付け、魔力を強めれば・・・。
何時かは世界がキミを振り向くだろう。
努力と研磨ですよ。若者は。」

「分りました。先生。努力して見ます。」

「ウンウン。素直な若者は好ましいですよ。」

「何時か時間の取れる時で結構です。個別指導をお願い出来ませんか？」

「個別ですか・・。まあ考えておきます。
私も新任なので色々と今は忙しいのですよ。
もし鍛える気があるなら、放課後は自分の作れる最強のゴーレムを作り、
対峙させて戦わせて見たらどうです？

魔力切れには注意してくださいよ。倒れたら大変です。」

「・・・ありがたい貴重な話をありがとうございます。
では、今日から早速、ヴェストリの広場で訓練して見ます。」

「ウンウン。頑張ってください。自分も時間のある時は見学に行きますから。」

「楽しみに待っています。」

ギーシュはそう言うと、教壇から去り自分の机にと帰って行った。
彼も好きなキャラですから、時間見て色々とコミュニュケーションを取り、
仲良くしたいですね。
この世界の彼もビンボなのでしょうか・・・。
だったらまたバイトで色々と活躍して貰いましょう。
教室を辞して、マチルダの待つ職員室へと帰ります。
最近の昼ごはんは彼女とシエスタと共に学院の広場で摂る事が多いのです。
ああ、シエスタですが正式に雇用する事にしました。
お給料は学院メイドの数倍。
最も形式上の事ですけどね。
オスマンから預かった支度金の殆どを彼女に渡し、自由に使わせております。
やりくりの得意な彼女に家の事は任せてたら食生活は完璧ですね。

昼餉を終え、しばらくボケっとしてたいので、彼女達には退散して貰いました。
こうやって一人で居るのも大切な時間ですからね。
この世界に再び拉致されて、魔法のチートと言うプレゼンツを貰っ

た自分ですが、
やはり地球世界は恋しいです。
親しい人は殆ど居ませんでしたけどね。
でも２４Ｈ何時でも開いてるコンビニ。
ヲタの聖地、アキバ。
夏と冬に並んだコミケ会場。
溢れる位販売されてたヲタグッズやＤＶＤ。
嗚呼、この世界に無いモノがすべてありましたから・・。
無ければ作ればいいジャンなのですが、一人の力は限界があります。
やはり同士を募るべきですな・・。
アキバ先生は既に同士ですが、機密はまだ明かせません。
機密を知るのはマチルダとシエスタのみ。
彼女達が付いて来てくれるでしょうか・・。
自分の趣味に・・・・。
悩んでてもヲタの道は開けません。
まずは一番信頼出きる彼女達にすべてを打ち明けるべきですな。
ルイズは、そろそろ何とかしておかないと、お姫様の暴走に巻き込まれてしまいます。
アレが絡むとこの国は荒れてしまいますからね。
さて・・。
今宵は彼女達に協力を依頼しますか。
聞いてくれるとは思いますが、拒否られたら・・。
泣くしかないっス。

ただ今授業ｃｈｕ♪（後書き）

ようやくヲタの道を切り開く決意をしたタロウです。
この世界にヲタグッズが溢れるか。
次回の更新をお待ちください。

告白（前書き）

マチルダさん達に告白します。

告白

タロウです。

自分はこの世界に来て最初の告白にドキがムネムネして・・・。

間違いました。

胸がドキドキです。

マチルダとシエスタに自分の胸のうちを告白し、付いて来てくれるか確かめるためです。
自分の我侭ですが、やはりヲタとは離れたくありません。
異界と言えども自分の趣味は殺したくありません。
ビバ、ヲタクですよ。やはり。
現世ではそろそろヲタクも立派な産業の一つとして、
認知されつつありますが、この世界では未知の分野。
ましてや彼女達は女性です。
ですが、彼女達なら受け入れてくれる。
そう信じたいです。
はあ・・ヘタレなのでマヂな告白は死ぬより辛いっス。
一度は死にましたけどね。（笑い）

さて、シエスタがお茶の準備をしてくれたので、彼女にも着席を薦め、
大切な話があるので聞いて欲しいと頼みました。
彼女達も怪訝な顔してましたが、よほどの事と思ったのでしょう。

黙って席に着き、話を聞いてくれる様です。

「マチルダ、シエスタ。
これから話す事は女性には受け入れられない話かも知れない。
もし自分が嫌いになるならそれでも構わない。
まずは話を聞いてくれないか？」

彼女達は紅茶をすすり、何でも話してくれと言います。
では、話すとしますか・・・。

「自分がこの世界は二度目だとは既に信じてくれてますよね？」

「ええ、モチロンです。」

「存じ上げていますわ。」

「で、自分にはある趣味があります。
女性には不愉快に思う趣味かも知れません。
ですが、この趣味を無くしたら自分では無くなる位、自分には大切な趣味なのです。
当然、この世界には無い趣味です。
受け入れてくれとは言いません。
ただ自分の人生の一つとして納得して欲しいのです。
聞いてくれますか？マチルダ、シエスタ。」

「モチロンです。私は貴方の僕です。」

「世界が敵に回っても私はご主人様のメイドです。」

「二人とも・・。
ありがとう。
さて、マチルダ。今から見せるモノを見ても驚かないで欲しい。」
そう言うと自分が日本で作り上げたアノ・・
ティファニアフュギィアを彼女に見せたのです。
マチルダは驚き、その人形を繁々と見つめます。
そして・・。
「コレってタロウ様が作ったのですか？」
「その通りです。
異界の母国、日本で作ったテファのフュギィアと言う飾って愛でる人形です。」
彼女はそのフュギィアをマヂマヂと見て、彼女の知るテファに瓜二つなのを確認してた。
そして・・・。
「タロウ様が異界から来たと言うのは真実なのでしょうね。
このテファの人形は本当に私の妹、ティファニアと全く同一です。
ここまで正確な人形はこの世界には絶対にありません。」
「理解してくれてありがとう。マチルダ。
そしてシエスタ、オレはある性癖の女性を妄想するのが大好きな人間です。
異界に住んでた時は、自宅警備員と称して、自宅でパソコンや人形作りで遊んで暮らしてた、
ダメ人間でした。

この世界ではンナ事できませんけどね。」

「タロウ様は働き者ですわ。」

「ん、今はね。
でも日本じゃホントにデブでキモヲタのマダオでした。
こっちに来なかったら死ぬまで引き篭もって生活してたと思います。
」

「そ、そんな勿体無い事を・・。
この世界にタロウ様を呼んだ神に感謝しますわ。」

「ええ、私もそう思います。タロウ様、私達が付いています。
どんな性癖でも私達は受け入れます。
人形を作るモデルになれと言われるなら、どんな嫌らしい格好でも
引き受けます。
どうか引き篭もらず、この世界で戦ってください。」

「私もですわ。タロウ様。
裸エプロンでも荒縄縛りでも何でも受け入れます。
私のすべてはタロウ様のモノです。
バッチコイですわ♪」

二人の告白にオレは・・オレハ・・・・。
感動
したどぉぉぉぉぉぉ・・・・。

彼女達はやはり前世同様、オレを受け入れてくれた。
もう世界を敵に回そうが、この二人が居たら怖いものはナシ。
我が生涯に悔いナシ・・。まだ死んでねーぞ・・。

んで、今後の事も色々と話し合う事にした。
今から色んな事件がこの世界で起きる。
そして確実にオラも関わる事になる。
まだ確定では無いが、その過程で色んな妻~ ズが増えてしまうが、
それは許してくれ。
前世でもこの二人がオラの妻~ ズの筆頭妻だったと告げると彼女達
は大喜びしてくれた。
そして、どんだけ女が増えても私達を捨てないなら、いくらでもバ
ッチコイ。
何だったら妻~ ズの教育も引き受けたる・・とか・・。
やはりこの二人を引き入れたのは正解でしたね。
信じてくれる。
そして共に歩いてくれる。
こう言う奥様は本当にナニが起きても大切にするべきですよ。
DVして喜んでるアンタ。
奥様はモノではありません。
生涯を支えあう大切な番いですよ。
まあ本人の自由ですけどね。。

マチルダにはシエスタと孤児の件も相談しといた。
これから起きる事件の過程と同時進行で、この地の権利を国から貰
ったる。
その時に改めて、この家の近くに孤児院を設立する。
そこの院長をマチルダに頼みたい。
そして孤児院と併設して、ヲタショップも作る。
彼等の日々の糧をそこで得れる様にしたい。
そう言うと、単に生活を見るだけで無く、将来の事も考えて下さる
とは・・と、
彼女も大賛成です。
テファはコッチに来る時に耳を作り変えて普通の顔に出きるから安

心してネ、と告げておいた。
シエスタも黙って聞き逃してくれたし・・。

色々と話し込んでメシを作るの忘れたとシエスタが言うので、
久しぶりにクリエイト魔法で、デニー〇のランチをクリエイト。
彼女達も大喜びで食ってくれました。
そしてその夜は更に激しくゲフンゲフンな夜になったのは言うまでもありません。
翌朝、アクア様のダイブで体調も完璧にして貰いましたけど・・。

しかし良かったぁぁ。
コレでヲタショップの道も少し前進したどぉぉぉ。

告白（後書き）

マチルダとシエスタとの密談の一日でした。

同士募集中♪（前書き）

いよいよタロウのヲタ同士を募る暗躍が始まります。

同士募集中♪

タロウです。
マチルダとシエスタが受け入れてくれた事で、いよいよヲタショップ、前進・・・。
とは行きません。エエ。
何せこの世界の連中の性癖と趣味が不明です。
いきなり変態ショップ出して誰も購入してくれなくて倒産なんて・・・。
悲惨です。
ですので、まずは健全なお店から出店するべきです。
彼女達もそれが安全と言いました。
ん、では、またあの手で・・・・。
ま、お店はアルビオン戦が終わるまでは封印しときます。
地下室に趣味のフュギィアは作り貯めてはおきますけどね。
作る時間あるの？って、そりゃ簡単ではありませんが、人間、成せばなる。です。
寝る時間を削ってでも彼女達を作る趣味は欠かせません。
最新のフュギィアは神ネットで取り入れてＰＯして詳細をコピーしてあります。
ハルケギニアでも最先端のヲタは自分と断言出来ますよん。
さて・・・。

自分と同じ匂いを持つ人間ですが、中々分りませんっ。
フュギィアを見せびらかす訳にも行きませんしね。
でもね・・。
やはりこの世界は前世の輪廻ですよ。
だって・・・。

「帰られるのをお待ちしておりました。
我が主(あるじ)、タロウ様・・・。」

ワルドが涙を貯めてオラの前に鎮座してたのです。
もうビックラですよ。
何でもオラがコッチに召還された頃、突然前世のワルドとか名乗る魂と
合体し、前世の幼女趣味が脳内暴走。
そして学院にオラが居ると知るや、魔法衛視隊を退職。
身体一つでココに来たとか・・。
アンタ、まだオラも仕事安定してないのに、辞めてどうすんの??

「大丈夫です。
自分は例え草の根をすすって生きてでも、タロウ様の負担はかけません。」

いや、思いっきり負担かけるじゃん。
オラ達がキャッキャッウフフな生活してて、ワルドさんに乞食同様の生活を
強いるなんてオニでは無い自分には出来ません。
ハア・・、二人に相談しますか・・。

もちろん彼女達は受け入れてくれます。
貴方の部下なら私達の同士と・・。
ご飯位はキチンと私が作って差し上げますとシエスタが言うと、ワルドは男泣き。
そして部屋はさすがに一緒はイヤなので、マチルダが庭の片隅に簡易な自宅をワルド専用に
作ってあげたのです。
ワルドは奥方二人に・・・感謝しますって。

はあ、しかしワルドも帰ってたか・・。
まあ彼には前世でも色々と世話になったしね。
新作のフュギィアをあげると、早速自宅の本尊にしますと、棚に飾って拝んでいました。
時代は変わってもヤツは変わってませんね。

さて、これで前世で自分を支えてくれた人はほぼ固めました。
後は実績作りです。
何と言いましても自分は未だに得体の知れぬ異国のメイジですから。
人形作って楽しめる日々が来るまでの道のりはまだまだ先ですな。
んで、学院の教師を続けるべ・・と、思い毎日を過ごしていました。
ほしたらさ、やっぱり絡んで来るのです。
クーデレちゃんのタバサたんが・・。

「貴方にお願いがあるの・・・。」

生徒ではありますが、質問も無く名前も本名も（もちろん存じてますよ。）知らぬ、
異国の留学生。
タバサ・・。

おそらくオカンを治して欲しいとか言うのでしょうね。

そしたらさ。
やっぱしこの世界、自分の斜め上を走ってたみたいです。

だって・・・。

「貴方の僕にして欲しいの・・。」

「ハッ？？？ミス・タバサ。もう一度お願いします。」

「貴方との前世の関わりを思い出したの。
お母様の事はいずれ何とかなる。
だけどモンモランシーやキュルケに貴方を取られる前に貴方の僕になりたいの。
正直、仇などは、もうどうでも良いの。
私の願いはただ一つ・・。」

「ゴクリ・・・。」

「前世で最終回まで読めなかったヤヲイ小説の続きが読みたい。
そして貴方の脳内にある小説をすべてこの世界に出して欲しいの。
私にはこの貧相な身体しか無い。
こんな身体で良かったら代償に使っても構わない。」

いや・・・。タバサさん。私は変態ですがガチロリでは無いのですが・・。

「これから戦争が始まる事も思い出している。
私では足手まといとなるかも知れない。
だけど、貴方の背後を守れる位の強さは持っている。
お願い、私を貴方の僕に加えて・・・。」

そう言えばこの方、前世でヤヲイにハマっていましたからね・・・。
しかしこの方、前回は妻~ズには加えていませんぞ。
どうしてこうなった・・・。

「タロウ様、私達も貴方の小説に狂ってた人間です。
今、彼女の告白を聞きすべてを思い出しました。

あの脳に響く甘美な小説がこの世界に伝わっていないのは、おそらくハルケギニアが
一度は滅びたせいかも知れません。」

何ですとぉぉぉ。
一度滅びたのですか??
私のラ・フォンティーヌ領も・・・・。

「この地は一度滅びたってホンマでっか?
皆様・・。」

「どうやら本当らしいです。
私も母の遺言を調べるためにトリスティンのアカデミーで調査した事があります。
その中に、この大陸が一度浮き上がり人民すべてが壊滅。
その後新しい民がこの地に生まれついたなり・・と言う文献が残されてました。」

アクア様、ホンマですか?

(ウム、タロウ亡き後、この地の精霊すべてが引き篭もってしまい、すべての精霊が力を放棄してしまったのだ。
その後、この地に住む単なるモノはすべて死に絶えた。
我はそう記憶している。)

あれま・・。
オラの死去ですべての精霊様が引き篭もられたのですか・・。
んじゃこの地を生き延びさせるにはオラは死ねない・・・っつー事ですか?

（その通りだ。お前の存在はもはや単なるモノとは違うのだ。
さあ、我もあのお前が書いてた小説とか言う甘美な読み物を欲してる。
早く書くのだ。タロウよ・・・。）

精霊様も読者だったのですね。
しかし、自分の死去がハルケギニアの滅亡に繋がってたとは・・・。
オラはどうしたらエエの？

〜死ななければ良いだけの事よ。
我や他の精霊も今度はタロウを逝かせぬと、気合を入れておる。
頑張ってこの地の神となるのだ。
タロウ、いやお父様よ・・・。）

「お父様って・・・。」

（もはやお前がこの地の神となるのは我等精霊の間では確定しておる。
頑張って我等、すべての精霊を仕えさせて欲しい。
我が父となるタロウよ。）

「タロウ様、やはり貴方はタダモノでは無かったのですね。
まさかこの地の運命にも関わる存在だったとは・・・。」

「タロウ様、キュルケやモンモランシーに奪われる前に私を差し出す。
私の主となって欲しい。」

もうメチヤクチャです。
他の精霊様が乱入しなかったのは幸いでしたが、一度彼等にも挨拶

しておくべきですね。
それにしてもヤヲイか・・。
ネタはいくらでもありますからね。
書くのは楽ですが、まずは地盤を固めてからね。
タバサさん、もう少しお待ちを。

同士募集中♪（後書き）

何かタロウの運命がハルケギニアの運命にも関わってたらしいです。
驚愕の運命を聞いたタロウはどうするのか・・・。
次回を待て。

キュルケ（前書き）

今回は微熱さんのターンです。

キュルケ

私の名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

人は私の事を微熱のキュルケと呼ぶわ。

ゼロのルイズとは違う、ボンキュッボンのナイスバディの女性よ♪

トラインアグルのメイジだし、全てで彼女に勝ってるわ。

でもね・・。

一つだけどうしても勝てない事が出来たの・・。

それは・・・。

「きゃ~~~♪ペソペソちゃん、カワイイ♪」

そう、ルイズの使い魔、ペソペソ。

悔しいけど見てるだけで癒される使い魔なんて初めてよ。

何でもルイズに召還されたタロウ先生が代わりの使い魔として与えたって言うじゃ無い。

はあ、いいわね・・。

そして何故か最近はタバサも私から離れてタロウ先生の所に入り浸っているのよ。

周囲に色んなオトコは居るけど、最近は微熱も感じないのよ。

どこかに私の微熱を感じさせてくれる人は居ないのかしらね。

最近は本当に同学年の男子をからかっても楽しく無いのよね。

ルイズもゼロとか罵倒されてもペソペソ居るからいいモンだし・・。

ヒマなのでタバサを少しだけよ。

少しだけストーカーして見たの。

そしたらタロウ先生の自宅に毎日の様に通っているのよ。

見た事の無いメイジの男性も居るし、メイドさんに元秘書のロングビルさんも。
確かタロウ先生って最近、この国に来たばかりよね。
どうしてあんなに人が集まるの??
凄いメイジだって事は分かってるけど、それだけじゃ無い??

それから私は彼もついでにストーカー始めたの。
授業?どうでも良いわ。
セクハラ校長の居る学院ですもの。
イザと言う時はアレにお尻でも触らせたら何とかなるわよ。

そしたらさ、タバサったら先生のトコで本ばっかり見てるのよ。
ええ、確かに本だわ。
でも見た事の無い表紙の本ね・・。
華やかな絵が描いてあって、表装も見た事無い感じだし・・。
不振に思って、タバサが木陰で読んでる本を一冊だけ勝手に読んで見たのよ。
そしたらさ・・・。

ナニ???コレ!!!!

ゴーレムを操る男の子が綺麗な男の子と・・・・・・。
変な事してる内容なのよ。
タバサったら、何時の間にこんな本を・・。
でも彼女は怒って本を奪い返すと、部屋に入って引き篭もってしまったのよ。
あんな本って今まで絶対に見た事無かったわよ。
もしかしてタロウ先生の家にある本かしら・・。

こうと思ったら行動するのがツェルプストー家の信条よ。

もう黙っていられないわ。
私はタロウ先生の自宅を訪ねる事にしたの。
用件は・・・。
勉強を教わるでいいわね。名目上は。

学院のすぐ近くに建てられたタロウ御殿は、先生が一人で建てたとは思えない位、
ガッチリした作りだわ。
あの素敵なメイジの方の家も敷地内にあるみたい。
それにしても綺麗な池ね・・・。

「こんにちわ♪学院の生徒のキュルケと言います。
タロウ先生はいらっしゃいますか？」

「はーい、今開けますね♪」

学院で働いてたメイドさんだわ。この方。
名前は知らないけど・・・。

「えっと、ご主人様に御用でしょうか？」

「ハイ。少し魔法の事でお聞きしたい事がありまして。」

「もうすぐ帰って来ると思いますから、中でお待ち頂けますか？」

ヨッシャ♪中に入ればコッチのモノよ。
きっとあの本の秘密もココにあるわ。
あ、あんなイヤラシイ本なんて・・・。
私も読んで見たいのよぉぉ。

でも初めての家で家捜しなんて出来ないわ。
どうしよう・・・。
そしたらタロウ先生がお帰りになられたの。

女は度胸よ。
直球で勝負だわ。

「タロウ先生、こんにちわ。」

「おや、貴女は・・・。キュルケさんでは無かったですか？」

「ハイ、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーです。
長いのでキュルケで結構ですわ。」

「そうですが、ではキュルケさん、どう言う用件でしょ。
出きる事ならご相談に乗りますが。」

「あのぉぉ、タロウ先生ってタバサに変な本を貸していません？」

ギクッ・・・。もう見られたのか。
あれだけ管理には注意しろとタバサには言ってたのに・・・。

「さ、さあ・・どんな本かは知りませんが・・・。」

ウソだわね。絶対にクロよ。この人。
知らんぷりしてやがるわ。
絶対にカモにしたる。。

「先生、最近タバサがこの家に良く通っているのを見かけていましたの。
そしたらアノ本でしょ。
若い男性同士が熱い抱擁を交わすいかがわしい本・・・。
でもね。先生。
私も少しは興味ありますの。ああ言う本に。
もし良かったら私にも読ませて頂けないかな・・と。」

うわ~~~！！不味い。
まだ発売前だし、店も無いのに出せる訳が無いっしょ。
どうするべ。

そしたら丁度タイミング良くタバサたんが来賓されたのです。

「・・・・キュルケ。どうしてタロウ先生の家に来てるの？」

「あら、タバサ。私も貴女が読んでる本を読みたくて来たのよ。」

もう暴露したるもんね。あんな楽しそうな本を一人占めなんて許さないわ♪

「・・・・アレはまだこの国では売り出していない先生が作った本。
私は彼に読後感想を伝えてるの。コレも仕事・・。」

「アラ？だったら私も感想を言うわ。
ね、先生。私だったら熱い話も言えますわ。だから・・・。」

「分りました。キュルケさん。
ただし、一つだけ約束してください。
今から渡す本は将来、この国で売り出す予定です。

ですので、タバサさんと貴女以外には絶対に読ませない。
タバサさんも読む場合は必ず自室かココだけで読む事。
もし他に知られたら、もう貴女にも読ませません。」

「・・・先生、それは困る。
もう絶対に外では読まない。誰にも知られない様にする。
この本が無いと私は生きて逝けない。
カホル君とシンヂ君の恋の話は、私の心のオアシス。」

タバサは涙目でタロウに訴えてる。
どんだけ真剣に読みたいの??

「うわっ、モロに言ってますわ。タバサさん。
わ、分りました。とにかく秘密にしててくださいよ。
まだ初期ロットしか無いんですから。
今後はタバサさんとキュルケさんに感想をお願いします。」

タロウ先生から与えられた「珍世紀ウェヴァンゲリホン」は本当に衝撃的な話だった。
お父様に捨てられたシンヂ君がゴーレムに無理やり乗せられ、
戦いの中で知り合った彼との悲しい恋と別れ。
もうコレを読んだらイーデルヴァイの勇者なんて陳腐で読めなくなるわ。
タバサは彼等の恋愛の話に真剣に読んで、読後感想文をタロウ様に渡してました。
え?私のタロウ先生の呼び方が変わってるって?

当然でしょ。
こんな衝撃的なストーリーを作られる方を先生如きで済ませられる訳がありませんわ。

ああ、シンヂ君、私が貴方の側に居たら、絶対に幸せに出きるのに・・。

ハイ、キュルケさんもコッチ側に来てしまいました。
彼女達以外には発売出きる体制が整うまでは絶対に封印しとかないとね。
はあ、、次のシリーズも考えておくべきか。

「ああ、カホル様ぁぁぁぁ・・・。」

キュルケ（後書き）

この話はフィクションです。
ええ、すべてフィクションです。

本年最後の更新となりますが、皆様、良いお年を。
タゴサク

お姫様来訪♪（前書き）

いよいよゼロ魔最初の山場となるお姫様が来訪されます。

お姫様来訪♪

ふんふんふ~~~ん♪ふんふふ~~ん♪
私の名前はアンリエッタ・ド・トリスティン。
名前が示す通り、トリスティン王国の王女。
人は私をアホ姫とか幼女姫とか言ってますが、そんな事はもうどうでも良いのです。
アノ方がこの世界に帰られたのです。

嗚呼、あの麗しき物語の続きが読める世界になるとは・・・。
私は情報を察知すると同時にあの方の周囲を探らせました。
すると、既に女狐が多数アノ方の下に潜り込んでいました。
王女と言う枷が無かったら私もあの中に入り込むのに。
相変わらず貧乏王国の王女と言う、情けない配置に居る私です。

もうお気づきと思いますが、私は二度目のアンリエッタです。
あの世界では私はアルビオンの女王となりました。
しかし・・。
私はアレには心底呆れたのです。
もうアレでいいですわ。ウエールズは・・・。
私との婚姻後、アレはルイズの友人だった
ギーシュとか言う若者が可愛く思える程の浮気ものになったのです。
アレは・・・。

アノ方みたいに才能のある人なら多少の浮気も許せます。
ですが、能無しの癖にカッコばかり付けるアレには呆れました。
この世界でも色々と言い寄られていますが、もう騙されません。
私はアホ姫の仮面を被りつつ、アノ方がお帰りになるのをひたすら待ち続けました。

水の精霊様もアノ方がこの世界の窮地を救う神となられるのを切望されてるとか。

あの素晴らしい物語や数々のオモチャ。
そして世界を救ってくださる慈悲深い御心。
私はあの方に仕えとうございます。
ソのためなら、ンナ国、潰しても一向に構いません。
ウチのオカンはこの世界でも引き篭もりしておりますしね。

「姫様、ご機嫌宜しいですね？」

「アラ？当然よ。マザリーニ枢機卿。
この世界の救世主が帰って来たのですもの。」

「そうですね・・。私も前世ではアノ方に色々と助けて頂きました。
この世界も救って頂けると確信はしています。」

「あの方のためなら、この貧乏国家など潰しても構いません。
ですが、それでは民が溜まりませんので・・。
何とかあの方の慈悲をお願いするしかありませんね。」

「その通りです。
あの方が存命してる間には浮いてた戦艦ムサシもあの方が亡くなられて、
すぐにラグドリアン湖の奥深く沈んでしまいました。
アレがあの世界の崩壊の始まりでした。」

「もう終わった事です。
私達はあの方におすがりして、この世界の窮地と未来を救って頂くしかありません。

そのためなら・・。
この私の些細な肉体を捧げる事も厭いませんわ♪
ぽっ♪」

「前世では姫様もアルビオンでたいそう苦労されましたからね。」

「ええ、もう顔だけの能無しオトコはマッピラです。
オトコは甲斐性と懐の深さと知識です。」

パッカパッカと言う馬車を引く馬の蹄の音の中でマザリーニとアンリエッタは、
物騒な話し合いを続けてた。
そう・・彼女達も・・・。
帰って来た人だったのだ。
しかも彼女は水の精霊に拠り、すべての事情も察知してた。
今度こそは間違わぬ。
すべての精霊が慕うアノ方こそが、この世界の王なのだ。
マザリーニと私を乗せた馬車は一路、アノ方の居る居宅へと進んでいた。

「諸君、授業は中止ですぞ。」

授業中に突然乱入して来たフサフサ頭のコルベール先生の声で、自分の授業は
中断されてしまった。
もうそろそろイベントの始まる時期か・・。
原作のイベントがなくなってるので、時期が曖昧となってしまって

たが、
多分、アノ姫様が来るのだろう。
そう考えてたら、オスマンから至急、自宅に帰っててくれ。
事情は帰れば分るとの事・・。
怪訝に思い、オラは自宅に帰る事にしました。
自宅に帰ると、タバサとキュルケが本を必死で読み、
シエスタがお茶を入れて寛いでおります。
庭ではワルドが草刈を。
マチルダは自分の背後に立ち、色々と手助けをしてくれてます。
さて、帰宅しましたが・・・。

すると・・。

「タロウ様、大変です。お城から姫がコチラに来られています。」

「ふぇっ??姫様が・・・。」

「ハイ。もう来られました・・。」

すると、会いたくも無かったあのアホ姫がマザリーニと共にウチの
玄関から入って来たのです。
護衛は・・・いません。
二人だけです。

「タロウ様、お久しぶりでした・・・。」

彼女はそう言うと自分の胸に飛び込んで来られたのです。

エっと・・・。

何でこうなってるのですか？？？？

マザリーニさん、ニコニコしてないで引き剥がしてください。

「あのぉぉ、どうして姫様が・・・。」

「まっ、私の事もお忘れになったのですか？（怒り）」

「だって自分と姫様は初対面ですよ。（少なくともこの世界では。）」

「じゃあ暴露しましょうか。

私、ことアンリエッタとマザリーニはアノ世界を経験した人間です。

つまり・・・。」

（ヤツ等も帰って来た単なるモノと言う事だ。父上よ。）

「精霊様、まだ父上にはなって無いハズですが。」

（些細な事よ。父上が父上となるのは既に確定しておる。

さあ、ヤツから事情を聞け。そしてこの国を・・・。

そしてこの世界を父上のモノにして、この地に君臨するのだ。）

凄い事を言ってますが、アクアさん・・。

それにしてもアンリエッタとマザリーニが帰って来た人ですと。

オラはこの方には指一本触れていませんでしたぜ・・。

どうしてこうなった・・・。

そこでオラは気づいた。。

この場に居る人間で事情を知らぬ人間が居るのを・・。

チラリと後ろを見ると・・・。

キュルケがフリーズしてたのです。
ヤバッ・・。

（父上よ、案ずるな。あの単なるモノには我が事情を流し込んでおく。
すべては些細な事よ。）

流し込んでおくって、アクアさん・・、どうするの？

そしたらキュルケの額の辺りから光が発生。
見る見るうちにキュルケは目を回し、テーブルに突っ伏してしまいました。
どったの？

（ヤツの脳に直接、前世のヤツの事を流し込んだだけよ。
数刻程度気絶したら事情を理解出来てるハズ。
さあ、父上よ。アレから事情を聞くのだ。）

キュルケをタバサとマチルダにベッドに運んで貰い、俺たちはアンリエッタから
事情を聞く事にした。
だが、内容はかなり衝撃的な内容だった。
まず、アンリエッタが嫁いだウエールズが婚姻後、家庭を顧みぬナンパ男になってしまった。
そしてアンリエッタの生涯は不幸の一文字であった事。
今生でもウエールズから言い寄られてるが、もうマッピラ御免。
そしてオレ達の家庭が凄く眩しくて羨ましかったと・・。
マザリーニにはラグドリアン湖には今でもムサシが沈んでる。
コレはオレが復帰出きるまで封印してあるとの事。

その他にも色々と衝撃的内容があり、さすがにオレも頭がオーバーヒートしてしまった。

だがフリーズもしていられない。
ヒートした頭はアクア様のダイブ通過でクールにして貰ったが、考えが纏まらない。
要約すると・・。
アンリエッタも妻~ズに加えろ。
そしてこの国はすべて任せてもＯＫ。
権威が無いと言うならすべての精霊様が国民の前に姿を見せても構わぬとか・・。

何か凄い事になっちまった。

そしてアルビオンのレコンキスタだが、やはりこの世界でも暴れてる。
精霊様が協力したるからチャッチャッと殺ってしまえって事らしいです。
レコンキスタ殲滅の英雄として、オレを国のトップに迎えたら完璧じゃネ？との事。

イヤだな・・。
オラはノンビリとヲタショップを作れたらそれで良いのに・・。

考えがまとまんねぇ。

ふんが~~~~！！

お姫様来訪♪（後書き）

皆様、新年おめでとうございます。
アンリエッタの告白編はいかがだったでしょうか。
彼女の暴走はまだ続きます。

お姫様来訪♪2（前書き）

お姫様パニックは続きます。

お姫様来訪♪2

タロウです。

アンリエッタの告白で頭が完全にブッ飛んでいます。
どうしたら良いのでしょ。
まさか国のトップまでが帰って居たとは・・。
しかも国をあげても良い。今は危険な誘惑ですな・・。
まだ時期が早すぎです。
それよりも、この土地の権利を頂き、フュギィアとか本を出すのが先ですよ。
あ、姫様。
その本はまだ発売前ですが・・。
はあ、もう読んでいるのですね・・。

「嗚呼、カホル様の物語がこうなってたとは・・。
シンヂ君、キミだけは幸せにして見せるって・・。
何て素晴らしいセリフでしょ♪」

姫様は珍世紀ウェヴァンゲリホンに熱中されておりました。
カビの生えたイーデルヴァイの物語の何百倍もの内容とは自負してますがね。
この世界で顛末を知るのは自分だけですし。

さて、どうしましょ・・。
いくらトップが騒いでも、自分は異国から来たばかりのメイジ。
権威もナニもありません。
単に魔法が出きるだけです。ハイ。
好きに生きるとは言いましたが、ムチャクチャはするつもりはあり

ません。
元々ヘタレの自宅警備員です。自分は。

う~~~ん・・・。
少し頭を冷やしますか。
皆さんにしばし退席するからと告げ、大空にフライです。逃避です。
魔力が多いってこう言う時は便利ですね。
二時間は飛んでたでしょうか。
大分頭も冷静になりましたので、自宅に帰りますと・・・。

「ダーリン~~~~！！」

突然キュルケさんに抱きつかれたてしまったのです。
どったの??

「ゴメンナサイね。ダーリンの事を思い出せなくて。
精霊様に記憶を戻してもらって前世の事も完璧に思い出したわ。
さあ、ダーリン。ベッドに逝きましょ♪」

チョッ、キュルケさん。どうしたのですか。
人のベルトを外さないでください。

止めて~~~~♪

すると、彼女はボコンと言う音と共に床にヘタリこんでしまいました。
タバサさんが杖で殴って下さったのです。
GJですよ。タバサさん。

「・・・・キュルケ、まだ早い。

私達は学生。せめて先生が学院を退職するまでは待つべき。」

タバサさん、何か怖い事を仰ってますが・・・。

キュルケさんもすぐに復活されました。

「そうね。タバサ。嗚呼、早く先生が手柄を立てて国に奉公できないかしら。
そしたら私は実家からも縁を切って貰って、身体一つでタロウ様に嫁げるのに。」

「お待ちなさい。
タロウ様は私と婚姻して頂き、トリスティン王国の王となって貰うのですよ。」

もうメチャクチャです。

さすがにシエスタさんやマチルダさんは・・・・。

アララ・・。
顔に青筋が出てますね。
相当のお怒りみたいで・・・。

ハア。
度胸を決めますか・・。

「皆さん、静かにしてください。これから今後の事を話しますので。」

オラがそう言うと、騒いでた彼女達も静かにしてくれた。

はぁ、心臓に悪いわ・・・。

「まず、自分の今後です。精霊様やアンリエッタ様の言われる事は理解出来ました。
ですが、今すぐとは行きません。
自分はまだこの世界では何の実績も無い異国のメイジに過ぎません。」

「そんな事は無いです。既にこんなお話も作ってるではありませんか。」

「静かに！！まだ話は終わっておりません。」

彼女達も怒声を浴びせてようやく黙ってくれました。
あまり怒鳴りたくないのですよ。
オラはヘタレですから。

「姫様、まず確認したいのですが、既にレコンキスタの攻撃は始まっているのですね。」

「は、ハイ。その通りです。
アルビオンからは救援を求める手紙とか来るのですが、アレとは関わりたく無いので、
シカトしています。」

ウエールズさん、アンタ、相当嫌われてるね。
アレだとよ。シクシク・・・。

「ふんじゃオラに依頼してください。
レコンを放置してたら次はこの国がターゲットです。

覚えてるでしょ？」

「そうですね。確かに前世でもトリスティンが次の目標でした。」

「幸いにも魔法と魔力は∞のチートを授かっています。
これならどんなムチャでも出来ます。
で、そのレコン潰したら、この土地一帯をオラに授けてください。」

「アラ？この辺鄙な土地だけとは言わず、トリスティン全土でも結構ですわ♪」

「要りません。この辺りだけで結構です。
ココに前世同様のショップと書籍店と飲み屋を作ります。
それだけでオラは充分です。」

「まあ謙虚です事。では、レコン殲滅後にこの辺り一帯すべてをタロウ様に献上致します。
私も色んなお買い物が楽しみです♪」

「はあ・・。その時はヨロシクお願いします。
ついでに孤児院も作りますよ。院長はマチルダさんです。」

「分りましたわ。その様に手続き済ませておきます。」

「そう言えば今回はルイズのトコには行かないのですか？」

「アラ、だってルイズの虚無は無くすのでしょ？
だったら無謀なお願いはしませんですわ。
アレには手紙も出していませんし・・。」

「アレ・・ですか・・。
ハア・・分りました。
では王女様と枢機卿の依頼でレコン壊滅に向うと言う事で宜しいですね。」

「エエ。タロウ様ならチャッチャッと殲滅してしまうでしょ。
ヨロシクお願いしますね♪」

何かお使いにでも出す感じですな。
ま、潰しておかないとアレは面倒な事になります。
あ、そう言えば・・。

「水の精霊様。
今回はアンドバリの指輪は奪われたのですか？」

「案ずる事は無い。父上よ。
ヤツ等に渡ったのはれぷりかだ。
一応、アンドバリの指輪みたいな事は出きるが、父上が戦場に出た瞬間に壊れる設定だ。
回収する必要も無い。」

「・・・・そうですか。では消しても構いませんね。」

「その通りです。父上。」

「一回出陣前に全精霊様にも会っておきたいのですが。
大丈夫ですか？」

「それなら今宵にでもラグドリアン湖に来て貰いたい。
あそこなら機密も守れるので。」

「分りました。今宵、ラグドリアン湖に出立します。
同行人にワルドとマチルダを連れて行きます。」

「お待ちしています。父上。」

そう言うと彼女はシュッと言う音と共に消えた。
恐らくラグドリアン湖に帰ったのだろう。

「姫様、今伺った通りです。今宵、ラグドリアン湖に出かけ、全精霊様と会談。
その後アルビオンに出かけ、レコンキスタを殲滅して参ります。
同行にはワルド子爵、マチルダを連れて参ります。」

「分りました。ではトリスティン王国王女として正式に異国のメイジ。
タロウ・ヤマダ殿にレコンキスタの殲滅を依頼します。
殲滅後の褒章は、帰国後と言う事で宜しいですね？」

「モチロンです。ですが、この辺り一帯の土地は頂いても宜しいですよね。
孤児院を建築して出かけたいのですよ。」

「結構です。ご自由にお使いください。
詳細はマザリーニが書類を書いておきますので。」

ヨッシャ。
コレでこの土地はオラ達のモノ。
出かける前に孤児院作っておいて、テファ達を連れて帰るどぉぉ。

こうしてタロウ達はレコン殲滅の旅にようやく出かける事になりました。

お姫様来訪♪2（後書き）

キュルケも思い出してしまいました。
タロウの妻~ ズはどうなるのでしょ。
次回は精霊との集い＆ａｍｐ；アルビオンへの旅立ちです。

熱闘　ラグドリアン湖（前書き）

ラグドリアン湖に精霊が集います。

熱闘　ラグドリアン湖

タロウです。
あれから姫様はルイズと遊んで帰られるとの事で学院に行かれました。
チョッ、姫様。その本はまだ持って逝かないでください。
後で届けますから。
ルイズに見つかると騒ぎます。
お願いしますって・・・。

はぁ・・・。

オラはマチルダと二人で自宅横に大きな孤児院と店舗を建築。
こんだけあればテファと孤児を養う施設としては充分でしょう。
旅費と支度金もマザリーニから貰いましたし・・・。
自宅の留守をシエスタとタバサ。
そして何故かキュルケも留守番をするとか言うので、頼んでおきました。
くれぐれもアルビオンには来るなと釘を刺しておきます。
彼女達は放置してると、付いて来ますからね。
危険ですので、止めて貰いました。

さて、ワルドさん、マチルダさんを引き連れ、オラは馬に颯爽と・・・。
乗れません。
やはり前世の事は前世の事なんですね。
完璧に乗馬が出来なくなってました。
マチルダの馬の後ろにしがみ付く事にしたのです。シクシク・・・。
彼女も前世同様と嬉しそうです。

ワルドは、今回は盾になりますと気合充分。
いや、居てくれるだけで助かるのですが。
トリスティン王国の紹介状も頂きましたし、これで安心して旅立てます。

さて・・。
馬を走らせる事、しばらく・・。
夜半にようやくラグドリアン湖に到着しました。
尻が痛くて割れてしまいましたが。

さて・・。

ノンビリとはしてるヒマはありません。
精霊様を待たせているの・・・・。

（（（（お待ちしておりました。お父様♪））））

（@д@）／？

目を疑いましたよ。

だって、精霊様がすべて土下座して待ってたのですから。
ビビルなって言ってもムリっス。
オラはヘタレですからね。
ワルドもマチルダもビックラして腰を抜かしてます。
ムリもありませんよ。
この世界最高の精霊様がすべて揃って居るだけでもビックラなのに、
土下座して待ってるのですから。

「精霊様、どうしたのですか？
自分如きに土下座などして・・。」

（（（（（我等の父となるべき人を立って待てるモノですか。
我等の父となるタロウ様。））））

シクシク。
もう確定なんスか？
この異界の神になるっつーのは・・。
まあなれと言うならなりますが、せめて人としての寿命を生きた後にして欲しいです。
人間としての寿命が終わるまでは、気ままに人間させて欲しいっスよ。

そいからオラは精霊様と色々と話し合いをしました。
ルイズの虚無はゼロ様が排除し、前世同様に風のドットにする。
コレであの子も幸せになるでしょ。
その辺りはオラがアルビオンから帰国後にする事に決定。
んで、自宅の地下にすべての精霊様が引越しされるとの事。。
ちとヤバイのでは？
特にフレイム様は火の精霊。
火事になりますよ。
そしたら、彼女・・。（精霊様はすべて女性形体ですた。）
火事にはならぬ様にするから置いてくれ・・・と泣いて頼むのです。
さすがに女性に泣かれるのはヤなので、んじゃ絶対に火事にはしないでネ！と、
念押しして来て頂く事にしますた。
今回のアルビオン遠征にはすべての精霊様の分身がオラに着いて来てくれるって事です。
スゲ・・・。

腰を抜かしてたワルドとマチルダはアクア様のダイブで復活。
ラ・ローシェルに向けて出発・・・。
明日でいいや。
今宵はココで野宿です。
もう気分が疲れました。

その夜、ワルドとオラは湖畔でキャンプ。
マチルダは錬金で作った小屋に寝て貰いました。
明日はノンビリと逝こうっと♪

熱闘　ラグドリアン湖（後書き）

テレビ見てました。
格付けチェックのＧＡＣＫＴさんは凄いわ。

・・・・・・（前書き）

筆者も驚く斜め上の事態となりました。

・・・・・・・

翌朝・・・。

オラ達は更に驚愕の斜め上の事態となってたのです。

「タ・タロウ様・・・・。
アレってまさか・・・。」

「ワルド、オラも腰を抜かしただ・・・。」

「タロウ様、しっかりしてください。男でしょ？」

「いや、男でも腰を抜かしますよ。コレには・・・。」

そう・・・。

湖上には、伝説の戦艦ムサシが浮かんでたのです。

「父上よ。お預かりしてたムサシは確かに返納しましたぞ。」

「父上よ。風石は数十年は大丈夫なレベルは搭載しておきましたぞ。」

「父上、砲弾の代わりに私の火石を整形して搭載しました。」

・・・・・・。

彼女達の話を要約すると、預かってたムサシを返還したど。
風石も火石も搭載したど。

何時でも戦って濃いや。ごるぁぁぁぁの体制だとか・・・。
何せ地球上の歴史でも最大最強の戦艦が武蔵と大和。
そのムサシが二千年の沈黙を経て、再びハルケギニアに帰って来たのです。
しかしどうしよ。
三人しか居ないのですが・・・。

「父上よ。偏在を使えば良いですぞ。」

おお、その手がありましたな。
ワルドとオラは作れるだけの偏在を作り、ムサシを動かす事にしました。
こう言う時は風使いは便利ですね。
自分と同じ人格の偏在を作れるのですから。
ワルドの偏在には単純な部署に付いてもらい、重要区画はオラの偏在に任せます。
ん・・・。
コレで何とか出きるね。
あ、マチルダも乗せないと・・・。

「タ・タロウ様、私如きが乗っても宜しいのですか？
この様な恐れ多い存在の船に。」

「帰りには孤児も乗せるからね。
広いから迷子も出ると思うよ。孤児の指導は任せるヨン♪」

「分りました。孤児は私に任せてください。
それにしても浮かぶのですか？この様な巨大な船が・・・。」

「大丈夫ですよ。前世でも飛ばしましたし、風石も満載してあります。
数十年は飛ばせられる量らしいですよ。」
「それはまた素晴らしい。。では行きますか。」
「ウン。白の国、アルビオンへレッツラゴー♪」
オラの掛け声と共にムサシは二千年の眠りから目覚め、大空へと舞い上がるのだった。
精霊様も乗ってるので、万一の魔力切れもノープレブレムでっす♪
ずごごごごごと言う擬音と共に、幾多の年月の眠りから今。
戦艦ムサシは蘇るのだった。
いや、前世でも飛ばしたけど、このサイズが飛ぶなんてマンガでしかあり得ません。
速度は実際の武蔵が出し得た27ノットです。
これが平均速度となります。
考えて見たらこの世界でのムサシって浮かんでただけで戦闘はしていませんよね。
今回が初の実戦ですな♪
でも艦首の菊花紋章が消えて大穴が開いてるのですが。
精霊さま・・。
「父上よ、アレは父上の脳内にあったアレを設置しただけですぞ。」
「アレッて・・まさか・・・。」

「波動砲とか言う兵器です。」

Ｏｈ－Ｎｏ！！！！

精霊様、何と言う事を・・・。
悪乗りが過ぎますぞ。

ンナの地上で発射出来る訳がないっしょ。
この星や双月が消し飛んでしまいます。
アレは絶対に封印ですな・・・。

まあ波動砲は封印でヨシとして・・・。

（菊花紋章でフタをしときました。）

とりあえず砲塔のチェックです。

お、丁度良い目標があります。

フラフラと飛んでるドラゴン目掛け発射♪

頭怒ぉぉぉぉぉんと言う音と共に砲弾が大気を切り裂きドラゴン目掛け
飛び去ります。

スゲーーー・・・。
甲板に誰も居ないから良かったけど、居たら即死ですよ。
確実に。

ブチっ・・。

目標のドラゴンは消し飛んでしまったみたいです。
ありがとう。ドラゴン。
君の犠牲は絶対に・・・忘れます。

・・・そう言えば誰か乗ってた様な気がしますが・・・。
ま、いいか♪

（後にあのドラゴンに乗ってたのがジュリオだったと知るのだ。
さらば、ヴィンタールヴよ。）

ムサシは悠々と空を飛び、昼前にはアルビオン大陸に到着ぅぅ。
さて、アホ王と面会すっか・・。

え？？何故アルビオンの王がアホかって？？
そりゃこんな事態になるまで、国を放置してたからよ。
有能ならンナ事にはなりません。
この世界のウエールズはナンパ男かな・・。
アンリエッタが毛嫌いするなんて相当だど。

まずは迂回して、王都ロンディウム後方からハヴィランド城に着陸しますか。
あ、ムサシの装甲ならこの世界の砲弾がいくら命中しても蚊に刺された程度っス。

ハヴィランド城は見知らぬ巨大戦艦の出没に大騒ぎとなってた。

「アレは何だ。どこの船だ？」

「父上、艦尾にトリスティンの国旗が見えます。援軍ですぞ。」

そう、出撃時に国旗を掲げてた方が楽じゃネ？とのマチルダの指摘で、

国旗を作り艦尾に掲げてたのだ。

マチルダさん、ＧＪでした♪

主砲を旋回させ、敵軍の方へと向けておいて、オラ達はお城へと向いました。

あ、もちろん偏在は残してますよ。

オラ達はハヴィランド城へと歩き始めたのです。

あ、マチルダさんは留守して貰いました。

色々とこの国とは揉めた一家ですからね。

・・・・・・（後書き）

ムサシ復活編でした。
前回では実戦に使う事の無かったムサシがどうするか。
次回をお待ちください。
波動砲は封印ですよ。
作ったけど危険過ぎです。

会談（前書き）

いよいよウエールズとジェームズとの会談が始まります。
いきなり戦闘なんてムチャはしませんよ。

会談

タロウです。
マチルダをムサシに置いて、オラとワルドの本体はハヴィランド城に入りました。
戦艦にビビったのか、援軍と気づいたのかは分りませんが、敵対行動は取ってませんね。
もっとも敵対したら潰しますけど。
今のオラにはこの城には知り合いも同僚も家族も居ません。
見知らぬ国の人ですからね。
一応アンリエッタから援軍だど！との伝手を書いた手紙を預かっていますから、
ズドンとかされる事は無いと思います。
念のため、身体周りをバリアモドキで囲って警戒してますよ。
信頼出きるのはワルドと自分、マチルダだけです。ハイ。

「アルビオン国王、ジェームズ一世はいらっしゃいますか？」

「余がジェームズだが・・。」

「始めまして。トリスティン王国で魔法学院教師を務めてるタロウ・ヤマダと言います。
隣はトリスティン魔法衛視隊隊長、ワルド子爵です。」

別にいいよな。ワルドは事実衛視隊に居たのだし・・。

「あの巨大な船は・・。」

そしたらさ・・。

いきなり彼女達が出現です。
いやオラが説明するよりは信頼してくれるからいいのですが・・・。

（黙れ。無能な単なるモノよ。
我の父となるタロウ・ヤマダ殿に不遜な態度など千年早いわ。
控えよ。
我は水の精霊なり。）

（我は火の精霊なり。）（我は風の精霊なり。）

（我は土の精霊なり。）（我は虚無の精霊なり。）

もう王様達は真っ青ですよ。
彼女達こそがこの世界の基盤となる精霊様なのですから。
いかに王と言えどもタダの人間。
彼女達に逆らえるハズもありません。
しかし大事になって来たな・・・。

「アハハハハ・・・。
まあ精霊様の事は置いててください。
自分はこの戦いに勝利するための援軍としてこの地に来ました。
あの戦艦ですが、かつてのハルケギニアに君臨してた伝説の巨艦です。
聞いた事はあるでしょ？」

「確か滅びる前の大陸に巨大な戦艦が遊弋してたとの文献はありましたが。
アレがそうなのですか？」

「その通りです。今もレコンキスタの攻撃を跳ね返していますが、

この世界の砲撃では傷も付かないと自負してる巨艦、ムサシです。」

「おお、アレが伝説で伝えられてた巨艦ムサシですか。
素晴らしい巨体です。
でもどうしてタロウ殿がアレで来られた・・・。
申し訳ありません。精霊様。
タロウ様はあの巨艦の主なのですね・・・。」

（そうだ。単なるモノよ。我が父となるタロウに対し不遜な態度は取るなよ。
我等と敵対するのと同じ事になる。
我等を敵に回すと言う事は、お前等の最後と同じだ。）

「滅相もございません。精霊様。
私達人間に取っては精霊様のご加護あればこそ生きていられるのです。」

（分れば良い。単なるモノよ。
父上よ。ヤツ等にキチンと指導をしてほしい・・・。）

何かカオスとなりましたが、彼等も壊滅寸前の亡国の民。
後もありませんので、援軍は大歓迎だそうです。
一応、敵の魔法は精霊様がすべて無効としてますので、
鉄砲とかヤリ、刀程度しか攻撃方法は残されていません。
あまり国土を破壊するのもアレなので三式弾で敵兵を焼き払ってあぽ~んして貰いますか。
向こうの戦艦っつーても木造の船ですからね。
チャッチャッと破壊して降参して貰いましょう。
あ、その前に・・・。

「ウエールズさんと言う王子はいらっしゃいますか？」

「わ、私ですが。タロウ様・・・。」

精霊様の権威ってスゲーね。
オラに完璧にビビッていらっしゃいます。
ま、話は進めておきましょう。

「トリスティン王女のアンリエッタ殿からの伝言です。
「大嫌いだから手紙とか寄越すな。」だそうです。
どしたのですか？彼女にココまで嫌われてるなんて・・・。」

ウエールズさん、相当の打撃を受けたのか真っ白になっています。
当然でしょうね。

「ウエールズさん、女性はアンリエッタばかりではありませんよ。
いくらでも居ます。世界の人間の半分は女性なのですよ。
元気を出してください。」

「ハ・ハ・は・は・・・・。ありがとうございます。
タロウ様・・・。しばらく一人にしてて貰えませんか？」

「うーん。そうしたいのは山々なのですが、今からドンパチが始まるのですわ。
そんな悠長な事は許しません。
拠ってアンタも戦艦に乗り、弾込めとか手伝って頂きます。
ブッチャケ人手が足りないのですよ。」

ウエールズは分りましたと言い、ムサシに乗り込む事を承諾してくれた。

ジェームズは邪魔なので玉座に座っていろと言い渡し、精霊様も残って貰う事にしました。
魔法を無効にしたのなら、精霊様に手伝って頂く事もありませんしね。
城の兵士も使えそうなのをピックアップして、弾込めの手伝いに駆り出します。
さて、コレで準備万端かな？

会談（後書き）

次回はレコンキスタの嘆きです。

レコンキスタの最後（前書き）

レコンの親玉の嘆きです。

レコンキスタの最後

余の名はオリヴァー・クロムウエル。

帝政アルビオン皇国の王となるべく、旧制アルビオン王国を攻撃してる、

レコンキスタの総帥でもある。

既に大半のアルビオン攻略を済ませ、残りはハヴィランド城を攻め落とすのみ。

明日には余がアルビオン皇国の王・・・と、なるハズだった。

が・・・。

何だ??

あの巨大な船は・・・。

突然ハヴィランド城の後方から出現したと思ったら、城の前に鎮座・・。

城よりも大きいかも知れぬ

あの様な巨大な船が居座っては、城を攻撃できぬでは無いか。

我がレコンキスタの精鋭部隊がアノ巨艦に攻撃を仕掛けているのだが、

すべて跳ね返されてしまう。

どうも巨大な鉄の塊らしい。

それならと、ゴーレムを成型し攻撃しようとしたら、余を含め、すべてのメイジが

魔法を放てなくなってたのだ。

余の虚無（アンドバリの指輪の）魔法で繋ぎとめてた兵士や亡霊兵もすべて、

余の制御を離れ、亡霊兵士は躯に帰ってしまってた。
どうしてこうなったのだ??

幸いにも敵は砲撃もナニもしない。
それならあの船によじ登って船を奪ってしまえば良いでは無いか。
余は兵士に命じ、船に登って奪う様に命じた。
だが船の舷側は凄い高さで、すべてが鉄のためひっかける事も適わず。
兵士は諦めて逃げ帰って来た。
この無能めが・・・。
だが虚無が消えた今となっては無能兵士と言えども、処分も出来ぬ。
もう少しなのだ。
あの船さえ無かったら、余がこの国の新しい王となれるのだが。

クロムウエルは嘆いていたが、そもそもすべての精霊がタロウを支持した時点で、
彼等の負けは確定してる。
後はどう言う敗北を喫するか?
だけなのだ。

タロウはムサシの艦橋で敵の攻撃を眺めてた。
もちろん反撃はするが、その前にどう処理するかを考えてたのだ。
既にアンドバリモドキの魔法効果は失せてしまったらしく、洗脳されてた貴族、
兵士はコチラ側に逃げて来て投降して来た。
ジェームズの配下の兵士が臨検してる頃だろう。
さて、そろそろ反撃するか・・・。

タロウの指令で、ムサシのエンジンはフル作動を開始。
轟音と共にムサシは巨体をアルビオンの空に浮かべ、
ゆったりとした動作で主砲をすべてクロムウエル達に向けて照準。
砲撃を開始した。
狩りの時間の始まりだった。
「ウワーー、浮き上がってコッチに近づいて来たぞ。逃げろぉぉ。」
「兵士よ、ナニをしてるのだ。逃げるな。
戦え。戦艦よ、体当たりしてでもあの巨艦を葬れ。」
クロムウエルは叱咤してるが、戦艦の乗員はすべてクロムウエルの
魔法から解放され、
白旗を上げてアルビオン側に投降してたのだ。
残されたのは純粋なレコンキスタ兵士のみ・・。
彼等は巨大な砲身がコチラを向いているのを目撃した。
そして火を噴くのを。
彼等の意識は次の瞬間、すべて消し飛んでしまったのだ。
「タロウ様、凄まじい破壊力ですね。
コレがこの艦の力ですか？」
「ン、コレでも手抜きなんだが。
本気出したらハルケギニア大陸自体が消えてしまう。
前世ではトリスティンに貸与したけど、もう危なくて貸与出来ません。」

ワルドはコレで手抜きと聞き、危うく腰を再度抜かす所だったのだ。
自分はとてつもない力を持つ人の配下なのだと、初めて気づいた。

レコンキスタの勢力が布陣してた地域はすべてムサシの砲撃で廃墟となってた。
攻撃を目撃してた元レコンキスタの兵士は、投降出来て良かったと感涙してたのだ。
砲撃に使った弾丸はすべて三式弾。
それも火石で出来た強烈な弾丸だったから、被害を受けた彼等は遺体も残さず。
灰燼となってしまったのだ。

「ヨシ、最後に鉄鋼弾を十数発砲撃。砲撃後は敵の生き残りが居るか臨検する。
最後まで手抜きするなよ。」

タロウは偏在を通じてすべての兵士等に命令を下す。
鉄鋼弾を打ち込まれた地域は巨大なクレーターとなってしまった。

生物の息吹も感じられない死の地区となった元レコンキスタ布陣跡地は、
後の時代にデスランドと呼ばれる地域となるのだ。

ウエールズを含めアルビオン側は絶対劣勢の状態から勝利出来た現状が
信じられず呆けていた。
だが、事実レコンキスタの兵力は壊滅し、裏切ってた兵士も魔法で操られてただけと分ると、
段々勝利の実感が沸いて来たのだ。

遥か上空でそれを目撃してたヤンデレ姉さんのシェフィールドは危うく失禁するトコだった。

「何てこったい。
あんな巨大な軍艦に襲われたら私のヨルムンガンドでも破壊されてしまうじゃない。
こりゃ一度ジョセフ様に相談しておかないとね。
クロムウエルはもうダメだろう・・。」

シェフィールドは踵を返すと、ガリアに向けて逃げて行った。

タロウはシエフィールドらしき人が乗ったドラゴンが消え去るのを気づいてたが、
下手に消すと前世同様の事態もありえると無視する事にしたのだ。
もう戦いは終わったのだから。

「タロウ様、敵の兵士はすべて壊滅。
クロムウエルと思しき僧侶の亡骸の欠片がありました。」

「・・・そうか・・。では埋葬はすべてお前等に任せるが・・。」

「モチロンです。私達がすべき仕事ですから。」

「じゃ勝利の雄叫びと行きましょうか♪」

「「「「「エイエイオーーーーー♪」」」」」

ムサシの広い甲板に勝利の雄叫びが上がったのだ。
ジェームズはムサシのあまりにも凄い破壊力にクロムウエルが不憫に思い始めてた。

アレでは塵でも残ってたら奇跡だ・・・と。

その夜、ハヴィランド城は深夜まで勝利のパーティが続けられたとか・・・。

レコンキスタの最後（後書き）

レコンキスタ壊滅の編でした。
あまりにも簡単なので逆に困りました。
ムサシはもうトリスティンには貸与しません。
危険過ぎです。
波動砲は封印です。

白の国アルビオン（前書き）

ドンチャン騒ぎの翌日です。

白の国アルビオン

タロウです。

ただ今戦勝会の真っ只中。
既にワインはビンで数本は飲みました。
グルグルが目を回してまーーす♪

（間違ってでも波動砲を双月に向けて発射なんて・・・しませーーん♪）

「タロウ様、本当に今回の助成は助かりました。
おかげでアルビオン王国は救われました。」

「放置してたら次はトリスティンでしたからね。
オラも店作る予定なのに、戦争が飛び火するのはマッピラですよ。」

「そうですね。ヤツラはアルビオンを征服したら、次はトリスティンだったのは、
押収した敵の書類からも明らかです。」

「どうして坊主で満足してなかったのかね。
あ、ついでに言っておきますが、クロムウエルは虚無ではありません。」

「ハ？？」

（ヤツは我の持つアンドバリの指輪を奪い、死人を操り、他人の意思を操ってただけだ。
単なるモノの言い方を借りれば、詐欺師と言うモノよ。）

「そうだったのですか・・。どうりで彼等の証言が曖昧だったハズです。」

投降した兵士や貴族の取調べをした所、何故レコンキスタの配下になってたか、
本人も理解できていないと言う証言が圧倒的だったのだ。
当然だわね。

「タロウ様はコレからどうされるのでしょう。
この国の土地が入用ならいくらでも割譲致します。
もし王が望みなら、私が退任しタロウ様に・・。」

「要りません。国なんて邪魔です。
オラはトリスティンで店を持つのが望みなだけです。」

「どの様なお店でしょうか？」

「それは・・・ヒ・ミ・ツ・です♪」

「そ、そうですか・・。では開業される日にはお声をかけて下さい。
国をあげて歓迎の式典を致します。タロウ様は我が国の英雄ですから。」

いや、英雄とか別にどうでも良いのですがね。
でも何か対策しておかないと、またロマリアのンコが絡んでウザイのよ。

前世ではケンカしてしまいましたしね。
♪♪そうだ♪♪
「でしたら今回の首謀者、クロムウエルはロマリアの傀儡でアルビオンを攻撃してたと、
デマを流してください。
どうせヤツは消えた人間。
いくらでも罪を被せてもＯＫだと思いますよ。」
「それは構いませんが、ロマリアが怒るのでは？」
「ヤツ等の増長が坊主マンセーに繋がってるのですよ。
オラが作る店にもヤツラは絶対に絡んで来ます。
ですので、坊主の力は絶滅させるべきです。
ブリミルは精霊様も嫌っていますしね。」

（そうだぞ。
単なる無能モノよ。
我等精霊はブリミルには迷惑を蒙っておる。
ヤツ等を潰す加勢に加わるなら汝等の長年の懸念もすぐに解決してやろう。）
「単なる無能モノですか・・・。ハア・・・。
精霊様、長年の懸念とは・・・。」
（浮遊大陸を地に戻してやるのだ。）
「誠ですか。精霊様。
私達アルビオンの民はこの地が大地に戻る日を夢見ていました。

それが適うなら、どの様なお手伝いでも致します。」

（分った。この大陸はトリスティン沖合いに着水させる。
良いな。）

「ハハーっ。宜しくお願いします。」

アハハハハ。

アルビオンが降りるってよ。

まあ空をフワフワと浮いてるよりは海にデンと落ち着いてる方がヨロシイですよね。
精霊様はウソは絶対に言いませんので、現実となるのでしょう。
でもこの地下に眠る大量の風石は・・・。

そこに脳内に響く精霊様の声。

（父上よ、風石はすべて前世の如く父上の土地に付いて参ります。
暴走は抑えてありますので、大陸が浮き上がる心配も無用かと・・・。
）

あはははは・・ハ・・。
精霊様、またですか・・。
まあヨロシイですけど。

どうもオラが住み着く土地にすべて移動させるつもりらしいです。
大陸浮遊の元凶となる風石を。

アルビオンを永劫に浮かばせるだけの風石ってどんだけの量が埋蔵

されてるのでしょ。
それをすべてとは・・。
何か使い道無いかね。

ま、そんな事は後よ。
早くテファを迎えに行って孤児院に孤児を連れて行こう。
もうこの土地には用はありまへん。

オラ達は翌日、アルビオン王家総出で見送られ、城を去る事になりました。
行こう♪
双山(ヴァストレヴォリューション)を迎えに♪

マチルダさん、目が怖いんですが・・。

白の国アルビオン（後書き）

アルビオンが着水する事になりました。
もっとも今すぐではありません。
予定ではタロウがどこかの土地を貫った頃です。
次回はテファとの遭遇です。

双山との遭遇（前書き）

ティファニアとの遭遇です。

双山との遭遇

タロウです。
ムサシに乗り二千年ぶりにテファと会う事になりました。
いや、こんだけ大きい船での旅ってホンマに素敵ですね♪

艦首の波動砲だけは不気味ですが。
どこかから使え、使えって誘惑の声が聞こえるので、
菊花紋章のフタを取りたくなります。

ですが、我慢ですぞ。
人として終わるかも知れません。
コレをブッ放したら。

さてウエストウッドまではアッと言う間に到着しました。
ですが、コレを降ろす訳には行きません。
フライで降りるっきゃ無いですな。シクシク・・。
幸いにもワルドも風のメイジ。
マチルダさんも土とは言えトライアングルのメイジです。
フライ程度は楽にこなしてくれます。
子供達やテファは手分けして乗せる事にしましょ。
ムサシの機動は偏在ズにお任せして、オレ達はフライでテファの居る森の中の
小さな家に着陸です♪

「テファ、テファ、居る？
マチルダだよ。テファ・・。」

マチルダが家の中に声をかけると、「ハーイ」と可愛らしい声が聞こえる。
二千年ぶりの元妻、テファとの再会であります。

「あ、お姉さん。本当に久しぶり。
それに・・後ろの・・・・あ・・・貴方様は・・・・。」

テファはそう言うと黙りこくってしばしフリーズしてしまった。
そして・・。

「お、お兄様ぁぁぁぁ。また会えたのですね。」

そう言うとオラに抱き付いて来たのです。
ウワ・・む、胸がぁぁぁぁ。
いくらＤＴは卒業したっつーても、この破壊力には鼻の奥がツーンとして来ます。
ヤバ・・・。ティッシュティッシュ・・。

オラが鼻血を出し始めてフラついたのを
マチルダとワルドが気づいてテファから引き剥がしてくれました。
ヤバかったです。
知ってはいても、彼女の二つの胸の破壊力は凄まじいモノがあります。
フガフガ・・・。
鼻血も止まったので、家に入れて貰い、マチルダからオラ達の事を紹介して貰います。
そして・・。

「お兄様は前世と変わりませんね♪」

やはり彼女も思い出したみたいです。

「テファ、キミも思い出したのか？」

「ハイ。二千年も放置なんてあんまりです。
でも再会出来たから許してあげます♪」

「この世界でも孤児院を作ったから、引越しするからね。
アノ船で・・・。」

「アレって・・・。まさかムサシ？」

「ぴんぽ~ん♪」

記憶が戻ってると説明も楽ですね。
大半の人は、アレを見たらパニックになりますから。
しばらくすると、孤児のガキンチョ共が森の広場から帰って来て、
空の上のムサシを見て大騒ぎしてた。

「スゲーー。あんなデカイ船がウチの上に止まってる。」

等々・・・。

「皆~~！！あの船でトリスティンに引越しですよ。」

「ホントー？
ヤッター、スゲー。最高♪」

「あんな大きい船に乗っても怒られないの？」

「デッカイ大砲が付いてるね。」

などと子供達は大騒ぎである。
テファからオラの説明があり、今からトリスティンの新しい家に引っ越す。
新しい家では学校と仕事もあるけど、自由に遊ぶ事が出きる。
などと説明してあげた。
この世界の子供は現世の子供よりは大人なので、仕事をするのは当然と考えてる。
子供＝すべてが自由と考えていないのだ。
ましてや戦乱の中で親も無くした子供達。
自力で生きる術を考えないで済むだけでも幸せと考えてるらしい。
現世の子供はホンマに恵まれてますね。
少し苛められただけで自殺するなんてこの世界の子供から見たら信じられませんよ。
もし苛められたら、親と学校に訴えて、それでも解決出来ないなら引き篭もったり、
転校すれば良いのです。
脱線しましたが、引越しについては依存が無いそうです。
荷物は・・。
面倒ですので家ごと船に転移させてしまいましょう♪
どうせ巨大な船です。
この家程度なら、蚊を乗せた程度しか負担になりません。
その前に・・。

「テファ、少しいいかな？」

「何でしょう。お兄様・・。」

前世同様に彼女のエルフ耳の整形について説明します。

「キミの耳だけど、前世同様に普通の耳にしたいのだけど。」
「モチロンお願いしますわ。この耳では外も歩けませんから。」
「んじゃオラが整形するから、しばらく目を閉じてて・・・。」
「分りました。お願いします。」
目を閉じてくれたので、オラは彼女の耳を一番形の良い女性の耳をイメージして、
整形クリエイト始めた・・・・。
そして数分した頃・・・。
「テファ、終わったよ。」
オラは簡易に作った手鏡を彼女に渡し、自分の耳を確認させたのです。
「わ、綺麗な耳♪お兄様、ありがとうございます♪」
そう言うと彼女はハグして来たのです。
わ・・胸が、胸がぁぁぁぁぁ。
今回は周囲に誰も居なかったので、引き剥がしてくれる人も無く。
オラの頭はショート、意識はブラックアウトして気絶してしまいました。
フンガーー。

やはりテファの胸の破壊力はハンパではありまへん。
絵だけでも相当の威力ありますが、リアルで耐えられる勇者は皆無でしょ。

その夜はムサシを空に放置して、森の家にお泊りとなりました。

双山との遭遇（後書き）

テファの胸は凶器ですねぇぇ。

お引越し（前書き）

今日はお引越しの日です。

お引越し

タロウです。

気絶したオラはワルドやマチルダ達に拠り、
家に担ぎこまれ、その夜はお泊りとなりました。
孤児のベッドを占領して申し訳ないっス。
翌日、お詫びにクリエイト魔法でダニィ図の朝食セットをクリエイトし、
全員に振る舞いました。
皆様大喜びですね。
さて、いよいよ引越しです。

空の上の純白の戦艦ムサシ。（比島海戦時に白く塗られたママです。）

アレに家ごと引越しします。
無駄に広い甲板に転移してしまいましょう。
彼等の荷物もすべて一緒に転移し、トリスティンの孤児院の施設にしてしまいます。
家ごと引越し出きると聞いた彼等は大喜びです。
新しい宿舎にも魅力はありますが、住み慣れた家もあるのが一番ですからね。
ウンウン。
さて、チャッチャッと片付けてしまいましょう。
空の上の偏在も待ちくたびれてると思います。

「全員、この場に居るね？いないと放置されるぞ。
ひーふーみーよー・・・・。ン、ガキンチョは全員揃ってまんな。

んじゃ、ムサシに転移開始。」

そう宣言すると、家はふわーーっと浮かび上がりムサシに向けて浮上。

やがてムサシの後部甲板に到着。

こう言う時は広い戦艦に感謝ですな♪

「スゲーー、広い、広すぎ♪」

「オイ、ガキンチョ。ココは空の上だからな。

落ちたら死ぬど。」

「分ってるよーだ。でもココなら大丈夫だろ？タロウ様。」

「ウンウン・・。マチルダ、彼等の面倒は任せるよ。」

「お任せください。タロウ様。」

「ワルド、んじゃムサシを出発させよーか？」

「御意です。タロウ様。」

危ないとは言いましたが、ヂツは風の精霊が周辺をバリアみたいに囲み、

万一の落下にも対応出来ています。

そして火の精霊が適度な気温に周辺を暖めてますので、高い空でも寒くなりません。

この戦艦の運航には既に精霊様が欠かせなくなってるのです。

水の精霊様はすべての人の健康状態をベストにしてますしね。

後に孤児や関係者は寿命が尽きる日まで病気もケガも無く健康に過

ごせたのは、
すべてアクアさんのおかげです。

さて・・、あまりの巨大な船に呆然としてるテファの手を引っ張り、
オラ達はムサシの艦橋に登る事にしますた。

「テファ、ココがムサシの指令塔だぞ。スゲー高いトコだろ。」

「タロウ様、凄いですね。前世では見かけただけで乗った事はありませんので。」

「ん・・。悪かったね。前世は乗せてあげられなくて。
でも今回はマチルダを含め、テファが一番だヨ♪」

「ありがとうございます。お兄様。
そう言えばシエスタお姉さまは？」

「彼女ならトリスティンの家で留守番だよ。今回は戦闘があったので、
さすがに連れて来る事は出来なかったの・・。」

「そうですか・・。そう言えばアルビオンの戦争って・・。」

「このムサシで片付けてしもた・・。
あまりにも簡単に終わりすぎて、敵に申し訳なく思いますた・・。」

「お兄様が戦われたのですか？」

「ン・・。て言うか、ムサシだけで終わってもーたのよ。」

「凄いです。お兄様はやはり英雄なのです。」

「ま、英雄にすんのはムサシにしてね。
オラは前世同様のヲタショップが大切だから。」

「あ、またあの可愛らしいお店を作るのですね。
私も頑張ります。」

「頼みますね。ぶっちゃけ人手はいくらでも要りますので。
働いて孤児院と生活向上に向けて頑張ってチョ。
ついでにテファも魔法学院に入って貰うヨン♪」

「あ・・。お友達をまた作れるのですね。
嬉しいです。お兄様。」

「ん、頑張って友達百人作ってね。」

テファとバカを言いながらムサシはトリスティンに向けて進む。
やがて昼過ぎにはトリスティンの首都、トリスタニアに到着ぅぅ。

ヤベ、←では大騒ぎになってしもた・・。
城からはマザリーニやアンリエッタも飛び出して来てる。
しゃーね。
説明してオコ・・・。

オラはワルドを引きつれ、子供達やマチルダは残しフライで城に降

りる。

「タロウ様、凱旋おめでとうございます。
無事、偉業を成し遂げられたのですね。」

「タロウ様、おめでとうございます。
そしてありがとうございました。
おかげで我が国は安泰となります。
それにしてもムサシ・・ですよね？
あの船は・・。」

「アンリエッタ王女様、マザリーニ枢機卿様。
すいませんが機密もありますので、
城の会議室に移動出来ませんか。
さすがにココで報告は・・。」

「おお、あまりの驚きに飛び出してしまいました。
お許しを。衛兵。
勇者タロウ・ヤマダ様と御付の護衛、ワルド子爵を丁重に城に案内せよ。」

枢機卿の命令に城の衛兵は直ちにオラ達を城に案内してくれたのです。
ワルドさんのかつての部下らしいですが、彼等はオッカナビッククラで我々二人を城に案内してくれます。
しかし相変わらず臭い街ですね。
トリスタニアは・・。
後で掃除関係の話とかして見ますか・・。

「アンリエッタ王女様、マザリーニ枢機卿様、ただ今帰還しました。

アルビオンを侵略してたレコンキスタは総帥のクロムウエルを含め、全員殲滅して参りました。
あのムサシですが、ラグドリアン湖に眠ってただけらしかったのです。
そしてせっかくだから使おうと言う事で、戦場に用いましたが・・・。
戦艦の砲撃のみで全て終わってしまいました。
敵に申し訳ないと思う程、安易でした。」

「そ、そうでしたか・・・。
それにしても前世では、
浮かんでるだけでも脅威だったムサシの戦闘力がそこまでとは・・・。
」

「アレは持ち出した時点で勝利を決してしまいます。
ぶっちゃけ、この世界の戦争に用いるのは反則ですよ。
前世ではトリスティン海空軍に貸与しましたが、今生では危険で貸せません。
オラが管理しますので、国の方の説得はヨロシコ♪」

「そうでしたか。では国の重鎮は私共が抑えておきます。
タロウ様がムサシは管理なさると言う事ですね。」

「ハイ。普段は孤児院近くに池を作り、そこに浮かべて管理します。
万一の際は持ち出しますが、大抵の事は自分達の戦力で何とかしてください。
小競り合い程度では関与致しません。」

「ごもっともです。
タロウ様には万一の事態にならない限り戦争に関わらせません。
今回の勝利だけでも我が国古来からの英雄、万人にも値する出来事

です。
さて、勝利に対する褒章ですが・・・。」

「あの辺り一帯の土地の権利だけで結構です。」

「その程度では私達は他国からバカにされてしまいます。
アルビオンの英雄に報いる事も出来ないのか？と・・・。」

そこまで言われると、反論も出来なくなる。
アルビオンは戦争直後だっただけに言い訳も出きるが、トリスティンではそうも行かぬ。
くけけけけ・・・。
困りました・・・。

・・・。そうだ♪

「んじゃ前世でのオラの領地だった、ド・オルニエールって土地はありますか？」

「ありますぞ。タロウ様。ですが領主亡き後は寂れた田舎ですが。」

「構いません。どうせ精霊様と同居したら化けますから。
では、ド・オルニエール領主にして下さい。
しばらくは学院近くの土地だけで構いませんから、地盤が固まった頃、
任命して頂くと助かります。」

「分りました。
では、後日ド・オルニエールをタロウ様に授けると共に爵位を国から出します。

これでも足りない位なのですが・・。」

「要りません。あまり重要な地位は重荷にしかなりません。
それにお金は自力で稼ぐ予定です。
当座は学院近くの土地だけで結構です。」

「分りました。ではその様に・・。」

「タロウ様、本当に色々とありがとうございました。
私では何の力も与えられませんが、せめてコレだけは受け取ってください♪」

そう言うと、アンリエッタはオラにハグしてブチューとかましてくれたのです。
あまりの早業に反らす事も出来ず、ぶちゅーとされてしまいました。
ヲイ、何故お礼のキス程度で舌まで入れるの？

「はぁはぁ・・。結構なお手前で・・。
もし足りない時は何時でも私の寝室に来てください。
私は何時でもパッチコイです♪」

「ほほほほ、姫様もお戯れが・・。」

ほげぇぇぇ・・・。
やられてしまいました。
呆けた頭でオラは城を辞すると、フラフラとワルドを連れて街をブラ着いてました。
脳みそバーン状態のアホタロウでっす♪

お引越し（後書き）

次回は相棒との出会いです。
やはりタロウもデルフが必要ですからね。

魔剣との再会（前書き）

ようやくデルフを出せます。

魔剣との再会

タロウです。

呆けた頭でトリスタニアをフラフラと歩いています。

護衛のワルドが居るので心配はいらんでしょうが。

どうにも今はフラフラと歩いてたいお年頃らしいっス。

でも臭い。

本当に臭い。

ンコと内臓が腐ったみたいに匂います。

ンナ匂いの中で良くも生活出来ますね・・・。

ア゛・・・・・・・・・・・・。

エンガチョ・・・。

ンコを踏んでしまいました。

犬ではありません。

人のンコです。

街中にンコが普通に落ちてるなんて、〇〇〇でもありませんぜ。

段々呆けてた頭が怒りに染まって来ました。

「アクア、居るか？」

（父上、お呼びですか？）

「済まないが、この町をお前の力で浄化して欲しい。
あまりにも臭い。そしてンコだらけだ。
歩くのも我慢出来ない。」

（お任せを・・。父上。）

アクアはそう言うと、街中に分身をばら撒き、街のすべてを掃除してしまった。
そして郊外に汚物を固めるとフレイムが炎で焼き払ってしまったのだ。
数分ですべてが終わるなんて人間では不可能。
さすが精霊。

（（終わりました。父上。））

「ウム。二人とも悪かったね。そしてありがとう。
おかげで匂いも消えた。」

褒めて頭をナデナデしたげると、二人とも大喜びでムサシに帰って行く。

当然、街は大騒ぎ・・。

「な、何だったの？汚かった街が一瞬で綺麗になったわ。」

「スゲー。何もかもが綺麗になってる。
ウチのカカアのツラは変わらないけど。」

などなど・・。

だが、せっかく彼女達が綺麗にしてくれたのだ。
これを維持させておかないとな。
ワルドに命じ、城から衛兵と枢機卿を呼ぶ事にした。

「タロウ様、何か急用でしたか・・。」

「先程精霊に命じ、街の汚物をすべて綺麗にしました。
恐らく、現在はゴミの一欠けらも残っていないと思います。
ですが、放置してたら再び汚物の街となるでしょう。
そこで・・・。」

要約すると、放置してたらまたンコだらけの臭い街に戻ってまうから、
枢機卿の命令で街にンコ撒き散らしたら牢屋逝きとしろ。
そして各所に公衆トイレを設置して、町の浄化を勤めて欲しい。
せっかく精霊様が綺麗にしてくれたのですからね・・と。
枢機卿は畏まった様で、自分達の仕事をさせてしまって申し訳無い。
後は必ずコチラで徹底しますので・・と。

オラは後を枢機卿に頼み、再び街をブラつく。

もうンコ無いよね？？

そう言えばデルフリンガー。
オラの相棒のデルフにまだ会っていない。
この世界にもデルフは居る・・ハズ・・・。
ヨッシャ、武器屋を探すべ。

ブルドンネン街はここ等だったべな??
フラフラとワルドを引きつれオラはデルフを求めて彷徨った。

武器屋はすぐに見つかった。が・・・。
デルフは何処??
「旦那様、武器をお求めですか?」

「うん、魔法だけでは精神力が切れた時に戦えなくなる時あるからね。
大きい剣を探してるだよ。」

「そうしたらこの剣はいかがでしょ?ゲルマニアの錬金魔術師シュペー仰です。」

「イラネって。
そんなガラクタ剣なんざ。
とりあえず勝手に見させて貰うよ。」

ズカズカと店の中に入り、オラはデルフを求め彷徨った。
デルフはどこだ~~~!!!

「ヲイ、テメー。」

この斬新な悪口ベランメー調の口調は・・・。

デルフか？

「聞こえねーのか。この耳なし。」

「テメーなんてヤツは知らネーぞ。」

「テメーで悪かったら元ブタ野郎だ。」

「オラは引き篭もりの自宅警備員だったどぉぉ。」

「違ぇねー。テメーは相棒だろ？そのボケた口調は相棒しかネー。」

「デルフ。相変わらず錆びてんな。」

「二千年も放置しやがって。おかげでボケが進行しちまったぞ。どうしてくれる。」

デルフが居た。やはりヤツは居てくれるだけで楽しい。

「オヤジ、このボケ剣はいくらだ？」

「それでしたら百エキューも頂ければ結構です。」

「ふーん、んじゃコレでね♪」

金貨百枚を懐から取り出すと、デルフを受け取り鞘もサービスして貰った。

煩い時は鞘に収めれば黙ると言われたが、この煩さがデルフなのだ。

オラはデルフを担ぎ、街をブラつく事にした。

「デルフ、土に帰らなかったんだな。」

「相棒が逝った時に土に帰るつもりだったんだが、何故か今まで、錆びたまんまで生き残ってしまったぜ。
まさかまた相棒と会えるとはね。」

「お前がブリミルに作られたのは知ってたけど、それもブリミルの差し金だろ？」

「・・・・・・。」

相変わらず自分の出自に関わる事にはフリーズしてしまうデルフだが・・・。
ま、そこらは後々改造しておけばいい。
デルフを縛るブリミルの呪縛も今生で絶対に解除して見せる。
こんないいヤツをブリミルのオモチャにはしたく無い。
オレ達はデルフを背に持ち、
クックベリーパイを購入し、ムサシへと帰って行った。
マチルダ達、怒って無いかな・・・。
クックベリーパイで機嫌直してくれたら良いけど・・・。

魔剣との再会（後書き）

相棒の魔剣、デルフとの再会です。
ンコの街の掃除は少し早かったですが、済ませてしまいました。
主人公がンコ踏むのがスイッチになりましたし。

孤児院開設（前書き）

いよいよ孤児院が開設されます。

孤児院開設

タロウです。
デルフを背負い、マチルダ達にクックベリーパイの土産を渡し、機嫌を直して貰いました。
何時の時代でも世界でも女性の機嫌くらいコントロールの難しいモノはありません。
さて、ムサシはトリスタニアを出立し、魔法学院近くに到着しました。
当然、学院も大騒ぎです。
「な、何だ？アレは・・・。」
「鳥か？」
「船か？　」
「アレは・・・。ムサシだ。
伝説の巨艦ムサシだ。」
そう言って授業中の教室を飛び出して来たのはギーシュです。
彼も前世を思い出したみたいですね。
生涯をムサシと共に過ごした彼です。
懐かしさもひとしおでしょ。
少しスケベジジイを脅したろか？と考え、主砲を学院長室に向けましたら、
オスマンが窓際に出て来て白旗を上げてます。
ブッ放す気は無かったのですがね。

ま、楽しかったのでヨシです。
ムサシを孤児院横に下ろし、引越し家を孤児院に隣接して下ろします。
テファや孤児は新しい自宅に大喜びです。
でも今からが大変なんですけど。
彼等も立派な労働力となりますから、キチンと働いて貰う予定です。

「お兄様、ココが私達の新しい家ですか？
前世よりも凄く立派ですね。」

「前世よりもチートになってしもたから、使えるモノは使っただけです。
テファは個室だからね。机も作ったから頑張って勉強してチョ。」

「ありがとうございます。お兄様♪」

ハグは遠慮させて貰いましたが、テファも大喜びです。
さて、引越し問題も終わった事ですし、次は・・・・。
ムサシですな。

早速ムサシを浮かべられる広さの巨大な池を掘ります。
大体十キロ四方の広さと三十メートルの深さは掘り下げました。
ココは軍用地認定とし、無断で立ち入ると処刑対象とします。
ムサシはこの世界のリーサルウエポン。
誰でも無断で近づける訳には参りません。
国にも通達を出しておきます。
水の精霊様もラグドリアン湖は出張所みたいな扱いでコチラが本店となりました。
中々居心地が良いそうです。

しかしムサシか・・。
前世では威嚇のために飛ばすだけでしたが、今生では使ってしまいました。
それに波動砲。
アレは宇宙でも行かないと使えない代物です。
場違いな工芸品とか核爆弾よりも物騒です。
まあ発射設備を厳重に封印し自分でも相当の手続きを行わないと、発射できない様にしておくべきです。

さて、ムサシはコレでヨシとして・・。

いよいよヲタショップですよ。
当座は教師を続けながら併行して働き、軌道に乗ったら教師を辞職。
仕事に早く専念出きるとエエですね。
店の名前は前世と同じではオモロクありませんので・・。

「一ドニエ屋」とします。
子供でも買える設定の一ドニエの駄菓子を置き、クジで商品が当たる形式。
そして裏には大人の店として、「秘密の玉手箱」と言う名前にします。
コチラはＲ１８の子供には見せられない商品です。
「一ドニエ屋」の店長はマチルダとテファ。
「秘密の玉手箱」はワルドを店長にしました。
ワルドなら大抵の荒くれにも対応出来ますからね。
オラは教師を続けながら商品の創作と補充です。
とてもではありませんが、売り子しながら補充はムリです。
ハイ。
「一ドニエ屋」はお分かりかと思いますが、日本の駄菓子屋と似た

システムです。
子供のための店として存在しますが、高額なオモチャやフュギィアも販売してます。
まあクジでも当たるオモチャもありますけど、さすがに滅多には当たりません。
もちろん子供が遊べる人形やオモチャばかりですよ。
コッチで売る商品は。

店舗を作り、学院内でバイトを募集した所・・。
やはりビンボ学生のギーシュとオッパイプルルンが自慢となったモンモンが
応募して来ました。
彼等は前世でも手伝って貰いましたから、大丈夫かと・・。
飲み屋はまだ先ですぜ。
商品の補充と創作を続ける事、約二週間。
当分は大丈夫だろうと言う位品物を作り・・。
ようやく「一ドニエ屋」と「秘密の玉手箱」を開店出来ました。
ワルドは前世以上に気合が入っています。
それこそ自分の娘や孫以上に大切に扱うつもりでいる様です。
マチルダやテファは前世とは違い、ビンボなお子様や学生でも気軽に入れる店構えが、
とてもお気に入りみたいです。
孤児の子供達も毎日の小遣いを一ドニエを与えられ、それで自分のお菓子を購入。
大切に食べる様は遠く離れたトリスタニアにも届く程の評判となります。
孤児院の窓拭きやお掃除。シエスタの手伝いが彼等の労働です。

シエスタは我が家の管理に専念して貰っております。
特に孤児の食事も作る仕事がありますからね。

彼女は田舎育ちなので、大人数の食事を作る腕もハンパではありません。

ウチの店は基本的に宣伝は一切していません。
口コミのみです。
ですが、どうして・・・。

「こんなに客が居るのだぁぁぁぁぁ。」

「一ドニエ屋」は子供向けの値段設定が受けたのか、
トリスティン中の子供の憧れの店となったそうです。
大半の品物が一ドニエですからね。
まあコチラは補充は順調です。
細かい作りを避けて作った品物ばかりですし。

ですが、Ｒ１８のアダルトショップ。
「秘密の玉手箱」の商品はそうは行きません。
高額なだけに手抜きは一切ナシ。
「ヤヴァイ」部分もキッチリと明瞭に・・・。
ゲフンゲフン。
モチロン下着もキッチリと着せてあります。
店頭の彼女達は日本で売られてるフュギィアよりも素晴らしい出来と自慢出来ます。

ですので、とてもではありませんが、他人には製作を任せられません。
顧客も専用カードを作り転売したら壊れる設定にしておきます。
飽きたら店で買い取る様にしてますが、売却に来る客は一人もいません。
オスマンも秘書を諦めたらしく、最近はコチラに入り浸りです。

ヲイ、仕事はどうした？？

「タロウ様、私は娘達を売り払うみたいで、毎日心が痛む日ばかりです。

嗚呼、彼女達が幸せである様にと願い、丁寧、かつ厳重に梱包を続ける日々・・。

でもこの仕事に就けた自分が幸せでもあります。

タロウ様、本当にありがとうございます。」

ワルドはこの仕事こそが自分の真の仕事だと、胸を張って働いています。

マチルダは駄菓子屋のおばちゃんみたいに「ハイ、代金一万エキュー」と言い、

子供達から代金を受け取り販売してます。

夕方からはテファが店の店長。

学院の生徒が少ない小遣いでお菓子を買いに来るのです。

姫様も変装して大人買いをされるので、たまに品切れになる日もあります。

姫様来訪の際は緊急呼び出しを受け、テファに店番を任せ、マチルダ、オラ、

ギーシュ、モンモンの四人で商品製作に没頭する日も良くあります。

嗚呼、幸せな毎日です。

そろそろ教師も辞める時期かな・・・。

孤児院開設（後書き）

ようやく開業出来ました。

乙女ロード（前書き）

遂に・・・

乙女ロード

タロウです。

ようやくお店が起動に乗りましたので、教師は非常勤に変えて貰いました。
本当は退職を願ったのですが、自分以上のメイジは居ないので、非常勤で良いから続けて欲しいそうです。

たまに呼び出しがある程度なら構わないので、ヨシとします。
さて、時間を全面的に店に傾けられる様になりましたので、本格的に稼動開始です。
まずは前世同様に飲み屋開業です。
コチラも基本的に前世みたいに学院の生徒をバイトに使います。
大半がビンボ学生なので、選ぶのが大変でした。
女子生徒はコスして貰い、店内をうろつくだけです。
接客は男子生徒に任せます。
彼女達は居るだけで仕事となるので、大喜びです。
店長はマチルダさんです。
一ドニエ屋はテファが専属となります。
彼女が学院に行ってる時間は子供達が店番しています。
客も大半は子供ですので、大丈夫かと・・・。

あ、新しい飲み屋のお店の名前は「フェアリー」です。
その名の通り、妖精みたいなコスした女の子が居る店として評判になりました。
彼女達は店を妖精のコスしてフラフラと歩くのが仕事。
接客はゼロなので、安心して働けます。
店長はマチルダですので、荒くれが来ても大抵は大丈夫。

万一の時は精霊様も加勢してくれますからね。
ある意味最強のケツモチが居る店です。

さて、執筆活動を再開しています。
いえ、タバサやアンリエッタが煩いのですよ。
早く私達の彼の物語を書け！！と・・・。

「珍世紀ウェンヴァリホン」のシリーズに加え、「精霊様が見てる」を執筆。
試しにテファに読ませた所、鼻血を吹いて大騒ぎ。
抑えて書いたのですが・・。
そして彼女達の要望で、この手専門の書籍店。

「乙女ロード」を開設。
店長はタバサになって貰います。
いえ、頼んだのではなく、雇えと脅して来られたのです。
タバサさんに・・・・。
当座は上記の二本を主力とし、序所に勢力を拡大する予定です。
男向けは当分先ですな。
そしてこの「乙女ロード」の設置に拠り、学院女子生徒の大半が顧客となるのです。
金持ちの子は別として、ビンボな子は「フェアリー」で働き、金を稼いで
「乙女ロード」で欲しいグッズや買い物をする。
もちろんＲ１５以下に抑えてますよ。
基本的に「乙女ロード」は日曜のみの営業としてますので、彼女達の負担も軽いのです。

「アンタ・・。早く次のシリーズを執筆しなさいよ・・。」

マチルダさん、目が怖いのですが・・・。

「お兄様、カホル様の首を早く繋いでください。」

テファさん、そんなに簡単に繋げる訳・・・。

ゴメンサナイ、ユルシテクダサイ・・・・。

「・・・・・・・・・・・・。」

タバサさん、店番しながら鼻血出して悶絶しないでください。

「タロウ様、新シリーズの予約に参りましたわ。

出来上がり次第直にお買い物に来ますわ。」

アンリエッタさん、アンタ公務は？

ハァ・・・。枢機卿に押し付けて来たのですね。

可愛そうに・・。

ワルドは「乙女ロード」を羨ましそうに見てるが。

あの店にはオラでも近づけないのよ。

もう完全にオラの手を離れた腐女子の店となりますた。

オラは執筆して補充するだけの存在でつ・・・。

シクシク・・・・。

ハルケギニアには腐女子が誕生しますた。

乙女ロード（後書き）

いよいよタロウの本性が発揮され始めました。

精霊様が見てる（閑話）（前書き）

元ネタはアレですので、別話として話を出します。
この内容はすべてウソと捏造です。
間違ってもホンモノと比較しないでください。

精霊様が見てる（閑話）

創立精霊３４年の、長い歴史と伝統、
優雅な校風を誇る名門男子私学ルルアン学院。
ハルケギニアの豊かな緑に囲まれた広大な敷地に、学院はある。

伝統ある一貫教育が男子としてのたしなみ、豊かな知性と教養を育む。
通学路には緑木の並木道。
校門から学園内に入ると薔薇街道があり
その先の二股の分かれ道にこの学院のシンボルの精霊像がある。

私学ルルアン男子学院の生徒

私学ルルアン男子学院は、もとは貴族の令息の為につくられたという伝統ある精霊系お坊ちゃま学校。純粋培養の男子たちが集う。
この男子学院では同級生同士は名前に「さん」をつけて呼び、
上級生を呼ぶ時は「さま」をつける。

挨拶の言葉は「ごきげんよう」。

スーツの裾は乱さないように、漆黒のブレザーは翻らせないように、
ゆったりと歩くのがここでのたしなみ。
もちろん、遅刻ギリギリで走り去るなどといった、はしたない生徒
など存在しない。
といった具合に、正に絵に描いたような（古風な）「男子らしさ」
が求められている。

過去からのこの男子学生文化気質が生徒に代々引き継がれているの

は、
彼等達の親がルルアン卒業者であることが多いという背景がある

私学ルルアン男子学院の「子弟（モーホ）」システム
この学院には「子弟（モーホ）」という学生の自主運営のシステムがある。

これは、清く正しい学院生活を受け継いでいくために、
兄である先輩が弟である後輩を指導する（男子としての「躾」をつける）もので、
この「兄弟の契り」は精霊像の授受によって成立。
1人のお兄さまに対して、弟になれるのは1人きりなので、
契りを交わしたことで、2人は1番親しい間柄だと周囲から認めてもらえる。
このシステムは創立当時より存在し、連綿と受け継がれてきた。

私学ルルアン男子学院の生徒会
この学院の生徒会は「山薔薇会」といい、
青・白・緑の3薔薇さまと呼ばれる3人の幹部によって運営される。
3薔薇さまたちはそれぞれ、「青薔薇さま（モホ・ダンディズ）」、
「白薔薇さま（モホ・ブラザーズ）」、「緑薔薇さま（モホ・ヤングブラザーズ）」と呼ばれ、
自分たちの弟（モーホ）をアシスタントとして生徒会を運利している。

薔薇さま方の弟たちは、そのまま次代の幹部に持ち上がることが多いため、
次に咲く薔薇、すなわち「穴（ボックス）」と呼ばれる。
（各々、「青薔薇の穴（モホ・ダンディズ・ボックス）」、
「白薔薇の穴（モホ・ブラザーズ・ボックス）」、
「緑薔薇の穴（モホ・ヤングブラザーズ・ボックス）」）

「山薔薇の会」の拠点は校舎からの離れにある木造二階建ての「薔薇の館」で、
ここで生徒会の運営が進められている。

私学ルルアン男子学院の制服
緑を一滴落としたような光沢のない黒い生地を使用していて、どこまでも上品。
白のラインが一本入っているアイボリーの漆黒カラーのブレザーとなってる。

上着はブレザー、そしてネクタイには各学年を示す色が指定されている。
ズボンはストレートでスマートさが強調され、
漆黒の靴を全員履いている。

以上が私学ルルアン男子学院の入学案内です。
麗しき男子生徒となれる様に頑張って下さい。
ごきげんよう♪

1.　精霊様がみてる
　ある朝、精霊像の前で、ジュリオは自分そして全校生徒が憧れる先輩
“青薔薇さま”ことヴィトリオに声を掛けられ、曲がったタイを直してもらう。
その後、お礼を告げに薔薇の館を訪れたジュリオは、
ヴィットリオにいきなり兄弟(モーホ)の申し込みをされ、
これをきっかけに山薔薇会のメンバーや山薔薇会が主催する学院祭の劇、
ルルアン学院の生徒会長、憧れであるヴィットリオに関わっていくようになり、

穏やかだった日常から波乱の日々を過ごす羽目になっていく……。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜
＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜

嗚呼・・ヴィットリオ様とジュリオ様の絡みは最高ですわ♪

タロウ様、早く続巻を出してください。

タロウはフュギィアの製作とヤヲイＳＳの創作に日々身体を酷使してた。
何故か精霊様もハマってしまい、早く次を出せと騒いでおられる。
どうしてこうなった・・・。

精霊様が見てる（閑話）（後書き）

簡単ですが、精霊様が見てるの粗筋です。
本編を知る方はＳＳの住人の女性のみです。

使い魔（前書き）

今回も・・・。

使い魔

タロウです。

シエスタの話ですが、この世界の佐々木翁は「烈風」で飛来したらしいんです。
いえ、シエスタにＰＣで佐々木翁の乗ってた飛行機はどれか聞いたのですよ。
そしたら零戦では無く、コレだと指差したのです・・。

烈風ですよ。

日本人でも見た事の無い、本当の幻の戦闘機。
それがこの世界にあるのです。
神ｗｉｋｉで検索したら、
横須賀航空隊所属の佐々木大尉の乗る烈風試作機がテスト飛行中に、
忽然と消えたとの経緯があったそうです。
まさか試作機が消えるなどと言う事が国民や軍部上層部に知れると騒ぎになるので、
テスト飛行中に墜落。佐々木大尉は殉職となったとか・・。

しかし零戦ならともかく烈風。
嗚呼、乗りたいです。
でも、ガンダで無いと操縦が出来ません。
墜落したら代わりは無いのですよ。

そしたらテファが私と契約出来ませんか？ですと・・。
確かに彼女も虚無の系統。

ルイズを目覚めさせていない現状なら、テファとの契約でガンダが貰える可能性は高いです。
んじゃ頼みますか・・・。

飛行機以外ならガンダは別に必要無いのですが、飛行機だけはそうも行きません。
何せプロのパイロットになるには相当の訓練と資格が必須。
いかに魔法チートでも飛行機だけはお手上げです。
墜落したら飛行機も自分もオシャカですからね。

「我が名はティファニア・ウエストウッド。五つの力を司るペンタゴン・・」

テファの詠唱が進むと、彼女の前とオラの前に輝く鏡が・・・。
迷わずその中に入り、鏡から出ると、目の前には優しい妹、テファが・・・。

「お兄様、私と契約して頂けますか？」

「モチロンだよ。テファ。」

テファがオズオズと前に進み、オラの口と口付けをしてしばらくすると・・・。

ヤッパ痛てーな。
左手のルーンが刻まれる痛みは経験済みだが、ハンパねー痛みです。
オロ・・・・。

何故、胸も痛むの??
まさか、ダブルフィーバー??

想定外の痛みにオラは意識を手放してしまったのです。
テファやマチルダ、シエスタの叫び声を聞きながら。
数刻は気絶してたでしょうか・・。
オラは自宅のベッドに寝てたのです。
周りにはシエスタ、テファ、マチルダが居ます。
ワルドは追い出されたそうです。

「お兄様、大丈夫ですか?
本当にすいませんでした。まさかこんな事になるとは・・・。」

「タロウ様、ムチャはいい加減にしてください。
私達を置いて逝くつもりだったのですか?」

「ご主人様、シエスタがあんな話をしたばかりに・・・。
本当に申し訳ございませんでした。」

等々・・。
彼女達の涙の訴えを聞かされるハメとなりました。
大丈夫だからと、彼女達を制して起き上がると・・・。
左手には前世で見慣れたガンダのルーン。
そして胸のは・・・。

こりゃアレだよね。
リーヴスラシル。
ブリミルめ。まだ諦めていないのか？
まあこのルーンに関しては秘密にしておくか・・・。
「よっし。現状はすべて把握出来た。
シエスタ。悪いがデルフを持って来てくれないか？」
「喋る剣様ですね。少しお待ちを・・・。」
シエスタは部屋を出て、デルフを持って来てくれたのです。
「オイ、相棒。どうしたんだい？」
「デルフ、悪いがオレのルーンを感じ取ってくれないか？
それと皆、少しコイツと話があるので、部屋を出て欲しい。」
彼女達は黙ってコクリとすると、部屋から出て行ってくれた。
そしてオレは何も言わずに、デルフを握ると・・・。
「おっ、相棒、またガンダを刻んだんだな。それと・・・。」
デルフは固まってモノを言わなくなった。
やはりブリミルから何かを指令されているのだろう。
「デルフ、何も言わなくていいから、今からもオレの相棒で居てくれるか？」
「・・・悪りぃ。相棒。

どうしてもオレっチも言えない事があるみたいだよ。
オレの相棒はテメーだけだぜ。」

「ウン。今度死ぬ時は一緒に棺おけに入って土に帰ろうぜ。」

デルフとゲラゲラと笑いながら、次の死に付いてデルフと語り合ったのだ。
それにしてもリーヴスラシルか・・・。
今回のルーンは何が出きるのだろ・・・。

タロウはダブルルーンをＧＥＴＴした。

使い魔（後書き）

やはりルーンは必要って事でテファと契約しました。
ガンダはともかくリーヴスラシルはどう言うルーンになるか。
このＳＳのリーヴスラシルもオリジナルのルーンとします。

幻の戦闘機（前書き）

いよいよ烈風と対面します。

幻の戦闘機

タロウです。
前回はルーンの痛みで気絶してしまいしたヘタレです。

シクシク・・。

さて、今回はシエスタの田舎、タルブ村に来ています。
もちろん烈風と出会うためです。
いかなチートでも無から幻は生み出せません。
ましてや烈風はすべてが僅かな写真とデータが残ってるのみです。
何故日本は敗戦時に、
この素晴らしい芸術品を後世に残さなかったのかが、悔やまれます。
ええ、芸術ですよ。コレは・・。

ピンと張り伸ばし、折れ曲がった弱逆ガル翼。
力強い四翔プロペラ。
そして大馬力を象徴してる巨大なエンジン。
コレが実戦に出てたらな・・と考えた日本人が未だに多いのも頷けます。
ベアキャットならともかく、Ｆ６Ｆなら簡単にカモに出来たと思います。

「タロウ様・・・。」

「あ。あぁぁ・・・。
すまん。感動のあまり呆けてしもた。
シエスタ。おじいさんの墓とか形見はあるの？」

「ええ、もちろんあります。」

シエスタに墓を案内して貰うと神ｗｉｋｉで検索した情報通り。

佐々木武雄海軍大尉、異界に眠る。

昭和七十四年夏

シエスタの爺ちゃんて五年前まで存命してたんだ。

惜しい事したな。

色々と聞けたと思うのに・・。

「シエスタの爺ちゃんて五年前まで生きていたんだね。」

「どうしてお分かりになるのですか？

確かに五年前に祖父は亡くなりましたけど。」

「昭和の元号で分るよ。

今は平成と変わったけど、爺ちゃんは昭和までしか知らないもんね。

でもコッチの世界で五十四年も頑張ったんだよね。

大変だったと思うぞ。」

「そうですわね。

ココにあの竜の羽衣で舞い降りたと聞いていますが、

二度と飛ぶ事は無かったので、嘘つき呼ばわりされたそうです。」

「燃料が無ければ、どんな飛行機も飛べないよ。」

「そうだったんですか・・。

タロウ様なら飛ばせるのですね。」

「ウン。
そのために痛い思いしてガンダのルーンを貰ったんだよ。」
シエスタの自宅を訪れ爺さんの遺品を見せて貰うと・・。
スゲ・・。
烈風のテスト飛行の状況とか試作設計図、その他のお宝がゴマンと眠ってました。
コレって三菱に差し出したら凄い騒ぎになるだろうね。
何せ、青写真の三面設計図と写真、想像図しか残されていないもんな。
（実際に三菱航空機の資料室で見て来ました。）

「コレって借りてもいいかな？」

「私達では何の価値も無い紙ですが、祖父は墓の墓碑が読める人が来たら、
渡して欲しいと遺言していました。
ですからそれはタロウ様のモノです。」

「そうですか・・。では必ずコレはお爺様の心に報いる形にして見せます。
この書類は我が祖国、日本の誇りの固まりですから。」

「ニホン・・。祖父も良くワインに酔うとニホンに帰りたいと泣いていました。
何らかの形でも帰れるなら、帰してあげてください。」

「確約は出来ませんが、努力して見ます。」

その夜はシエスタの家族に歓待され、大騒ぎとなってしまった。
夜中にシエスタが夜這いに来たり、マチルダとテファがケンカしたりと、
中々カオスな夜だった・・。

そして翌日。
タルブの村にゴロゴロと転がってるワインのタルを十個位譲ってもらい、
その中にハイオクガソリンを練成。
大体１２０オクタンのガスにした。
オイルも一タル作ったから足りるだろ・・。

燃料を補給する前に烈風の現状をガンダで確認。
バッテリーが上がってるのと、ガス切れ以外は異常なし。
固定化の魔法がかけてあったので、錆とか腐りは一切ナシ。
イナーシャースターターが無かったので、クランクに噛み付く形状のスターターを練成。
コレで起動出きるべ・・。
バッテリーは現物を元に新品を練成。
燃料とオイルを補充して、ワルドにイナーシャーを回して貰う。

「イナーシャー回せ！！」

ヒューーーンと言う音と共にクランクが勢い良く回りだす。

一定の回転数に上がったのを確認し、

「前　離れ。」

ワルドが素早くイナーシャースターターを放す。

「コンタクッ。」

ヴァリヴァリと言う轟音と共にハ４３型エンジンは六十年の眠りから目覚める。

「ウヒョー、やはり二千馬力は伊達じゃ無いわ。
絞っててもズルズルと動くよ。」

弱アイドリングでスルスルと動き出す烈風に村の人は、

「タケオ爺の言ってたのは本当だったのだな・・。」

と、感慨深げに喋ってたとか・・。

タルブの広い平原に出た烈風を風上方向に転換。
いよいよ離陸だ。

「エンジン全開。」

気合を入れてスロットルを全開にする。
操縦桿は腹に引き付けペラが地面を叩かない様にして、フラップは半開き。
二百メートルも滑走したらフワリと烈風は空に舞い上がる。
念のため車輪は格納せず、五百メートルの上空で各部のチェック。
エルロン、ラダー、その他を念入りに調べる。
それから車輪を格納。
低空をフライパスしてから、烈風はグングンと空を駆け上る。
爺ちゃんに見せるが如く・・・。

「お爺様、タロウ様がお爺様の竜の羽衣を天に戻してくれましたわ。」

シエスタは涙ぐみながら、空を仰いでたとか・・。

いや~~~！！

船でフワフワと飛ぶのとは段違いの快感ですな。
馬力はあるし、機動性は充分。
戦いに間に合わなかったのが惜しまれますよ。
烈風たんは・・。

オラは心行くまでその日は飛びまくってしもた。

タロウは烈風を手に入れた。

幻の戦闘機（後書き）

烈風の現物は本当にドコにもありません。

水のルイズ（前書き）

中々更新が進みませんが頑張ります。

水のルイズ

銀翼連ねて~ 南の前線♪

タロウです。
烈風飛翔を始めて2日目。
今日は地元に帰還する日です。
ワルド達には先行してもらい、オラはシエスタを乗せて烈風で帰ります。

「お父さん、御爺ちゃんの竜の羽衣で仕事に帰れるなんて・・・。」

「シエスタ。
タロウ様にしっかりと仕えるのだよ。」

「モチロンです♪」

「ども、お世話になりました。
シエスタはキチンと面倒を見ますので、ご安心ください。」

「ヨロシクお願いします。タロウ様。」

彼女の親族やタルブ村の皆様に挨拶し、村人にクランクを回してもらい、
自分がスイッチを入れて烈風は起動開始。

「凄い音ですね。」

「そんだけ凄い力がある証拠なの。んじゃ行きまっせ。」

「お願いします。タロウ様。」

烈風は軽く滑走を開始すると、大空高く舞い上がって行く。
一路進路を魔法学院方向に向けて。
そう言えばゼロ魔では零戦ＧＥＴＴがタルブ侵攻だったよな。
用心しておくか・・。

約一時間の飛行で無事に学院に到着です。
当然、元ハ毛〝さんが飛び出して来ます。

「な、な・・・何だね。それは・・。」

「飛行機と言う機械ですよ。コルベールさん。」

「どうやって飛ぶのかね？」

「エンジンを回し、その力でプロペラを回転させ、風の力で前進させ、
揚力を翼に与えて飛ぶのですぞ。」

「フムフム・・。何となく理解出来て来たぞ。」

「後で詳しい説明を書いた書面を渡しますから。」

「そうかね・・。楽しみにしておこう。
しかしコレが飛ぶとは・・。」

コルベールさんはウンウンと唸りながら烈風を周囲から眺めてた。
ムサシでも驚いたみたいだが、コレも高速で飛ぶ飛行機。

驚くのは当然。
ギーシュや他の生徒も周囲で眺めてた。
その中にはルイズも・・・。
ヤツをどうにかしておかないと、そろそろヤヴァいね。
オラがダブルルーンになったのも、何らかのかかわりがあるのだろ。
今宵辺り精霊の皆様と相談して決めるか・・。
すると・・・。
（（（（（父上、父上の思う通りにするべきですぞ。））））
精霊ズの皆様が脳内でお話してくれるのです。
それで良いのですか？
（（（（（モチロンです。我々は父上の御心のままに働きます。））））
）
何かスゲー精霊様に信頼されてるのね。オラ・・。
まあ真名付けただけとは思わないが、それでも大した事はしてない
のに。
んじゃ決めるか・・。
ゼロ、ルイズから虚無の系統は抜き取れるよな？
（モチロンです。）
だったらルイズから虚無の系統を抜き取り、水の系統に差し替える。

（了解です。父上。）

ヤツには火も風も土も危険だ。
水なら癒し程度しか使えないから安全だろう。

オレはルイズをヴェストリの広場に呼び出し、話をする事にした。

「ルイズ、お前は魔法が使えなくて悩んでたよな。」

「ど、どうしてアンタにそんな事を言わなければならないのよ。」

「いや、オレはある切欠から精霊様と交友が出来たのだよ。
それで・・・。」

ルイズに今の使えない系統を精霊に破棄してもらい、ある系統の魔法に鞍替えしないか？
と、提案したのだ。
爆発の魔法は無くなるけどと言うと、ルイズは迷惑な魔法よりはマシと言う。

「では、ルイズ。お前の魔法を精霊様に切り替えて貰う。
精霊様が出現するから、ルイズ、キチンと挨拶するんだぞ。
無礼は働くな。」

「わ、分りました。タロウ先生。」

間違っても精霊ズの前でオラを罵倒したらエライ事になるので、
念押ししておかないとね。
さて・・・。

「精霊様、お願いします。」

（単なるモノよ。お前は魔法が使いたいのか？）

「精霊・・様で宜しいのでしょうか？
私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します。
私は幼い頃から幾多の有名なメイジに魔法を教わっても未だにアンロックも使えない、
ダメメイジでした。
もし使える様になるなら、どんな事でも聞きます。
どうか私の拙いお願いを聞いて貰えませんか？」

ルイズは涙を流しながら訴えたのだ。

（タロウ殿、いかが致しましょう？）

「彼女はまだ精神が幼い。何とか危険の無い範囲で魔法を与えてください。」

（承知した。単なるモノよ。
タロウ殿からの願いがあるから聞き届けてやるのだ。
今後はタロウ殿に感謝して生きるのだぞ。）

「誠ですか？精霊様。
願いが適うなら、私はどんな試練にも耐えられます。」

ルイズは幼い頃からゼロと呼ばれ蔑まされて来た過去を思い出していたのだろう。

魔法が使えるなら泥でも舐める覚悟がある。

「ルイズ。
今から精霊様がお前に要らぬ爆発魔力を抜き取る洗礼を授けられる。
そして新しい魔力を注入して下さる。」

「分りました。タロウ先生。」

「真摯な気持ちで心を無にして直立していなさい。
目は瞑るのだぞ。」

ルイズはコクリと頷き、目を閉じる。

虚無の精霊はルイズの身体に宿る己の分身の魔力をすべて抜き取り、
次いで水の精霊が微力な魔力を注ぎ込む。
これで水のドットメイジ、ルイズが完成したのだ♪

（終わったぞ、単なるモノ。）

ルイズはオズオズと目を開ける。
そして・・。

「身体が軽い。イライラしなくなってる・・・・・。」

ルイズがヒステリー気味だったのは、魔法が使えないストレスと虚無の影響も
あったのかも知れない。

「ルイズ、今、水の精霊様が自分の魔力をキミに注いでくれた。
水の魔法のドットの詠唱は分るよね？」

「分ります。タロウ先生。」

「ウォーターを唱えて見なさい。」

ルイズはウオーターと軽く唱えると杖の先端から水適がシタシタと零れ出した。

ルイズは初めて成功した魔法に感動してた・・。

「出来ました。タロウ先生。

水の精霊様。ありがとうございます。」

ルイズは土下座せんばかりに精霊に感謝してた。

微力な魔力を注いだだけなのに・・。

（単なるモノよ。タロウ殿に感謝するのだぞ。

我は単なるモノには普通は関わらぬ。

タロウ殿の頼みだからこそ聞いてやったのだ。）

「モチロンです。精霊様。そしてタロウ様。

本当にありがとうございます。」

「部屋に帰ったら自分の使い魔ペソペソと契約してごらん。

彼もキミと契約出きる状態になってると思うぞ。」

「本当ですか？ではすぐに部屋に帰り、ペソペソと契約して見ます。

」

ルイズは再度、精霊とタロウにペコリと頭を下げるとペソペソの居る女子寮に

ダッシュで駆け出してた。

コレでルイズが虚無に目覚める事は永劫に無い。
テファは魔法自体を封印させるから、問題ナシ。
後は・・・。
青髭とロマリアか・・・。
厄介だな・・・。

ルイズは虚無を喪い、水のドットメイジとなった。

水のルイズ（後書き）

ルイズを虚無から水に変えました。

契約（前書き）

ルイズ視点です。

契約

私の名は
ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
花も恥らう十六歳よ♪
チョット・・誰？
鼻も恥らうとか大笑いする人・・。
そこに並びなさい。鞭でぶってあげるから・・。
私は子供の頃から魔法が使えなくて色んな人からバカにされて生きて来た。
それこそ平民の使用人からもバカにされてた位。
モチロン、面と向っては言わないけど、陰でコソコソと陰口を叩かれてた。
悔しいけど事実なので、どうする事も出来なかった。
魔法学院に入る時も学習面では成績は取れたけど、実技の魔法では・・。
ブタのマリコルヌからもバカにされる始末。
でも召還の儀式で現れた
タロウ・ヤマダと言う凄いメイジが来てからは色々と一変してしまった。
まず使い魔。
私は子供・・。

そしてタロウ・ヤマダは大人のメイジ。
それもこの国・・いや。
恐らくお母様よりも強い最強のメイジ。
オスマン校長すら怯える程のメイジなんてこの学院には一人も居ない。
そのタロウ・ヤマダは私達の教師となり、風の教師となった。
そして私には異界の生き物、ペンギンのペソペソを召還して与えてくれた。
私の求めてた使い魔・・だ。

確実に。

彼は子供程度の知能はあるらしく、掃除はしてくれる。

放り投げてた下着や衣類は籠に纏めてくれる。

そして私が泣いてる時は慰めてくれる。

他の使い魔ではしてくれない色んな事が出きる最強の使い魔だ。

彼が来てからは私の事をバカにする生徒は居なくなってしまった。
彼に触れなくなるから・・。
魔法はまだ使えないけど、そんな事はどうでも良くなってた。
彼が私を慰めてくれてるから。
でもその魔法すらもタロウ先生は解決してくれた。
彼は色んな精霊様と交友があるらしく、精霊様に私の爆発魔法を封印して貰い、私を水のメイジにしてくれたのだ。
おかげでコモンマジックは完璧に出きる様になった。
簡単なフライやその他の魔法も出きる。

本当に嬉しい。
今まで出来なかった事が出きるなんて、こんなに幸せな気分になれるの？
私はついでにペソペソとも契約出来たのだ。
彼にキスすると、彼の左手？にルーンが浮き出て、彼と思考や視線も繋がった。

「ルイズ、痛いよぉぉ・・。」

「ペソペソ・・、今の声はペソペソなの？」

「ウン。ボクがペソペソだよ。ルイズ。今日のご飯は魚の塩焼きがいいな。」

「分ったわ。ペソペソ。
このご主人様のルイズさんに任せなさい。」

「ありがとう。ボクもルイズと一緒に頑張るね。」

何と愛らしい使い魔なんでしょう。

嗚呼、お父様やお母様にも報告しないと・・。
貴方達の娘、ルイズはゼロでは無くなりましたと・・。

私は今までの人生で一番の喜びを両親に伝えるため、手紙を書き始めたのだ。

あんな騒ぎの元になるとも知らずに・・。

タロウ先生。

ゴメンナサイ・・・。

契約（後書き）

さて次回はルイズが書いた手紙で騒動が起きる話です。
どうなるのでしょ。

騒ぎ（前書き）

ルイズの書いた手紙で騒ぎが起きてしまいます。

騒ぎ

私の名はヴァリエール公爵。

ルイズの父親と言った方が諸君には通りが良いだろう。
今日は我が愛娘、ルイズから手紙が届いたのだ。
早速妻のカリーヌと共に読み始めたのだ・・・。

「貴方？ルイズが魔法が使える様になったのですって・・・。」

「ウム。長年の苦労が実ったのだ。
フムフム・・水のドットと認定されたか・・・。
良い事だ・・・。」

「私の風は受け継がなかったのですね・・・。」

「まあ仕方ないだろう。私が水だからな。
二人の子供だと言う証にもなろう。
ム・・・・・。」

「どうしました？」

「コレを見ろ・・・。」

「・・・・・・なんですって・・・・・。」

そう、ルイズは召還した使い魔の「彼」と一緒に暮らしてる。

そしてたまには寝てると書いてたのです。
彼と言う表現から、公爵夫妻は「男」の使い魔と判断してしまったのです。

「カリーヌ・・・。」

「貴方・・・。」

「学院に向うぞ。」

夫妻はすぐさま、竜籠を準備させ、護衛も連れずにルイズの居る魔法学院へと、
飛び立ったのです。

学院に着いた二人はすぐさまオスマン校長に面会。
召還されたのが「タロウ・ヤマダ」と言う人間だ事を聞き出したのです。

「おのれ・・・。我が愛娘を毒牙にかけた異界の男め・・・。」

「貴方は引っ込んでてください。
校長の話ではかなりのメイジとか・・・。

私の血が騒ぎます・・・。」

「そ、そうか・・。」

その日タロウはたまたま学院で臨時の授業を受け持ってたので、
学院に滞在してたのです。

タロウです。
久しぶりに臨時講師として学院に呼び出しを受け、ガキンチョを指導してました。
人に教えるのって大変ですね。
特にガキンチョには基礎から教えないいけません。
ガキンチョが高度な魔法を使いこなせず暴走させて死ぬ事件がたまにあるそうですが、
基礎もロクに教えず、高度な魔法を教えるからと思います。
やはり何事も基礎ですよ。
日本で起きた地震でも基礎のしっかりしてた建物は殆ど倒壊しなかったのです。
さすがにアレには耐えられませんでしたが、どうしようもありませんよ。
アレは・・。

さて、学院の講師も終わり、昼餉も久しぶりにマルトーさんトコで頂き、
しばし昼寝でもして自宅に帰りますか・・。

んごーんごー♪

気持ち良く寝てると近くに人の気配がします。
誰でしょうね？
人の睡眠を妨げる人は・・・。

「貴方がタロウ・ヤマダ殿ですか？」

オラを呼んでるみたいです。
眠いのですが・・・。

「タロウ・ヤマダと言うメイジは貴方では無いのですか？」（怒り）

「・・・どちら様でしょう？
見ての通り、疲れを癒すための昼寝タイムなのですが・・・。」

「私の名はカリーヌ・デジレ・ド・マイヤール。
ルイズの母です。」

「おお、ルイズ嬢の母君でしたか。いや失礼しました。
私がタロウ・ヤマダです。」

オラは起き上がるとにこやかに彼女に向かい挨拶をした。
しかしあの方、どうして顔の筋肉がヒクヒクとしてるのでしょ？
まるで怒りを抑えてるみたいな感じですけど・・・。
オラが何かしますたか？

「貴方がルイズの召還した使い魔ですよね？」

「ええ、っと・・・。
召還はされましたが使い魔では・・・。」

「もういいですね。」
彼女はそう言うとカッタートルネードをオラに向って放ったのです。
瞬間的にオラは鉄の壁を練成。
何とか不意打ちは避けられました。

「いきなりですね。
何故自分がアンタに攻撃を受けなければならないのですか？」

「フフフ・・。
さすがですね。
手抜きとは言え、私のカッタートルネードを止めてしまうとは。」

「自分に何も非が無いのに、攻撃を受ける言われもありませんぜ。」

「自分に非が無いと？？」

「ハイ。」

「私の愛娘を毒牙に賭けてて、良くもまあ・・・。」

何かこのオカン勘違いしてるのでは？
前世と違い、ルイズとは契約すらしていないのだど。
だが、このオカンには通用しない。
何か手違いがあったのは確実だが、黙って殺される筋合いも無い。

「一応確認しときますけど、殺す気で攻撃されるのですよね？」

「モチロンですわ♪

戦いに手抜きは許されません。」
「では殺される覚悟はお持ちですよね。」
「当然ですわ♪
さ、もういいでしょ。かかって来なさい。」
それからはもう言葉は必要無い。
殺し合いの始まりだった。
ヤツがカッタートルネードを放てば、オラは氷の氷河で固める。
そして空から岩石の大群で攻撃を始め、学院の広場は大騒ぎとなってた。

「ど、どうしてお母様がタロウ様と・・？？」
ルイズはヴィストルの広場で母とタロウが戦ってると聞き、真っ青になって駆けつけてた。
そこへ父の公爵が現れたのだ。
「おお、私の小さなルイズ。
無事だったのか？さ、悪魔は妻が倒してくれる。
荷物を纏めて家に帰ろう。」
「あ、悪魔ぁぁぁぁ？？？」
「お前は騙されてるのだ。ルイズ。
魔法を使える様にしてもらった恩を身体で支払うなんてバカな事は止めておきなさい。
すべては夢の世界の出来事。

家に帰り、立派な婿を取ればすべて忘れてしまう。」

「お父様、私は今も純潔ですが？」

「へ？？？？」

「何か手違いがあったみたいですが、私の使い魔はタロウ先生ではありません。
この「彼」です。」

傍には使い魔の温泉ペンギン、ペソペソが立ってた。

「よお、お前がルイズの父親か。ヨロシクな♪」＜ルイズにはこう聞こえてます。
「クエックエックエッ。」

「へ？？？？？」

「ペソペソですわ。とても賢い使い魔のペンギンです。」

「へ？？？？？？？？」

公爵はルイズの話を聞き、我々はとんでも無い勘違いをしてたと始めて気づいた。
だが戦いはもう始まってしまってたのだ。
あの妻を止める事は私にも不可能。
そして対峙してる彼も妻に劣らず凄まじいメイジと見た。

どうしよ・・・・・。

騒ぎ（後書き）

バトルは続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8151z/

キモ男　カンバ〜〜ック♪

2012年1月14日20時25分発行